

世の末

第8号



1971

鹿児島県立加世田高等学校
生 物 部

表 紙 説 明

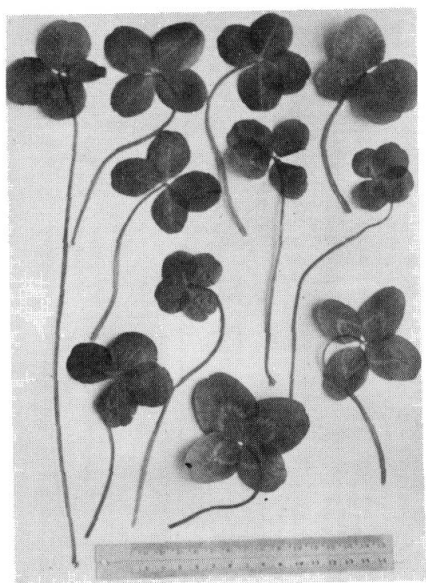
フキ(キク科)〔*Petasites japonicus Maxim*〕

フキのトウは、早春から咲き出して、春の風物詩となっているものである。「来てみれば、雪消の川べしろかねの柳ふふめり落の台も咲けり」(斎藤茂吉)というあのフキのトウが、春の日のよくあたる堤防などに幾つも並んでいる姿は、いかにも春がきたという感じである。

本種は、山地路傍に生える多年草で雌雄異株、葉は腎円形で巾15~30cm、花後地下茎の先に出る。頭花は3-5月頃花茎の先に房状につく。花茎は一般にフキのトウといい多くの鱗片葉をつけている。最も大形のフキは、アキタブキと呼ばれ秋田県の名産として知られている。また本種は、葉柄および若い花茎を食用または、薬用にする。

分布は、暖帯(本州、四国、九州、朝鮮、琉球、中国)に産する。

(表紙の図は、校内で採集した生品を、部員の阿久根君が、実物大に描いたものである。)



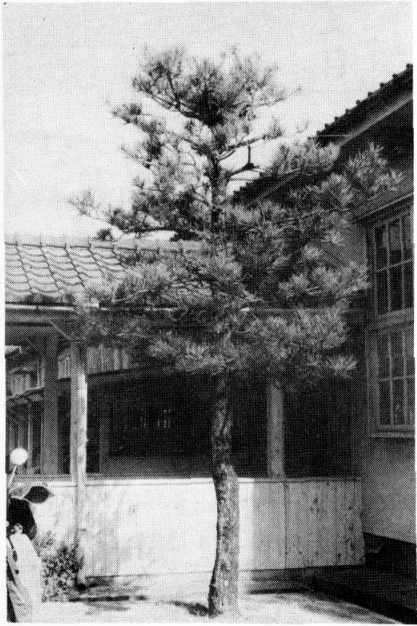
1. 四葉のクローバー
(P 46参照)



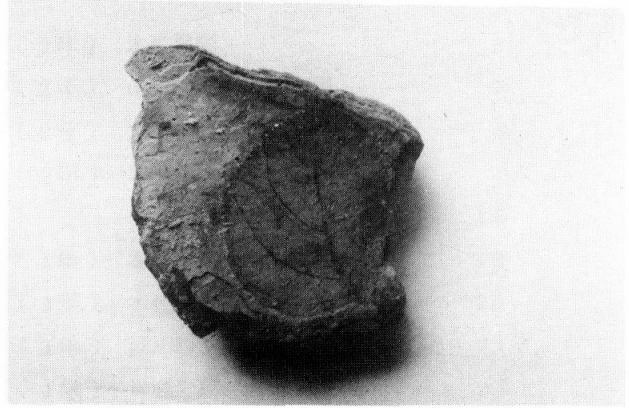
2. オオタニワタリ
(P 48参照)



3. ベニバナボロギクとダントボロギク
(P 48参照)



4. 記念の黒松（P11参照）



5. 中山の植物化石



6. 長屋山 シダ採集・リュウビンタイ

目 次

ネムノ木にくるアゲハチ ♪ ウ	(1 年)	木佐貫彰	3
ホオキオオバコの種子の発芽と散布	(2 年)	山口秋生 大工和清	7
ネムノ木の落花と果実	(2 年)	大工和清	8
ハナビシ草とヒナゲシ草の観察	(2 年)	本田ゆみ子 下園弘子 前田栄子	16
ツルボの結果	(1 年)	本坊徳光	18
山頂に集まる蝶類	(1 年)	木佐貫彰	20
ニワトリの解剖	(1 年)	浜川睦丈	21
文化祭の植物展示会	(1 年)	神野辰郎 永田洋子	24
味覚に関する 1 考察	(2 年)	中間睦子	27
気泡の発生と光合成の実験	(1 年)	金竹美代子 阿久根美智代	28
1970年の南薩の蝶類記録	(2 年)	山口秋生 阿久根雄二	
	(1 年)	木佐貫彰 浜川睦丈	30
秋目採集記	(1 年)	浜川睦丈	41
ツマベニチ ♪ ウを求めて	(2 年)	山口秋生	42
1970年度文化祭反省	(2 年)	阿久根雄二	43
佐多採集記	(1 年)	浜川睦丈	44
第 1 回採集会 大浦～秋目	(1 年)	神野辰郎	45
第 2 回採集会 笹連	(2 年)	阿久根雄二	46
1970年度生物日誌	(2 年)	山口秋生	49
思い出	(3 年)	田中洋海	51
俗説薩隅植物誌 (3) 津貫の巻 後編	(顧問)	佐方敏男	52
薩摩半島南西部の植物化石について	(顧問)	山本英司	86
校内樹木の種類		生物部	
〔 短 報 〕			
№ 1 久木野採集記	(2 年)	山口秋生	6
№ 2 大当採集記	(2 年)	山口秋生	15

No. 3	八瀬尾の滝採集記(Ⅰ)	(1年)	浜川睦丈	29
No. 4	八瀬尾の滝採集記(Ⅱ)	(2年)	山口秋生	30

生物部員名簿

他校交換生物機関誌紹介	17, 23, 29
-------------	------------

ネムの木に来るアゲハチョウ類 (第4報)

1年 木佐貫 彰

今年も部室前のネムの木が、薄桃色の花をはこぼしはじめた6月15日、昨年にひき続き、ネムの木に飛来するアゲハチョウ類について観察をはじめた。しかし、実際やってみると、思ったより根気のいる仕事で観察時間が徹底できなく、蝶のたくさん集まった日などは、数えるのが困難で記録が正確でないのが残念です。目的は前回と同じく次のようである。

- ① 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数の概要を知りさらに前回のものと比較してみる。
- ② 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数割合より、どのアゲハチョウ類が最も、加世田市近郊に多いか調べる。
- ③ 各アゲハチョウ類の飛来数より発生時期を調べる。
- ④ 朝、昼、夕方時間の違い、天候の変化、などの違いやその他のことから、飛来個体数が変化するか。また、変化するとすれば、その直接的原因は何かを調べる。またこれよりさらにその習性を検討してみる。

また、方法はできるだけ1969年度のものに合わせて比較しやすくしてみたがその結果にたいぶ変動が見られることは興味深く、さらにこれからの継続的観察を希望したい。

＜観察方法＞

・期間 1970年 6月15日～7月8日

・時間 [A] 8:30～8:35

[B] 13:00～13:05

[C] 16:50～16:55

・手段 ネムの木の花に飛来したアゲハチョウ類を肉眼または双眼鏡で観察する。

＜観察対象アゲハチョウ＞

アゲハ

ジャコウアゲハ

クロアゲハ

ナガサキアゲハ

モンキアゲハ

なお、その他(ことにアオスジアゲハはよくネムの木に飛来していた。)のアゲハチョウ類は前回までの観察結果と比較できないため除外した。

第1図

月 日		15	16	17	18	19	20	22	23	24	25	26	27	29	30	1	2	3	4	6	7	8	計
天 気	A	●	◎	①	●	◎	●	◎	●	●	◎	◎	●	●	①	①	◎	①	①	①	①		
	B	●	◎	①	◎	◎	●	●	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	①	①	●	◎	①	◎		
	C	●	①	①	●	◎	●	●				●	◎	◎	◎	◎	◎	◎		①	◎		
気 温	A	25	22	22	23	24	22	21	21	21	26	24	25	24	26	25	24	27	28	25	25		
	B	25	25	27	24	27		22	22	24	26	25	25	28	30	26	23	30	30	26	23	27	
	C	24	25	29	29	25		22		24		25		29	28	26	28	30		26	27	22	
ア ゲ ハ	A			4		4		2			16	2		3	13	8	13	4	1	1	2	2	75
	B		6	7	7	15			2	4	5	4	3	3	9	15	9		2	1	2	1	95
	C		3	7		4		1		4			4	9	5	17	8	22			2		86
ジャコウ	A					1			1		5		2	4	2	8	9	3		1	4		40
	B							1	2	7	1	5	9		2	3	6			2		1	39
	C			1				1		6		1	14	8	5	3	3	1		2	2		47
ク ロ	A					2		1		1								1	1	2			8
	B		2			4		1	2	3													12
	C						2	2															4
ナガサキ	A															1			2				3
	B																		1				1
	C																				1		1
モンキ	A										1			1					1	1			4
	B														1								1
	C																						0
計			11	19	7	30	2	9	7	25	18	12	32	28	37	55	48	31	8	10	13	4	416

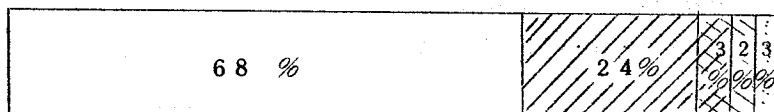
(1) 本年度の、各アゲハチョウ類の6～7月にかけての発生個体数の概要と前回との比較

	1970年度	1969年度	1967年度	1966年度
アゲハ	256	102	124	59
ジャコウアゲハ	126	104	43	19
クロアゲハ	24	14	48	3
ナガサキアゲハ	5	28	15	2
モンキアゲハ	5	5	10	3

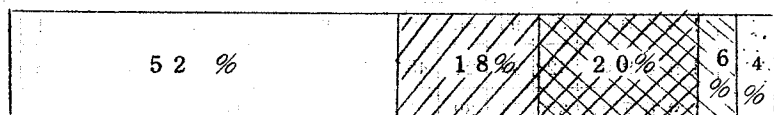
＜考察＞

アゲハ・ジャコウアゲハが膨大に伸びてきた。記録のあやまりということを考慮に入れたとしても、これは認めざるを得ない事実である。これに反し、ナガサキアゲハが表の上では減少したが、観察時間以外にも、飛来しているのを認めているので、クロアゲハ・モンキアゲハ共に、安定した発生をしていると考える。（1966年度は、12日間しか記録していないため、比較の対象としては不適当と思う。）

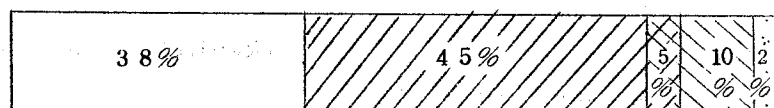
第2図 1966年（総飛来個体数 89頭）



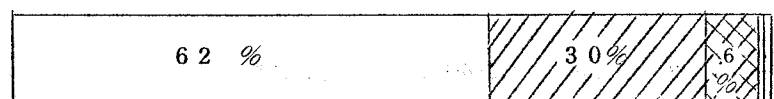
1967年（総飛来個体数 240頭）



1969年（総飛来個体数 273頭）

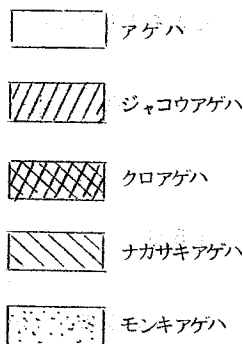


1970年（総飛来個体数 416頭）



＜考察＞

ナミアゲハの割合が減少しつつあったが今年は大幅に伸び、ジャコウアゲハと合わせると、全体の9割を示める。実際、我々が採集するときよく目につく種ではあるが、他の3種もかなり多く見うける。これはクロ・ナガサキ・モンキ共にネムの木に吸蜜しにくい種とも考える。実際モンキアゲハなどは、蝶道のあることを竹田神社で



確認した。どの種も、安定した発生をしたと思う。(この他に加世田市近郊には、キアゲハ、ア
オスジアゲハ、ミカドアゲハ、カラスアゲハが分布している。)

(3) 各アゲハチョウの飛来数による発生時期

この件は飛来数が天候によりかなり左右されるために、発生時期を決めるのは不可
能であるかもしれない。しかし、最初に書いた表より推察すると大体7月24日～
8月3日あたりだろう。しかし飛来数の数がアゲハとジャコウアゲハではほぼ全部を
示めているので他のアゲハチョウ類のとはかなりずれると思う。

(4) 飛来個体数の変動について

・時間(A・B・C)による違い

第3図

種類 年 時間	アゲハ			ジャコウ			クロ			ナガサキ			モンキ		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
1970年	75	95	86	40	39	47	8	12	4	3	1	1	4	1	0
1969年	42	39	21	45	31	48	7	5	2	14	9	5	2	2	1
1967年	32	58	39	5	14	23	3	16	29	4	4	5	3	3	4

・天候による違い

第<1図>より、どのアゲハも共通して、雨天の日は飛来数が激減するようである。
また、風、気温にも影響すると思う。

・雌雄の別、はっきりしないが、ナガサキアゲハなどは雌のほうがよく吸蜜していた。

〔反省〕

1日、3回5分間ずつ頭数を数えるのは確かにめんどくさい。でも、ところどころに記
録もれのあるのは残念だ。今年の内容は去年ののに今年の結果を付け加えたもので、記録
がないのはさみしい。でも今年で4年目で資料も多くなったので、来年もつづけて、先輩
達の試みたことをより深く追求してみたい。

<短報I>

久木野採集記

1970年2月15日 晴れ

2年 山口秋生

そろそろモンシロチョウはいないかと思い、自転車で久木野までいった。8時45分に小湊を出
発し、途中津貫で、ズボンが破れたが友人のところまでつくろって、やっと久木野に10時30分
に着いた。この間1頭も蝶は見なかった。久木野小の先の田で、モンシロチョウを2頭目撃しお
もいきり走って1頭採集した。

モンシロチョウ 1wit 1coll

ホオキオオバコの種子の発芽と散布

2年 山口秋生・大工和清

1964年に発見した野生株1株から採種したホオキオオバコの種子を、発芽試験器と鉢播を用いて、5月27日にそれぞれ100粒と50粒播、発芽状況を佐方先生が調べた結果は次の通りであった。

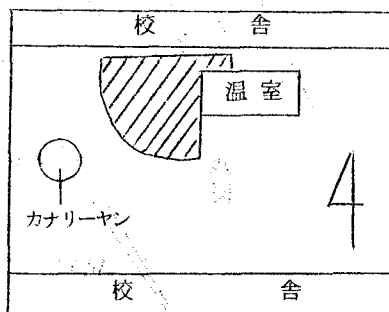
発芽月日 方法	3/6	4/6	5/6	6/6	8/6	10/6	11/6	13/6	16/6	17/6	計	発芽率
試験器内	4	0	3	21	11	10	7	11	10	7	84	84%
鉢を入れた 鉢	37	11	0	0	0	0	0	0	0	0	48	96%

番号	距離(m)	番号	距離(m)	番号	距離(m)
1	2.35	6	3.03	11	3.53
2	2.60	7	3.22	12	3.70
3	2.80	8	3.45	13	3.83
4	2.90	9	3.45	14	3.87
5	3.00	10	3.52	15	3.90

この鉢植のものを5鉢に5
6本ずつ分植して、温室の
北西の隅の外側において栽培
したら、多くのホオキ型の出
穂をみた。5年間放置してお
いた結果、その付近の芝生地
の所々にホオキオオバコが散

生したので鉢から即ち散布中心からの距離を測定してみたら15株についての結果は右上図のと
おりであった。

ホオキオオバコが散生していた区域は右図の
斜線部分である。上図の距離を平均すると、
3.46mとなるので、この5年間に、3.46m
移動したことになり、1年間に0.59mずつ移
動したことになる。

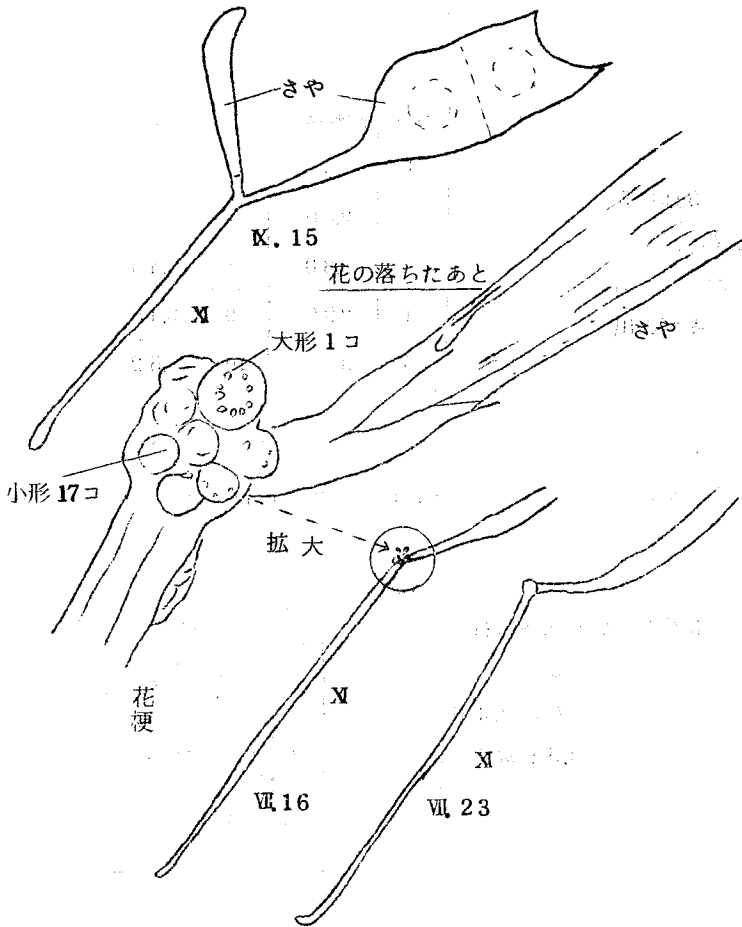


ネムノ木の落花と果実

2年 大工和清

まのせ7号に上題の調査があるが完全とはいえないので本年再び調査することにした。はじめは落花数を調べ、秋にどれだけの果実ができるかの結果率を調べるつもりでいたが、途中で変更して落花数を落花群数（即ち落花花序数）とした。花序には約17個の花が頭状に集まっているが、果実は1花序に1個、ごくまれに2個（図参照）ついているので、この調査では、

$$\text{結果率} = \frac{\text{結実数}}{\text{全花序本数}} \times 100(\%) \text{ としてみた。}$$

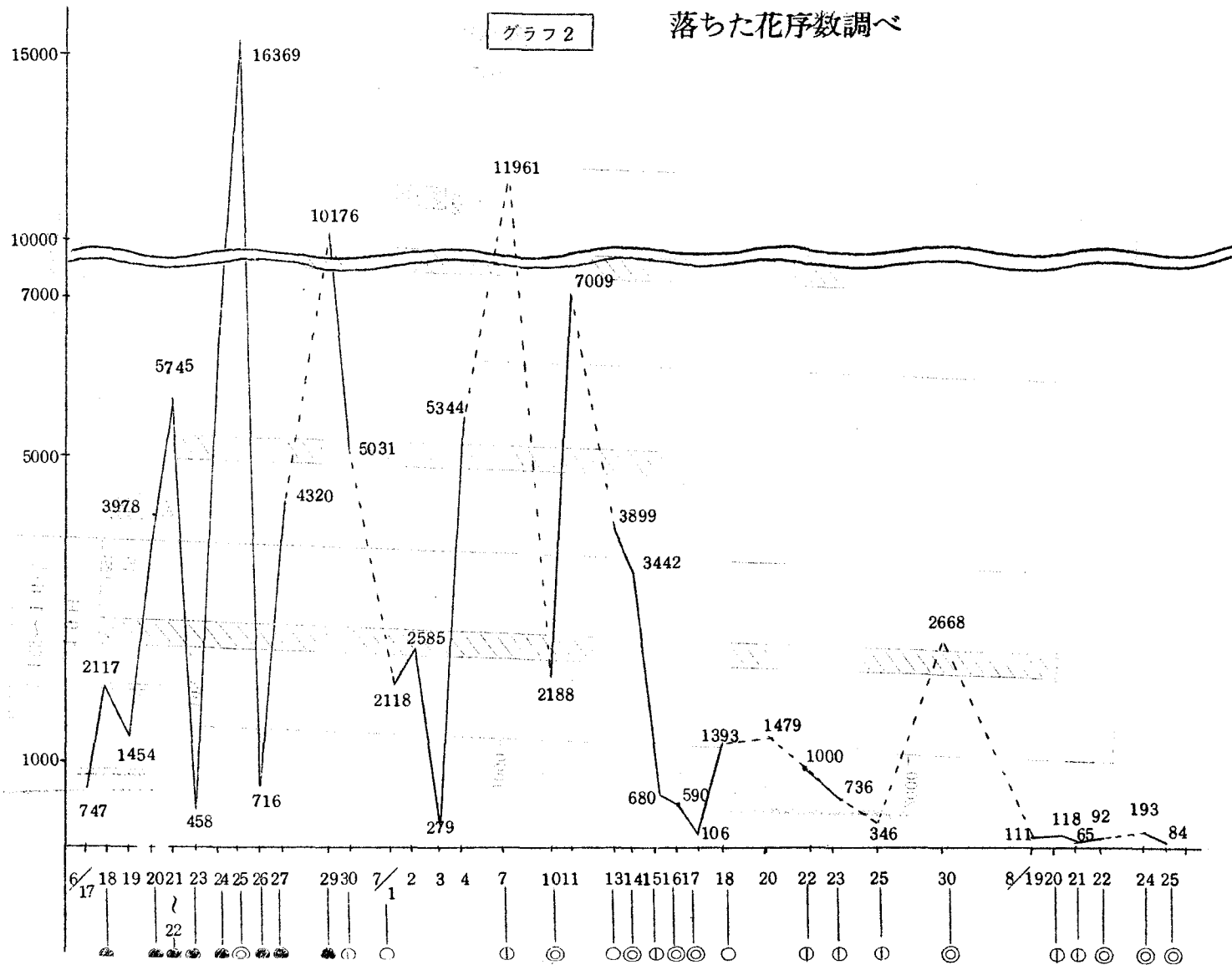


〔ネムノキのさや〕

グラフ 2

落ちた花序数調べ

- 10 -



2日間しか調べなかったがこの間落ちた総花序数とそれについていた花数を示せば(グラフ1)のようになる。これによると1花序の花数は13個位になる。しかし、柄だけのものもあったのでグラフ中に参考のため記入した。雨で多数の花が流れ去ったのかもしれないので、天気の良い日と比較してみたらよかったと思う。また、午前と午後にわけて調査してみたらよかったと思う。

(グラフ2)で見ると、雨の日や降った翌日になると落花数が多く、天気の良い日はひじょうに少なくなっている。たとえば、6月と7月のころを見ると、6月25日は雨の降った翌日で、最高16369本、天気の良い日の7月1-7日は106本で最低だった。6月ごろは満開で落花数も多かったが、7月ごろになると花が少なくなり、8月ごろ果実がではじめるころになると花も少なくて、落花数もがいど少なくなつた。(落ちた花序本数を便宜上落花数何本と呼ぶ)

61日間落花総数

計 106242本

1日平均 1438本

○クロマツ(口絵写真4)

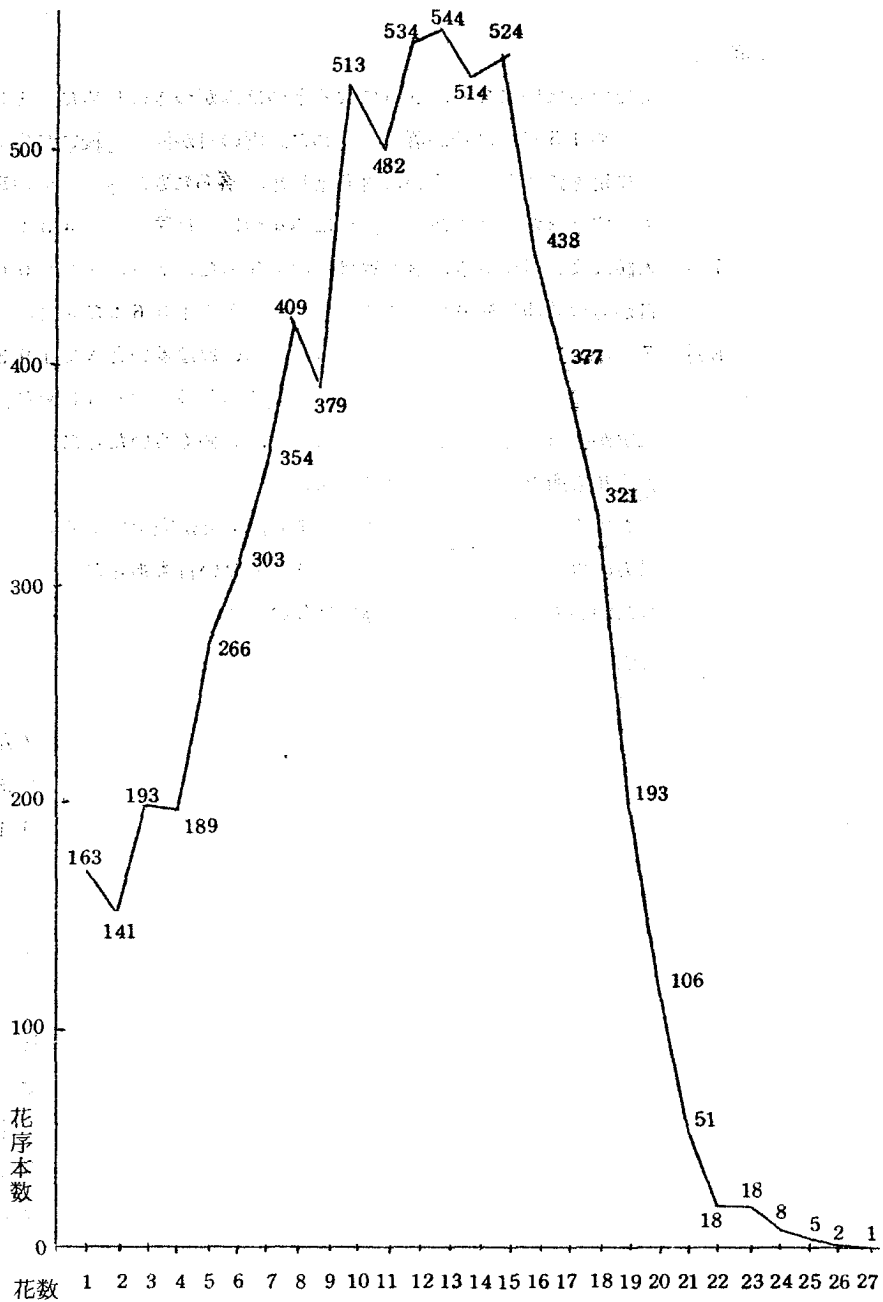
昭和24年6月 天皇の本県御巡幸の時、記念としてお手播の黒松の苗が3本、本校に配布された。そのうちの1本を昭和35年頃、現在の場所に定植されたのがこの写真の木である。

表1

1花序についていた花の数調べ

花数 月日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計	散らばっている柄	天気
6. 17	5	3	11	15	18	18	21	30	34	41	59	55	59	66	48	64	68	52	49	16	13	1	1	0	0	0	0	747	0	①
18	21	28	54	46	51	56	62	68	32	82	63	74	79	74	80	80	68	52	34	22	10	1	2	0	0	0	1	1140	977	●
19	29	25	29	27	29	40	56	53	34	56	47	70	62	74	98	87	77	59	34	30	7	4	8	2	0	0	0	1037	414	◎
20	16	12	13	11	19	15	17	30	21	33	34	33	33	24	30	31	28	37	14	11	11	5	3	2	2	0	0	485	3484	●
21~22	0	5	1	1	5	8	4	3	3	1	2	2	1	3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	41	5704	●
24	1	1	1	2	3	0	0	1	0	0	1	3	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	18	6627	●
25	33	21	26	18	34	38	52	48	49	52	56	65	67	54	47	32	26	24	12	7	5	3	2	2	0	0	0	773	15612	◎
29	0	1	1	2	3	6	16	18	24	32	32	31	39	40	48	26	14	21	8	4	4	3	0	1	0	0	0	374	9802	●
30	25	19	29	26	51	67	78	68	88	90	68	80	67	72	60	47	43	18	11	5	1	1	2	1	2	1	0	1017	4014	①
7. 1	33	24	27	39	48	41	31	61	47	71	55	59	59	50	36	18	14	16	4	3	0	0	0	0	0	0	0	736	1382	○
2	0	2	1	2	5	13	18	22	26	34	36	31	48	27	37	22	22	26	14	3	0	0	0	0	0	0	0	389	2196	◎
3	0	0	0	0	0	1	2	7	21	21	29	31	29	30	40	20	15	16	12	5	0	0	0	0	0	0	0	279	0	①
計	163	141	193	189	266	303	354	409	379	513	482	534	544	514	524	438	377	321	193	106	51	18	18	8	5	2	1	7036	50212	

(グラフ3)は1本の柄に何個の花がついていたか調べ、(表1)では日別によっても調べ、雨の日や晴れた日などによって既に花序から離れおちた花も多数あって、参考程度しかない。すなわち1~27までのひろがりがみられ、グラフでは13本のところが最高になっているが、花托(花のついていた跡)のところをかぞえたら17個のものが最も多くなっていたからこのグラフは、実際は15、6個から少し上昇した17個あたりを頂点として花数が増加し次に漸減する曲線を画くことになるはずである。

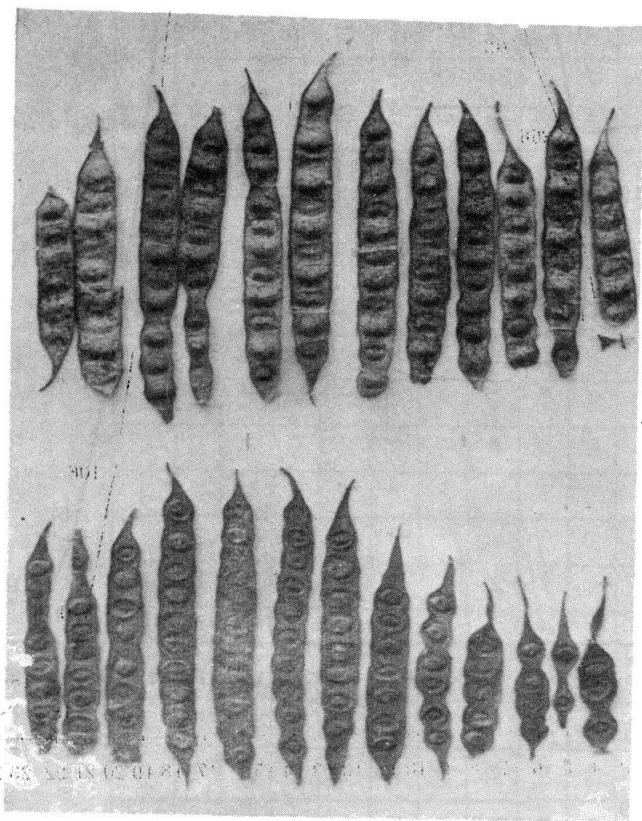


(結果率調べ)

$$\text{結果率} = \frac{231 + 39}{106242} = 0.25\%$$

(経過)

- 6月 葉でいっぱいになり、9日になるとつばみがつきはじめた。13日になると花が咲きはじめ15日には花が落ちはじめた。雨の日が何日も続いたので、下旬になると木の下に足も踏めないくらいに落ちはじめ、落ちた数だけでも柄の数だけで10000本もこすときが2回もあった。つばみをつけた花序は合計43本しかなかった。
- 7月 天候はよい日が続き、落花数は少なくなった。7日に10000本をこえたが、次の日から急激に減りはじめて、少ないときで106本だった。
- 8月 7月のときよりも少なくなり、落ちた柄の数は多いときで193本、少ないときで65本だった。そして柄だけ落ちているのが多くなりはじめた。8日ごろになると、果実がでぎはじめたが、落ちた数は2、3個くらいだった。
- 9月 もう花も所々に見えるだけになった。
- 10月 落ちてくる果実が1日に54個もあり、果実が完全であるのがあった。
- 11月 果実の落下はだいぶ少なくなり、1つもない日もあった。(ただし、嵐のため飛ばされたのかもしれないので正確ではない。)



(左図はネムノキの果実である。上段は10月と11月ころに落下したもので、下段は8月19日に落下したものを並べたものである。上段は種子がだいたい完全であり下段は写真の通り未熟で小さかった。8月に落下したもののより10月、11月に落下したものは、さやの長さが大きく、大きいもので15cmくらい、小さいもので9cmくらいだった。落下数は239個で、木に残っているものは31個だった。(11月現在)

(反 省)

はじめ花数を調べるつもりであったが、天候(雨など)のため不可能になり、途中で花梗(花序)数に切りかえなければならなかった。しかし結実が殆んど1花序には1つしかみられないので、結果率の計算にはさじつかえなかったと思う。花序(柄)の数に対して果実がこんなに少ないとは思わなかった。

(追 記)

落花調査は2月間にわたったが前半に雨天が続き落花数も多く、しかも放課後の短時間にしか行なえなかったもので、調査に困難をきわめた。しかし部員はもちろん部員以外の協力を得てようやくこの程度のものがまとまった。結果率は昨年とは落花数に換算すれば、著しい差がみられるから年によって変化があるものらしい。なお、山本先生などが1971年1月中旬、長尾山での観察では、さやは小さかったが(例えば9cm×2cm)目立つほど多くの数が見られたという。ちなみに調査した学校のネムノキは、昭和35年3月に吉峰宗昌先生(当時本校教諭)が舞敷野の山から運んで植えられたものである。

短報Ⅱ

大 当 採 集 記

10月10日 曇り

2年 山 口 秋 生

浜川と2人で、タテハモドキはいないかと思い、大当に行くことにした。途中大浦では、稲の刈り終わった田には、一面にスズメノトウガラシの花が咲いていた。大当に着き、谷川にそって登っていった。アゲハ、アカタテハ、ヒメアカタテハが花に吸蜜している。さらに登っていくとアサギマダラも目撃した。このころ、下のほうで、浜川がCatpsiriaを目撃した。途中で、ひきかえし、こんどは、下の田でタテハモドキをさがした。3頭目撃し、このうちの2頭を浜川が採集した。また、きょうは、谷川のところで、ギョボクを4本発見でき、ツマベニチョウの幼虫を4頭採集した。帰りには、小浦の港のそばの墓地でCatpsiriaを1頭目撃した。

〈採集及びに目撃した蝶〉

アゲハ +

アカタテハ +

ヒメアカタテハ 2wit

タテハモドキ 2coll

ベニシジミ ++

ムラサキシジミ ++

モンシロチョウ 井

キチョウ +

ツマベニチョウ 幼虫 4頭採集

アサギマダラ 1wit 1coll

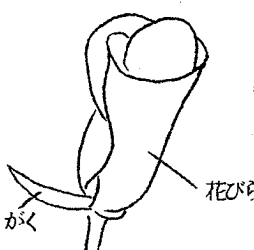
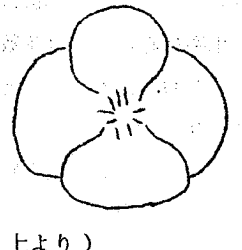
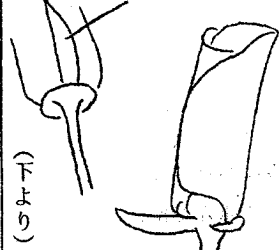
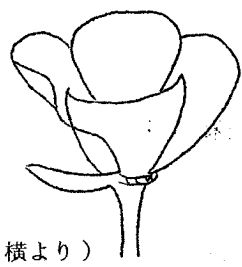
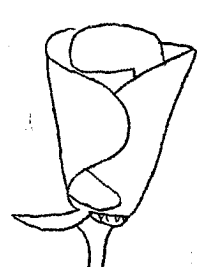
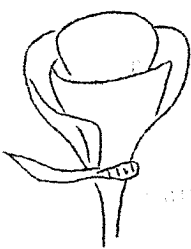
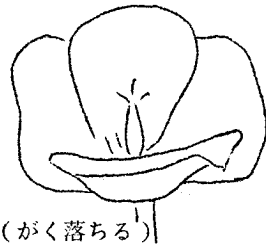
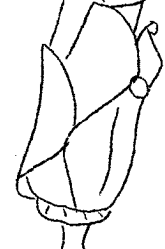
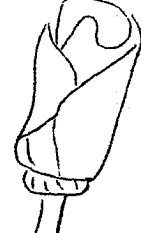
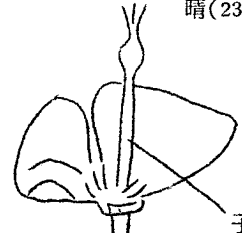
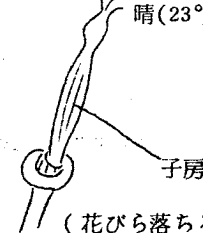
ハナビシソウとヒナゲシ花部の観察

2年 下園弘子 本田ゆみ子 前田米子

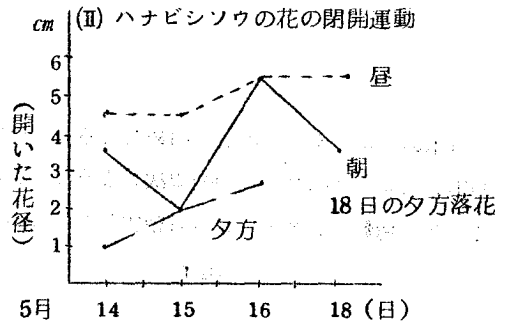
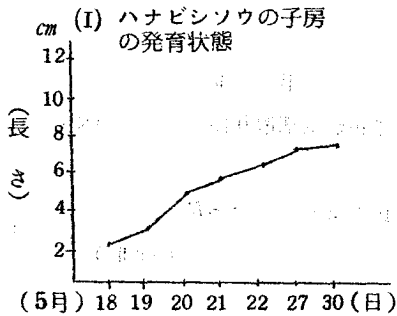
＜観察の目的＞

ハナビシソウとヒナゲシ の花の開閉運動が、なんの影響であるかを調べる。

○下の図はハナビシソウの朝昼夕方それぞれの状態を示したものです。

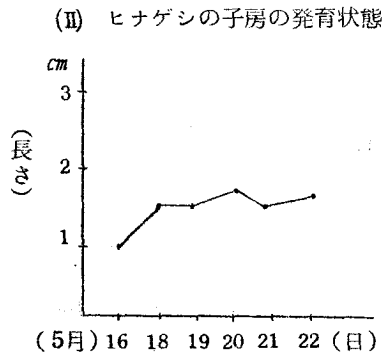
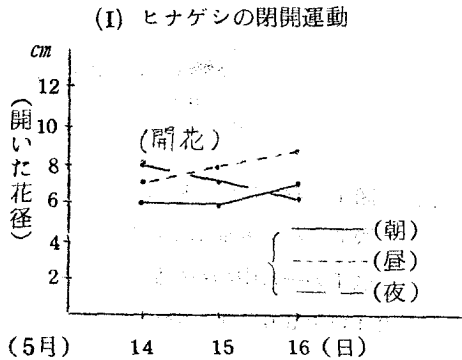
	朝 (8:30頃)	昼 (1:00頃)	夕方 (5:00頃)
五月十四日	曇 (22°) 	曇 (24°)  (上より)	曇 (23°)  (下より)
五月十五日	曇 (18°) 	曇 (22°)  (横より)	晴 (24°) 
五月十六日	晴 (17°) 	晴 (23°)  (がく落ちる)	曇 (23°) 
五月十八日	晴 (16°) 	晴 (23°)  子房	晴 (23°)  子房 (花びら落ちる)

1 ハナビシソウの観察



観察によると、Ⅱ図のようにやはり昼が、最も開花しています。これは、温度の影響が、非常に大きいからだと思います。またⅠ図は、子房の発育状態です。

2 ヒナゲシの観察



ヒナゲシ は、あまり気温などに影響されないようです。Ⅰ図は、上のⅡ図と比較すると大部異なった結果が、でました。子房は、固く、発育状態は、Ⅱ図の通りです。

<反省>

ヒナゲシ もハナビシソウも、各三株の観察を行なったのですが、途中で、花びらが、落ちたりして、うまく観察できなかった。それに、わたしたちの研究心が、たらなかったと思います。もう一度、機会があったら、もっと詳しく調べたい。

<他校交換生物機関紙紹介>

「しびっち」 第2号 第3号 鹿児島県立出水高等学校生物部
「しろだも」 Vol. 18 1970 神奈川県立小田原高等学校
「生物の世界」 Vol. 27 1970 福岡県立修猷館高等学校生物部

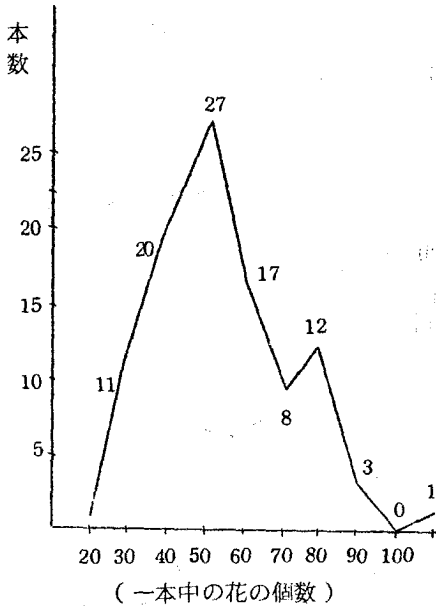
ツルボの結実

1年 本 坊 徳 光

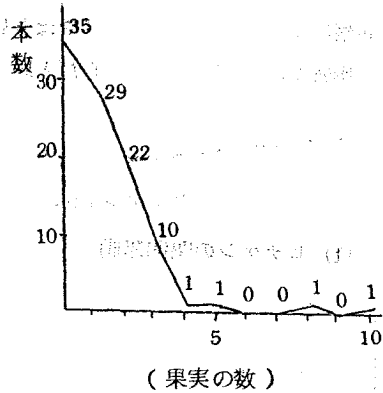
百本のツルボを、花が散り始めたころ茎から切り水にさして花が全部散り終わってからその結実の状態を調べた。その結果次のようなことがわかった。

1 花の総数 4988個のうち結実した物はわずか130個即ち3%弱であった。

(図Ⅰ)



(図Ⅱ)



※注 図Ⅰ 着花数別本数調べ

図Ⅱ 結実数別本数調べ

図Ⅰの一本中の花の個数で30は21以上30以下と読む。

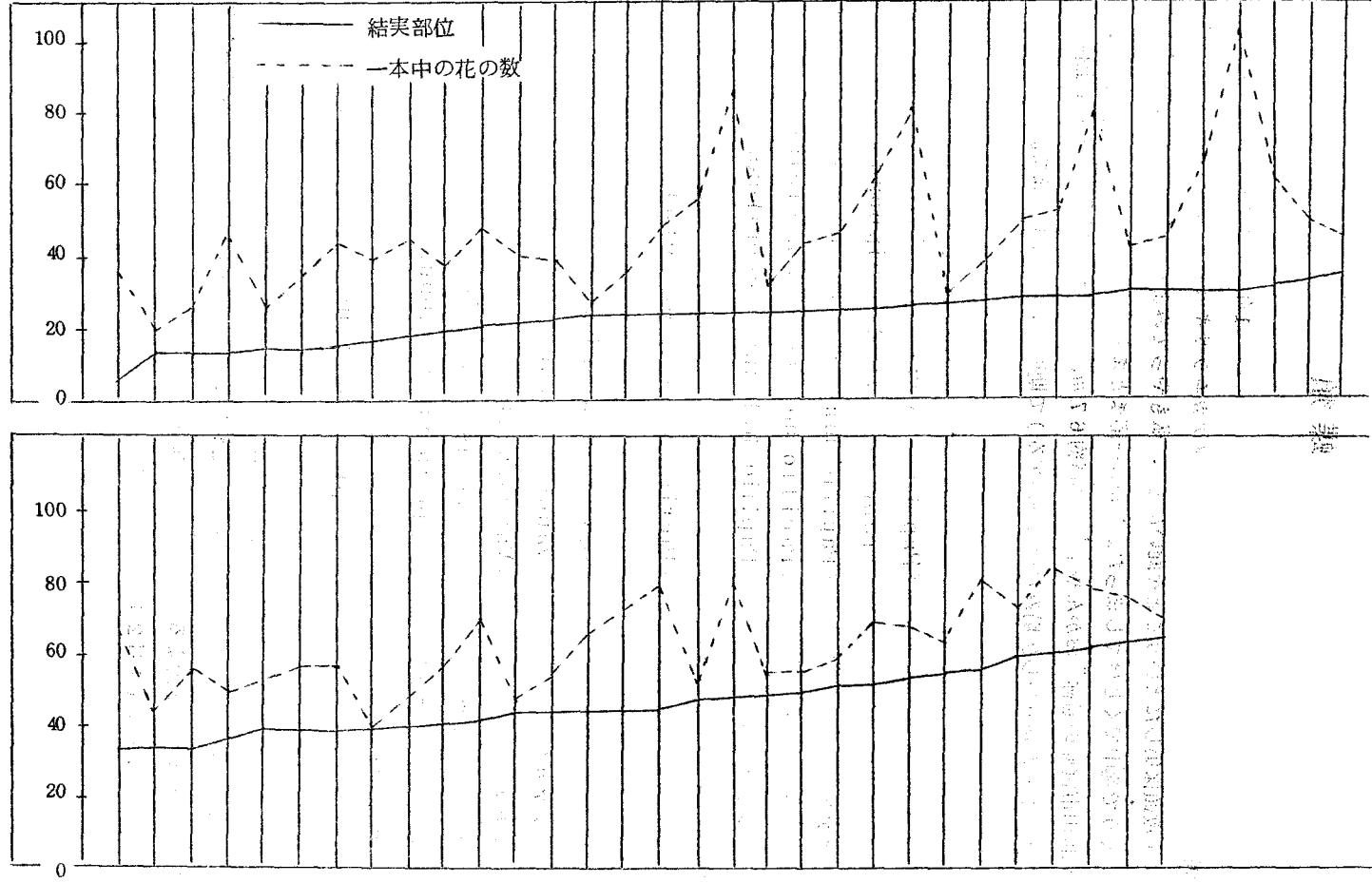
2 結実部位は、1本の花茎の下方から何番目の花からはじまっているかを調べた表は次のとおりである。(図Ⅲ)

結実部位の最下位は6番目で最高位は61番目であった。結実部位の最下位が20～30番目にあるのが一番多かった。

10番目以下	1	21～30	22	41～50	12
11～20	10	31～40	12	50以上	8

反省 観察時期がおそかった。この次は、土栽培と水きいと2つにわけて観察し、結実した種子の発芽の状態も調べたい。

(図 Ⅲ)



山頂に集まる蝶類

1年 木佐貫 彰

多くの蝶が山頂を占有する。ことに迷蝶であるメスアカムラサキはこの傾向が強く、かつては先輩がたが十数頭採集したということを聞いたとき、私もやってみようと思い、実際試みたが登るのがおっくうで途中でくじけてしまった。しかし一応まとまりそうです。

場所は加世田市宮原の通称「おかんやま」（標高約 67 m、山一帯に松が植えてあり頂上付近に 2～3 の大きな石があり少し広場みtainな感じがする）で期間は 5 月～10 月まで。

アゲハチョウ科

アゲハ	(<i>Papilio xuthus</i>)
アオスジアゲハ	(<i>Graphium sarpedon nipponum</i>)
キアゲハ	(<i>Papilio machaon hippocrates</i>)
ナガサキアゲハ	(<i>Papilio memnon thunbergii</i>)
モンキアゲハ	(<i>Papilio helenus nicconilens</i>)

シロチョウ科

モンシロチョウ	(<i>Pieris rapae crucivora</i>)
---------	-----------------------------------

タケハチョウ科

ゴマダラチョウ	(<i>Hestina japonica</i>)
ヒメアカタテハ	(<i>Vanessa cardui</i>)
アカタテハ	(<i>Vanessa indica</i>)
ツマグロヒョウモン	(<i>Argyreus hyperbius</i>)
メスアカムラサキタテハ	(<i>Hypolimnys misippus</i>)

シジミチョウ科

ウラナミシジミ	(<i>Lampides boeticus</i>)
---------	------------------------------

この中でキアゲハ、アゲハが最も多く見受けられた。ナガサキアゲハ、モンキアゲハ等は、定期的に飛来し、山頂に停滞することはなかった。これに反し、ヒメアカタテハ、アカタテハなどは、地面に翅を休め、人が近よるとすぐ飛んでしまうといった具合だった。迷蝶であるメスアカムラサキは、1970年11月21日に採集した。

ニワトリの解剖

1年 浜川 睦 文

1 目的

鳥類は飛ぶためにどのようなしくみをもっているかを知るためにニワトリを例にして外部の形態や、解剖して内部を観察し、また鳥類の飼育や、食用として料理する場合の参考にする。

2 方法

- (1) 刃物（くぎ、針）で延髄をさして破壊する。
- (2) 全部の羽を抜く。

※外部形態の観察

- (3) 解剖机の上に新聞紙を数枚重ねて、その上にニワトリを腹部を上に向けて載せる。
- (4) 腹部の皮をつまんでメスで切り中心線にそって切り開く。つめを使って皮と胴とを広くはなすと、胸や腹の筋肉が見えてくる。
- (5) 大胸部の中ほどの側端と胸骨との間にメスを入れ、メスの反対端を使って大胸筋と胸骨をはなし、へらでえぐるように両端へはがす。大胸筋は両端のけんで胴とつながっている。
- (6) 大胸筋の下に同じ方向に走る小胸筋が見えるから同じ要領で小胸筋も両端をのこして、胴からはがす。

※つばさの運動を調べる。

- (7) 左右の大胸筋と小胸筋のけんを切って取り除き、つばさを背側へ強くまけて肩の関節をはずして、関節にメスを入れてじん帯を切ったのち、つばさを背側へ引きながら、メスで皮膚を切ってつばさをはなす。
- (8) ろう骨の両側を下から上までハサミで切断し、けんこう骨と胴の間をメスで慎重に切りはなす。両かい骨を左手でくびを右手で持ち、強く引くと胸骨がごっそりはがれて内臓が見えるようになる。

※内臓の観察

3 研究

- (1) 外部形態の観察
- (2) つばさの運動
- (3) 内臓の観察

4 研究結果

- (1) 外部形態の観察

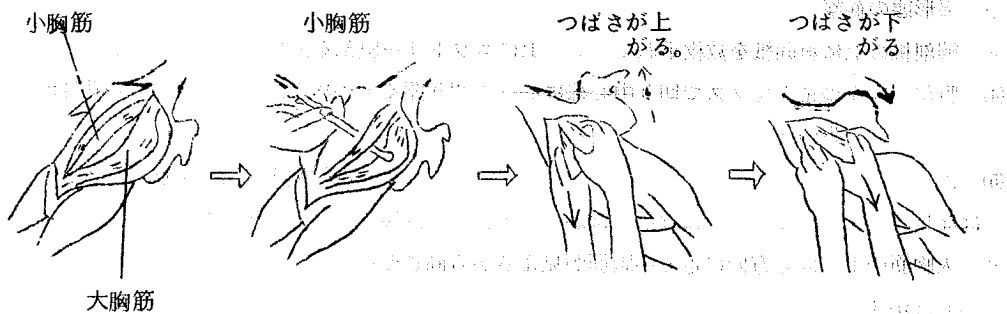
まず飛ぶための構造では浮揚と推進するための役めをしているつばさ、かじをとるための尾

空気の抵抗を少なくするため全体が流線形になっている。また飛行機がほとんど同じしくみでつくられているのに気づく。

つぎに風雨から体を保護し、体温を保つため全体が羽毛でおおわれていることや、どこにでもとまって休息できるように足の爪が特殊なしくみになっている。つばさやかじの部分の面積を広くしかも軽くするため、その部分にはとくに大きな羽毛がはえている。また、羽毛の内側に綿毛がはえて定温を保つのに役だっていることや、尾部の背面にだ円形の大きな脂せんがあり、くちばしでここから脂肪を取り、羽毛にぬって羽毛が水にぬれるのを防ぐことなどがわかった。

(2) つばさの運動

切開した腹部のいちばん表面に見えるのが大胸筋である。小胸筋はその下側にかくれている。この両筋を2番目に示した*2。方法 (5)、(6)*の要領で筋肉からはなし、この両筋によってつばさが運動していることがわかった。



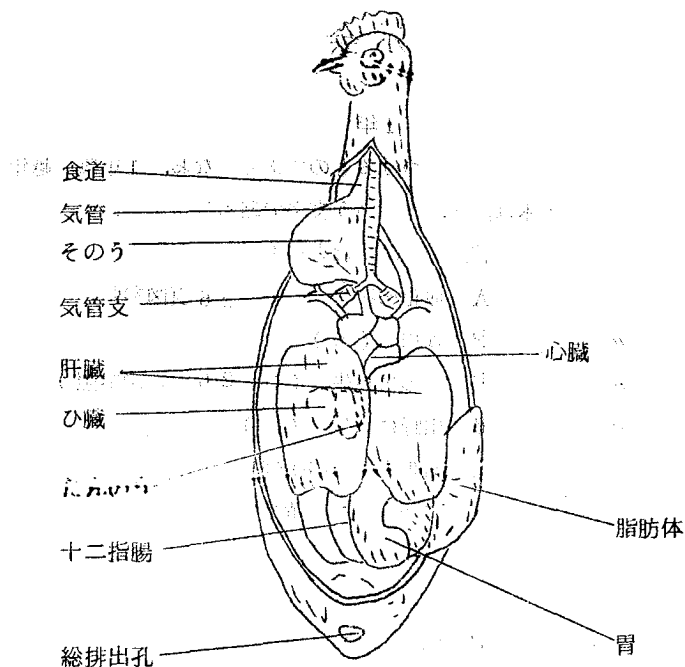
上図のように左右の手で両筋肉をにぎり、小胸筋を引くとつばさはあがり、大胸筋を引くとつばさは下がる。

3 内臓の観察

(1) 胸骨を除くと、まず上面に消化器系の各器官が見える。鳥類の特徴である。そのう、前胃や直腸が短いことを観察した。またニワトリは盲腸がとくに長い。胃の中には食べ物といっしょに砂や小石がはいっており、消化をたすけている。

(2) 心臓をもち上げて裏返し肝臓とつながっている状態を調べる。心臓とつながる血管を調べておき、心のうを切開する。そしてカエルの心臓が2心房2心室であることがわかる。

(3) つぎに排出器を調べる。じん臓は1対で、ぼうこうがない。(飛ぶのにつごうがよい。)(1) また排出孔が一つしかない。



反省

自分なりに、解剖はしてみましたものの、見ていただいた皆さんにはあまりニワトリについて理解していただけなかったのではないかと深く反省しています。解剖の時、説明も不十分で、ぶっつけ本番でうまくいかなかったことが多すぎました。また、ニワトリの殺し方についてですが針で延髄を刺したのもいけなかったのではないかと思います。他にはエーテルまたはクロロホルムで麻酔する方法がある。(これは食用にできない。)ほんとうに 皆さんとニワトリにすまないと思います。少しでもこれを読んで鳥類について、理解していただけたら幸いです。また、この実験で3年生の春成さんと田中さんにお世話になりました。深く感謝致します。

＜他校交換生物機関紙紹介＞

- 「大自然」 1968 第16号 那覇高校生物クラブ
 「寒蘭」 1970 第3号 鹿児島県立宮之城高等学校生物部
 「甲南生物」 第4号 鹿児島県立甲南高等学校生物部
 「蟲藻」 1969 第6号 静岡県立掛川西高等学校生物部

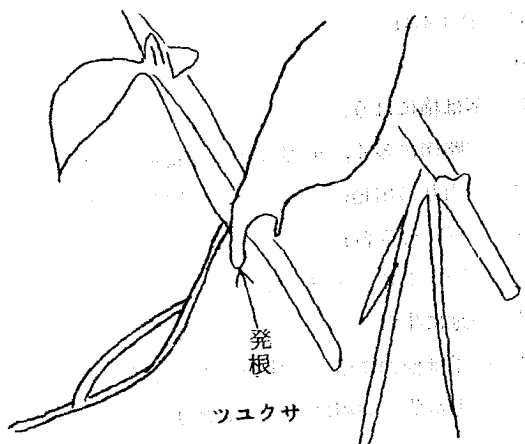
文化祭の植物展示会

1年 神野辰郎・永田洋子

これは文化祭で展示した、秋の植物で特に花、実などつけるものである。なお、1年草、越年草、多年草はそれぞれA, B, P, 低木、大木は、S, Tという文字で略省している。

植物名	科 名	特長(○, ×は末尾参照)
1 ベニバナボロギク	キ ク	A 帰化植物 (○ 26頁図参照)
2 ヨナメ	〃	P 食用 (×)
3 クマノギク	〃	P 湿地に自生 (○ 26 頁図参照)
4 アキノノゲシ	〃	B 山野に自生 (×)
5 ヒメムカシヨモギ	〃	A 帰化植物 路傍畑地に多い。(×)
6 オニタビラコ	〃	B 路傍に多い春黄小花を咲く (×)
7 チチコグサ	〃	B 〃 (生きている ×)
8 ヒメヨモギ	〃	P 路傍に多い (×)
9 カラスウリ	〃	P 塊状の根
10 オトコエシ	オミナエシ	P (×)
11 オミナエシ	〃	P 果実 (×)
12 ヘクソカズラ	ア カ ネ	P つる草状の木
13 ソクズ	スイカズラ	P 地下茎 (根は節の部分からでる ×)
14 キツネノマゴ	キツネノマゴ	A 山野に自生 ときには白花もある。
15 ナンバンギセル	ハアウツボ	A 寄生草本 ススキの根本などにある。(×)
16 ハナウリクサ	ゴマノハグサ	A コーチシナ原産
17 ウリクサ	〃	A 原野園地に自生
18 ムラサキシキブ	クマツズラ	落葉S 山野に生ずる (×)
19 クサギ	〃	落葉S 若葉を食用とする (×)
20 ルコウソウ	ヒルガオ	A 熱帯アメリカ原産 (子房がふくらむ×)
21 オヤマリンドウ	リンドウ	P 薬草になる。栽培種
22 オオマツヨイグサ	アカバナ	B 帰化植物 明治初年渡来 (枯死 ×)
23 サルスベリ	ミソハギ	落葉T 中国原産庭木 (×)
24 エノキグサ	トウダイグサ	A 畑地雑草 (生きている ×)
25 カタバミ	カタバミ	P 酸味がある
26 ゲンノシ ョウコ	フウロソウ	P 薬草 原野に生ずる (×)
27 ノアズキ	マ メ	P つる草 原野に自生

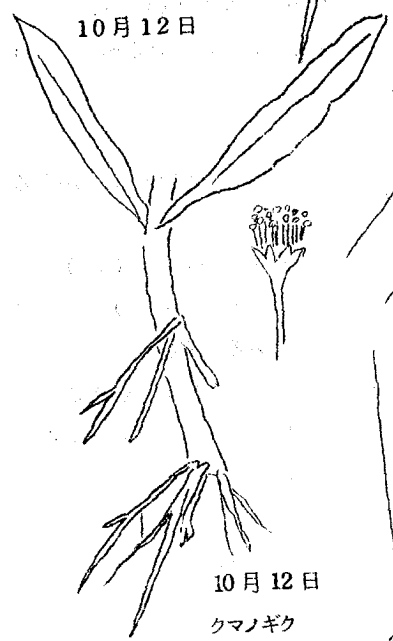
28	ヤハズソウ	マ	メ	A	(根つき新根 1.2 cm ○)
29	ヌスビトハギ	〃		P	根は木質
30	オオバヌスビトハギ	〃		P	根は木質
31	カワラケツメイ	〃		A	
32	ネコハギ	〃		P	茎は横にはう。
33	ミソナオシ	〃		P	山路傍に多く、果実はサヤで衣類につく。
34	メドハギ	〃		P	日当りの山地に自生 直立分岐が多い(×)
35	マルバハギ	〃		S	山野に最も普通 (×)
36	クサハギ	〃		P	山野にある ミソナオシと同属
37	テリハノイバラ	バ	ラ	P	砂地に生育
38	キンミズヒキ	〃		P	種子は他物につきやすい (生きる ○)
39	スイレン	ヒツジグサ		P	無毛水草 池沼に自生 (×)
40	クルマバザクロソウ	ザクロソウ		A	無毛 帰化植物 葉が車のようにつく
41	ヨウシュヤマゴボウ	ヤマゴボウ		P	帰化植物 あれ地に多い 有毒植物(×)
42	イノコズチ	ヒ	ユ	P	根は薬用(×)
43	イヌタデ	タ	デ	A	帰化植物といわれる
44	イシミカワ	〃		A	茎は他物にかかる 茎に逆生のトゲがある
45	ハナタデ	〃		A	イヌタデに似ている
46	ヤナギタデ	〃		P	水湿地に生える。辛味がある (○)
47	ツルドクダミ	〃		P	帰化植物 薬用 つる草 (×)
48	シロバナサクラタデ	〃		P	湿地、水田などにある (○)
49	カナムグラ	ク	ワ	A	雌雄別株のつる植物 茎にトゲがある
50	ヤブマオ	〃		P	山野に自生 葉が大きくザラザラする
51	ホソアオゲイトウ	ヒ	ユ	A	帰化植物 あれ地によくみる
52	イヌザンショウ	ミ	カン		落葉性S (枯死 ×)
53	マンリョウ	ヤブコウジ		小S	常緑 自生または栽培 (×)
54	タマスダレ	ヒガンバナ		P	常緑球根植物 軒下などにうえられる
55	ヒガンバナ	〃		P	9月に花が咲く (子房がふくらむ ×)
56	ニラ	ユ	リ	P	食用となる
57	コヤブラン	〃		P	常緑植物 地下茎をひく
58	ツルボ	〃		P	原野に自生 (生きている ×)
59	ツユクサ	ツユクサ		A	別名アオバナ (○)
60	カヤツリグサ	カヤツリグサ		A	野原、畑地に多い雑草
61	ハマスゲ	〃		P	地下に塊茎がある (×)
62	ヒメクグ	〃		P	野原の湿地に自生 地下茎で横にふえる



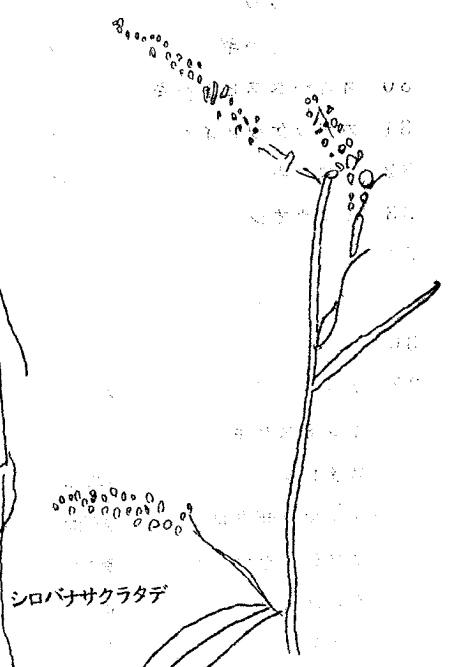
発根

ツユクサ

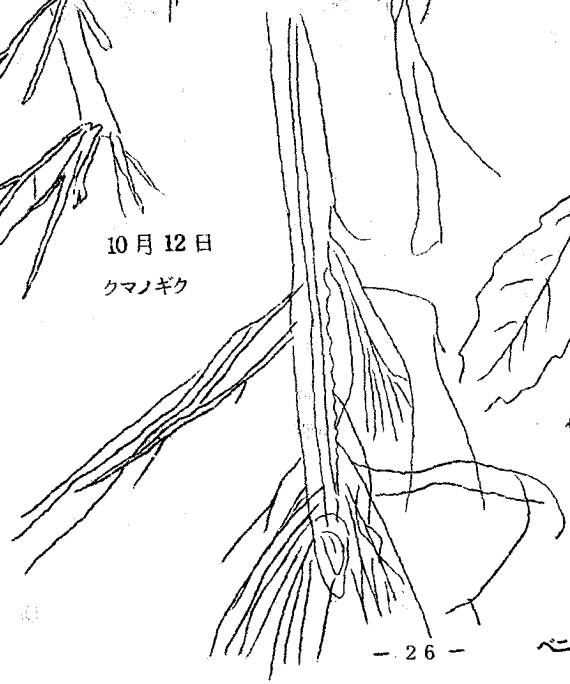
10月12日



10月12日
クマノギク



シロバナサクラタデ



11月22日

ベニバナバログク

63	イヌクグ	カヤツリグサ	P	草地に自生
64	トダシバ	イネ	P	地下茎をもつ 砂防によい (×)
65	カゼクサ	道半ぐさ 刈合	P	乾いた道ばたに多い (○ 根つき)
66	ササクサ	"	P	山地林下などに多い (枯死 ×)
67	メガルカヤ	"	P	原野山地に自生
68	ヨシ	"	P	水湿地に群生 川堤防にも多く秋に大穂
69	ケイヌビエ	"	P	水田、湿地に多い (×)
70	スズメノヒエ	"	P	原野、茎葉は毛深い (×)
71	チカラシバ	"	P	日当りのよい原野 (×)
72	コスズメノヒエ	"	P	帰化植物 (枯死 ×)
73	イヌビエ	"	A	開花8~10月 ノゲが目立たない (×)
74	キンエノコロ	"	A	畑路ばたに自生 ノゲが稍金色 (×)
75	ネズミノオ	"	p	野原、路ばたに自生 (×)

○備考：上記特徴欄中()内は、展示後29日に、調査した結果の記録で、○は新根発生、×は発根をみなかったものをあらわす。根付は根のついたまま水さししたものである。茎を切って水差ししたものではベニバナボロギク、クマノギク、タデ、ツユクサなどは、切口上部からよく根が出ていた。(2年 中間睦子、松田芳子 調査)

＜文化祭研究＞

味覚に関する1考察

2年 中間睦子

目的 加世田高校において味盲者が全体の何パーセントをしめるかを調べた。

方法 薬品フェニルチオカルバミドを、200ccの蒸留水へ0.1g溶かし、飽和溶液を作る。それにろ紙を浸し乾燥せたら紙を適当な大きさに切る。それを味わってもらう。ただし、にがみを感じた人は正常、その他の味の場合は異常、感じない場合を味盲とする。〔この薬品における場合だけ〕

〔1〕文化祭での比率調査の結果

調べた人数 258名

味盲者 45名

異常者 19名

正常者 194名

この中の味盲者のしめる割合は、約13%であった。

気泡の発生と光合成の実験

1年 阿久根美智代 金竹美千子

〔目的〕

光の強さ、距離の遠い、温度の変化から生じる気泡の発生数を調べる。

〔材料〕

水草（エビモ）・ピーカー、試験管、電球（60w, 40w）・水、湯、氷

〔方法Ⅰ〕

温度を一定にした水の中で、水草の気泡の発生が電球の色、ワットによってどう変わるか調べる。

（強さ）

表Ⅰ 25℃ 40w （青）

回 距離cm	0	10	20	30	40	50
1	8	6	6	6	7	7
2	9	7	7	7	7	7
3	9	8	7	6	6	6
平均	8	7	6	6	6	6

表Ⅱ 25℃ 60w （黄）

回 距離cm	0	10	20	30	40	50
1	18	10	10	9	10	10
2	13	10	9	9	9	9
3	14	11	10	9	9	9
平均	15	10	9	9	9	9

（注）表Ⅰ、Ⅱの時間は1分間ずつである。平均は切り捨てである。

〔結果Ⅰ〕

上図の表から、60w（黄）の0cmが一番気泡の発生が多く、距離が遠く光の強さが弱いほど発生数が少ないことがわかる。

〔方法Ⅱ〕

温度をかえて、気泡の発生数の変化を調べる。

〔結果Ⅱ〕

25℃での発生数が最も多いこ

とがわかりました。

(注)平均は切り捨てである。

図 温度℃	20	25	30	40
1	3	102	54	19
2	2	87	49	0
3	3	61	46	0
平 均	2	83	49	6

結果Ⅰ・Ⅱより、光合成に必要な条件として、光の強さ、色、温度などが関係することがわかりました。

〔反省〕

方法Ⅰは、暗室で行なうべきところを行なわなかったの、暗室で行なったのと同じような、正確な結果が得られなかった。また電球の種類をもっと多くするとまた別なおもしろい結果が得られたと思う。

方法Ⅱは、表を見てもわかるように発生数がいちじるしく、参考資料との相異がひどかった。これら失敗は、実験をやる前の準備、実験のやり方に原因があったようだ。

この次は、実験前の準備に重点をおこうと思う。

短報Ⅲ

八瀬尾の滝採集記 I

5月5日 曇のち雨

2年 山口秋生

参加者 山口秋生 浜川睦文

8:30 加世田発→10:30 八瀬尾着→13:30 八瀬尾発→15:30

あいにくくもり空であった。道路は、ゴールデンウィークの最終日とあって、車がたくさん走っていた。川辺町付近でスジグロシロチョウを目撃した。10:30に八瀬尾の滝入口に到着、そこから少しはいったところで、大根の花にいる。スジグロシロチョウを6頭ぐらい採集した。そして、イシガケチョウはいないか、気を付けながら行くうちに、滝に着いた。その辺でアサギマダラを1頭目撃した。滝の水は去年来るときよりは、水が多い感じがした。入り口と滝の間を2往復したが、ついにイシガケチョウは見ることができなかった。

スジグロシロチョウ 16coll 井 アゲハチョウ 井

アサギマダラ 1wit クロアゲハ 井

他校交換生物機関誌紹介

「城東生物」1969 8号 徳島県立城東高等学校生物部

1970年の南薩の蝶類記録

2年 山口 秋生・阿久根雄二

1年 木佐貫 彰・浜川 睦文

この記録は、加世田高校生生物部員が、加世田周辺地域内でこの1年間に記録したものである。すべて、書きなぐられた部日誌を参考にし、整理しただけですので、不備な点、はつきりしない点があるかと思われます。おもな採集地は、竹田神社周辺ですが、「T」という記号で略省してあります。「校内」というのは、加世田高校内での記録です。なお本文内の記号は、鹿児島昆虫同好会で使用しているものによります。

〔記号説明〕

coll..... 採集

wit..... 目撃

+..... 少数

++..... 普通

井..... 多数(正しくは井, 活字の都合でこうなった)

(coll, wit の前の数字は、頭数を示す)

短報Ⅳ

八瀬尾の滝採集記 Ⅱ

10月20日

1年 浜川 睦文

中間テストもきょうで終わったため、去年たくさんの収穫のあった八瀬尾の滝へ自転車で、出かけた。今まであまり見られなかったモンシロチョウにちよくちよく出会った。また、去年と変わらずイシガケチョウもたくさんいた。

〈採集及び目撃蝶〉 イシガケチョウ 2♀♀ 4♂♂ coll 1♂ wit

スジグロシロチョウ 井 モンシロチョウ 井 イナモノジチョウ 井

ツマグロヒョウモン 井 ルリタテハ 3wit キタテハ ++

アカタテハ ++ ヤマトシジミ ++ クロコノマチョウ 井

アゲハ ++

8月 1日⊙ T 井 8月 6日⊙ T 井 8月 7日○ T 井
 8月 8日○ T 井 8月16日○ 秋目 2wit
 8月22日 T ++

〔3〕 ミカドアゲハ

4月25日 T 1coll 4月26日 T 1coll 5月 4日 T 井
 5月 5日 T 井 5月 8日○ T 井 5月 9日⊙ T 井
 5月10日● 秋目 ++ 5月11日○ T 幼虫数頭採集
 5月13日○ T 卵数個採集 5月16日○ T 1wit 5月25日⊙ T +
 6月27日 T 1coll 8月 7日○ T 1wit

〔4〕 キアゲハ

7月23日○ 金峰山 7月30日⊙ T 1wit 8月 7日○ T ++
 8月 8日○ T 1wit 8月22日⊙ T 1wit 9月 9日⊙ T
 10月 4日 金峰山

〔5〕 アゲハ

4月19日⊙ 大浦～秋目 井 4月26日 T 井 5月 5日 T 1coll
 5月 9日⊙ T ++ 5月31日⊙ 益山 1wit 6月 3日⊙ T 1wit
 6月 5日⊙ T 井 6月 7日⊙ 秋目 ++ 6月17日 T 井
 6月23日● 益山 2wit 7月11日● 校内 1wit 7月21日 T 井
 7月24日○ 金峰山 井 7月25日⊙ 金峰山 井 8月 1日⊙ T 1coll
 8月 6日⊙ T 井 8月 7日○ T 3wit 8月 8日○ T 井
 8月16日⊙ 秋目 + 8月20日⊙ T 2wit 8月22日⊙ T +
 9月 1日 校内 2wit 10月 2日⊙ T 2wit 10月 4日 金峰山
 10月 5日⊙ 校内 1wit 10月 6日⊙ T 1wit 10月 7日⊙ T ++
 10月10日⊙ 大当 井 10月23日⊙ 校内 1wit 10月25日⊙ 笹連 +
 10月27日⊙ T 1wit

〔6〕 クロアゲハ

4月19日⊙ 大浦～秋目 1coll 5月 6日 T 1coll
 6月 4日○ T 2wit 6月18日● T ++ 6月23日● 校内 井
 7月24日○ 金峰山 ++ 8月 7日○ T ++ 8月 8日○ T +
 8月22日⊙ T + 10月25日⊙ 笹連 1wit

〔7〕 ナガサキアゲハ

4月19日⊙ 大浦～秋目 1wit 4月25日 薩摩湖 1coll
 5月 5日⊙ 八瀬尾滝 井 5月 7日 T 2coll 5月 9日⊙ T 井
 6月 3日⊙ T 1♀wit 6月 4日○ T 1wit 7月11日● 校内 ++
 7月14日⊙ T 井 7月22日 T ++ 7月23日○ 金峰山

7月24日○ 金峰山 ++ 7月27日○ T 1wit 7月28日○ T 1♀coll
 7月28日○ 金峰山 1♀coll 8月 1日○ T 1♂wit
 8月 6日○ T 2♂♂wit 8月 7日○ T 井 8月 8日○ T ++
 8月16日○ 秋目 1♂wit 8月20日○ T 2♂♂wit 8月21日○ 校内1♀wit
 8月21日○ 東山 2♂♂wit 8月22日○ T 井
 9月 9日○ T 1♀coll 10月 4日 金峰山
 10月25日○ 笹連 1wit

〔8〕 モンキアゲハ

4月21日 T 1♀coll 4月29日 T 1♂coll 5月 4日○ T +
 5月 5日○ 八瀬尾滝 ++ 5月 8日○ T 井 5月10日● 秋目 井
 5月16日○ T 井 5月30日 T 井 5月31日 益山 1wit
 6月 3日○ T 井 6月 4日○ T 井 6月 9日○ T +
 7月22日 T + 7月24日○ 金峰山 1wit 7月30日○ T 1wit
 8月 1日○ T ++ 8月 7日 T ++
 8月 8日○ 加世田 幼虫1採 8月 8日○ T ++
 8月16日○ 秋目 ++ 8月20日○ T 2wit 8月22日○ T ++

〔9〕 カラスアゲハ

8月22日○ 加世田 1♂coll

去年は多く採集目撃したカラスアゲハも今年は1頭しか見ることができなかった。しかし、ほかのものはだいたい例年と変わりなかった。なおネムノキに飛来したアゲハチョウ類〔6月～7月〕の記録は、別記したためここでは省いてある。

<シロチョウ科(Pieridae)>

〔1〕 キチョウ

4月18日● T 1wit 5月 6日● T 1coll 5月30日 T 1coll
 6月 4日○ T 1♀coll 7月24日○ 金峰山 ++ 8月 1日○ T ++
 8月 7日○ T 井 8月 8日○ T ++ 8月21日○ 東山 井
 8月22日○ T 井 9月 9日○ T 9月27日○ T
 10月25日○ 笹連 井 11月 1日○ 小湊 1wit

〔2〕 ツマグロキチョウ

10月25日○ 笹連 井

〔3〕 モンキチョウ

5月 5日○ 八瀬尾滝 5月27日○ T 3wit 6月 4日 T 1♀coll

〔4〕 ツマキチョウ

3月29日○ 万世 2♂♂coll 3月31日○ 万世 3♂♂coll
 4月 3日○ 万世 3♂♂coll 4月5日 大浦～秋目 16♂♂1♀coll

4月19日◎ 大浦～秋目 9♂♂5♀♀ coll

4月21日 T 1♂coll

4月22日○ 加世田 1♂2♀♀ coll

〔5〕 ツマベニチ ♀ウ

6月 7日◎ 秋目 4♂♂coll

7月14日◎ 校内 1wit

8月16日① 秋目 1♂wit 9月13日① 秋目 5wit 10月10日① 大当 1wit

〔6〕 モンシロチ ♀ウ

4月18日● T 3wit 4月19日◎ 大浦～秋目 井

5月 5日◎ 八瀬尾滝 ++ 5月10日● 秋目 + 5月15日 T 1coll

5月16日① T 井 6月 3日◎ T 1coll 6月 7日◎ 秋目 井

6月 9日 T + 6月15日● 校内 2wit 6月23日● 益山 ++

7月24日○ 金峰山 ++ 7月27日① T 2wit 8月 7日○ T +

8月 8日○ T 2♂wit 8月22日① T 井 10月 7日◎ T

10月10日① 大当 井 10月20日① 八瀬尾滝 井 10月25日◎ 笹連 井

11月 1日○ 小湊 2wit

〔7〕 スジグロシロチ ♀ウ

4月19日 大浦～秋目 1coll

4月26日 万世 1coll

5月 5日◎ 八瀬尾滝 15coll

6月 4日○ T 1♂2♀♀coll

6月23日● 益山 1♀wit 7月24日○ 金峰山 1wit

7月26日① 長屋山 1coll 8月7日○ T 1wit 8月 8日○ T 1♂coll

8月22日① T 1♂coll 10月20日① 八瀬尾滝 井 10月25日◎ 笹連 5coll

おもしろいことには、去年少なかったツマベニチ ♀ウが今年は大変多く、先輩が少なくなるのではないかと心配するほどでしたが、ほんとうによかったと思う。

<シジミチ ♀ウ科 (Lycaenidae)>

〔1〕 ルリシジミ

4月19日◎ 大浦～秋目+ 9月 9日① T

10月 7日◎ T

10月25日◎ 笹連 井

〔2〕 サツマジミ

4月25日 T 井 4月26日 万世 5coll

5月 5日◎ 八瀬尾滝 2coll

5月 9日① T 井

5月13日① T 1coll 6月16日① T 1wit

6月17日 T 3♂♂1♀coll

7月26日① 長屋山 1wit 7月18日① T 井

8月 7日○ T 1wit

〔3〕 ベニシジミ

4月19日◎ 大浦～秋目 2wit

5月 5日◎ 八瀬尾滝 1coll

7月24日○ 金峰山 1wit

〔4〕 ムラサキシジミ

4月21日 T 井 4月29日 T 2coll 6月3日 T ++
 6月9日◎ T ++ 6月16日◎ T 2coll 6月17日◎ T ++ (1)
 8月7日◎ T 井 8月8日◎ T 井 8月20日◎ T 井
 10月4日 金峰山

〔5〕 ムラサキツバメシジミ

6月16日◎ T 1coll

〔6〕 ヤマトシジミ

5月5日◎ T 井 5月8日◎ T 1coll 7月24日◎ T 井
 7月28日◎ T 井 8月7日◎ T 井 8月8日◎ T 井
 8月22日◎ T ++ 9月9日◎ T 10月4日 金峰山
 10月27日◎ T

〔7〕 ツバメシジミ

6月16日◎ T 2wit 7月24日◎ 金峰山 井 8月24日◎ T 1coll
 9月9日◎ T 10月7日◎ T 10月25日◎ 笹連 ++

〔8〕 ウラナシジミ

7月13日 万世 2wit 8月7日◎ T 1wit 8月8日◎ 校内 1wit
 10月25日◎ 笹連 2coll

〔9〕 ヒメウラナシジミ ✓

7月28日◎ T 井

今年は、タイワンツバメシジミをぜひ見ようと先輩の出来さんに聞いて「おかん山」で探したが、見当たらなかった。また去年あんなに多く発生したゴイシジミも1頭も姿を見ることができなかったのは残念である。

＜ウラギンシジミ科 (Curetidae)＞

〔1〕 ウラギンシジミ

4月19日◎ 大浦～秋目 1wit 4月25日 薩摩湖 1coll
 8月22日◎ T 1coll 10月4日 金峰山 1wit

＜マダラチョウ科 (Danaidae)＞

〔1〕 アサギマダラ

5月5日◎ T 井 5月7日 ++ 2wit 5月9日◎ T 1coll
 5月10日◎ 秋目 1wit 7月14日◎ T 2coll 5月10日◎ 秋目 1wit
 7月14日◎ T 2coll 10月10日◎ 大当 3wit
 10月10日◎ 大当 3wit 10月25日◎ 笹連 2♂♂, 2♀♀ coll
 10月27日◎ T 1wit

＜タテハチ、ウ科(Nymphalidae)＞

〔1〕 ツマグロヒョウモン

4月21日 T 2♀♀coll 6月9日◎ 校内 蛹1採集
 6月16日◎ T 2♂♂coll 6月17日 T ++
 7月14日◎ T 1♀wit 7月21日 T ++ 7月22日 T ++
 7月28日◎ T 2♂♂3♀♀coll 7月30日 T 1♂1♀wit
 8月1日◎ T 1♂2♀♀coll 8月6日◎ T 4♀♀wit
 8月7日◎ T 1♀coll 8月8日◎ 益山 1♀wit
 8月8日◎ T ++ 8月21日◎ 東山 1♀wit 8月22日◎ T 2♂♂wit
 9月27日◎ 大浦 + 10月2日 校内 1♂wit
 10月6日◎ T 4wit 10月10日◎ 大当 井
 10月20日◎ 八瀬尾滝 井 10月24日◎ 校内 1wit
 10月25日◎ 笹連 井 11月1日◎ 小湊 ++ 11月4日◎ 1wit
 11月7日◎ 校内 1♂1♀wit

〔2〕 イチモンジチョウ

7月24日◎ 金峰山 1coll 7月21日◎ T 1wit
 7月25日◎ 金峰山 2wit 8月7日◎ T 1wit
 8月8日◎ T 1♀coll 11月12日◎ 校内 1coll

〔3〕 コミスジ

4月18日● T 井 4月19日◎ 大浦～秋目 井
 5月6日● T 1coll 5月15日◎ T 井
 7月23日◎ 金峰山 8月6日 T 井 8月7日◎ T 井
 8月8日◎ T 井 8月22日◎ T 井 9月9日◎ T
 10月7日◎ T 10月25日◎ 笹連 井

〔4〕 キタテハ

4月21日 T 1coll 5月15日◎ T 1wit
 5月26日◎ 加世田 2wit 5月30日 T 2coll
 6月27日 T 2wit 7月14日◎ T 井 7月21日 T 井
 7月30日◎ T 2wit 8月7日◎ T 1wit 9月8日◎ 校内 1wit
 9月9日◎ T 9月24日 干河 井 10月21日◎ T 1wit
 10月25日◎ 笹連 1coll 11月1日◎ 小湊 +

〔5〕 カリタテハ

4月21日 T 1wit 5月7日 T 井 7月23日◎ 金峰山 1coll
 10月20日◎ 八瀬尾滝 3wit 10月25日◎ 笹連 6coll

〔6〕 ヒメアカタテハ

5月31日◎ 益山 ++ 8月15日 枕崎 1coll 10月 6日 T 1wit
10月10日◎ 大当 1wit 10月21日◎ T 1wit

〔7〕 アカタテハ

4月25日 T 1coll 4月26日 T 2coll 5月 7日 T ++
5月 8日◎ T 1coll 8月 7日◎ T 1wit 9月27日◎ 大浦 ++
10月 6日◎ T 2wit 10月10日◎ 大当 1wit 10月21日◎ T ++
10月25日◎ 笹連 ++ 10月27日◎ T ++ 11月 1日◎ 小湊 ++

〔8〕 イシガケチ ヌ

5月 7日◎ 校内 1wit 6月 7日◎ 秋目 1wit 6月25日 校内 1♂coll
7月23日◎ 金峰山 2coll 7月24日◎ 金峰山 2wit
7月25日◎ 金峰山 1♀coll (大破) 7月26日◎ 長尾山 1wit
10月20日◎ 八瀬尾滝 4♂♂2♀♀coll

〔9〕 スミナガシ

5月 8日 T 1coll 5月 9日◎ T ++ 5月12日◎ T 3coll
5月15日◎ T 1♀coll 5月16日◎ T +
6月 3日◎ T 1wit 6月 4日◎ T 1wit 6月 5日◎ T 1wit
7月28日◎ 金峰山 1♀coll 8月 7日◎ T 1coll
8月 8日◎ T ++ 8月22日◎ T 1♂coll
9月10日 校内 1wit

〔10〕 コムラサキ

5月21日◎ 校内 1♂coll (黒型) 5月22日 校内 2coll (1黒型)
5月26日◎ 加世田小 7coll 校内 1coll
5月27日◎ T 1coll 5月28日◎ 校内 2wit 6月16日◎ T 1♀wit
7月14日◎ 校内 1♂wit 7月24日◎ 金峰山 1wit
8月17日 校内 1♂wit (黒型) 9月18日 校内 1wit
9月22日◎ 校内 1♀wit 9月24日 加世田 2wit 10月 6日◎ 校内 1wit
10月 7日◎ 加世田 1♀coll 校内 2wit

〔11〕 ゴマダラチ ヌ

5月 9日◎ T 井 5月13日◎ T +
5月15日◎ T 2♀♀coll 5月16日◎ T 井
5月26日◎ 加世田 1coll 7月11日◎ 校内 1wit
8月 6日◎ T 1wit 8月 7日◎ T 1wit 8月 8日◎ T 1♀coll
9月 9日◎ T 10月 6日◎ T 1wit

〔12〕 タテハモドキ

10月10日○ 大当 1♂1♀ coll

しばらく姿を見ることのできなかったタテハモドキを大当で採集することができたが、そのあと調査しなかったで、その数はわからない。以前は大浦などでも多頭採集されたようである。また今年は、校内でイシガケチョウが採集されたし、金峰山、長屋山、八瀬尾滝とどこでも、その姿を見ることができた。

<ジャノメチョウ科 (Satyridae)>

〔1〕 ヒメウラナミジャノメ

4月18日● T 2wit 5月 8日○ T ++ 6月 3日◎ T 井

6月 4日○ 8月 7日○ T ++ 8月 8日○ T 井

8月22日○ T ++ 9月 7日◎ 校内 1wit 9月 9日◎ T

〔2〕 クロヒカゲ

4月18日● T ++ 4月19日◎ T 1coll 5月 4日◎ T 井

5月 6日● T 井 5月 7日 T ++ 5月 8日○ T 井

6月 3日◎ T 1♀ coll 6月 4日○ T 1♀ coll

7月28日○ T 1wit 8月 7日○ T ++ 8月 8日○ T ++

8月22日○ T ++ 9月 9日 T 10月 7日◎ T

10月21日○ T ++

〔3〕 キマダラヒカゲ

5月11日○ T 2coll 5月13日○ T 1coll 5月16日○ T 2wit

7月24日○ 金峰山 1♀ coll

7月26日○ 加世田～長屋 3coll 7月30日○ T 1♂ coll

8月22日○ T 1wit 9月 9日○ T

〔4〕 ヒメジャノメ

9月 9日○ T 10月 7日◎ T

〔5〕 クロコノマチョウ

4月18日● T 1coll 4月19日◎ 大浦～秋呂 井

5月 4日◎ T 2wit 5月25日◎ 若令幼虫2頭採集

6月 9日◎ T 蛹1採集 6月16日○ T 2coll 6月17日 T 1wit

6月27日 T 1wit 10月20日○ 八瀬尾 井 10月21日○ T 1wit

10月25日◎ 笹連 井 10月27日○ T ++ 校内 1wit

この科では去年多く千貫平で多く採集したジャノメチョウを見ることできなかった。

迷 蝶 記 録

△ギンモンウスキチョウ

7月 1日 ①

校内のネムノキに飛来して止まった1♀(新鮮)を目撃(山口, 浜川)

7月 2日 ①

校内の中庭を飛び去った1♀を目撃した。(浜川)

7月 4日 ①

校内の中庭に植えてあるサングシトウの花に吸蜜中の1♀(小破)を採集した。(浜川)

7月21日

加世田市万世(自宅)の百日草の花に吸蜜中の1♀(中破)を採集した。(浜川)

7月22日

加世田市益山の浜堀で1♀を目撃した。(木佐貫)

7月23日 〇

金峰町田布施で5♀♀を目撃した。(浜川, 木佐貫)

7月24日 〇

金峰町田布施で ニガゴリ の花に吸蜜中の1♂(小破)を採集した。その他に5♀♀を目撃した。(浜川)

7月26日 ①

金峰町田布施で1♀を目撃した。(木佐貫)

7月29日 ①

加世田市当房で1♀を目撃した。(浜川)

8月 1日

加世田市益山で1♀を目撃した。(木佐貫)

8月 4日 ①

長屋山の麓付近で2♀♀を目撃した。(浜川)

8月11日 ①

枕崎市の火之神公園付近で1♂1♀を採集した。(木佐貫)

8月16日 ①

長崎県付近で1♀を目撃した。(木佐貫)

佐多町伊座敷で1♀を目撃した。(木佐貫)

10月10日

笠沙町大当で1♀を目撃した。(浜川)

△ Catopsilia (ギンモンウスキチョウの可能性が大)

7月23日 ○

金峰町田布施で6頭目撃した。(浜川, 木佐貫)

7月24日 ○

金峰町田布施で2頭目撃した。(浜川, 木佐貫)

8月 1日

加世田市益山で1頭目撃した。(浜川)

8月 7日

加世田市竹田神社で1頭目撃した。(浜川)

8月25日

本校の校門前のリクズの花に吸蜜中のものを目撃した。(浜川)

10月10日

笠沙町片浦で1頭目撃した。(浜川, 山口)

△ Mesochorus (メソアカムラサキ)

8月11日

枕崎市火之神公園付近で2♂♂を目撃した。(浜川, 木佐貫)

△ Rhyacionia (リュウキュウムラサキ)

9月27日

佐多町伊座敷で1♂(中破)を採集した。(浜川)

10月9日

校内で1♂(新鮮)が低くゆっくり飛んでいるのを目撃した。(浜川)

12月6日

加世田市万世で1♂を採集した。(浜川)

△ Uroclonchus (ウスイロコノマチョウ)

7月24日 ○

加世田市小湊で午後7時半ごろ低草に止まっているのを採集した。(山口)

9月9日 ①

校内に飛んで来たのを採集した。(浜川)

9月14日 ①

校内に飛んで来て止まったのを採集した。(浜川)

10月25日

加世田市小湊で1頭採集した。(山口)

1970年4月19日 曇りのち雨

秋 目 採 集 記

1年 浜川 睦文

ばくと山口さんと2人で、ツマキチ・ウを採集しに秋目へ出かけた。天気は朝から、くもっていて午後から雨になると、あてにならない天気予報を言っていたが、きょうはなにがなんでも取ってやるぞ!!と出かけた。大浦までバスで行き秋目まで歩くことにした。まず大浦のギ・ウボクを見に行こうと途中の田んぼ道を歩いていると、さっそくツマキチ・ウが飛んでくる。すぐそいつを採ると、三角紙に入れないうちに次のツマキチ・ウが出て来る。でも採った蝶は、みんな羽化してから、目がたっているのか、新鮮なものは、1頭もない。田んぼ道をすぎると谷川にそっての行進である。まわりのヤブと、くもの巣をかきわけ登る。あたりからはクロヒカゲ、クロコノマチ・ウが顔を出す。いよいよ目的のギ・ボクの所と思ったが、ない。ギ・ボクがない、どこへ行っただ。今までせっかくこんなやぶの中を来たのに・・・。

でも秋目へ行けばなんとかなるだろうと思って気を取りなおして再行進、イチ、ニッ、途中まで登ると、親切なおじさんが車を止めて「乗らんか!!」と声をかけた。ばくらは、待ってましたとばかり車に乗る。さすがに自動車は速い。すぐ秋目についた。まずは腹ごしらえである。この辺で食べるべんとうはうまい。わしらの食べ方は、背のちいさい割にものすごく速い。すぐべんとうを食べ終る。さっそくギ・ボクを見に行った。まだ若葉はでていない。去年のオンボロの葉である。蛹でもないかなあと言うにはいったが、さかす気がしない。気晴らしに海岸へでも出てみようということになり、重い足をひきずり海岸へ。アオスジアゲハが高く飛んでいる。やらなければいいのに、綱をかまえてふりまわして、海の中におちた。さいわい片足だけであった。そうこうしているうちにもう帰りの時間になっている。1時に秋目を出て、大浦まで近道をして帰ったが朝あんなにいた蝶は見あたらない。天気予報どおりになってしまった。大浦を4時12分のバスで帰った。

ツマキチ・ウ	5♀♀9♂♂	coll	スジグロシロチ・ウ	1♀	coll
ジャコウアゲハ	2♀	coll	井	クロアゲハ	1coll 井
アゲハ	井				
モンキアゲハ	5	wit	アオスジアゲハ	1	wit
ナガサキアゲハ	1	♂wit			
ルリシジミ	++		ヤマトシジミ	+	
ベニシジミ	2	wit			
ツマグロヒ・ウモン	++		クロセセリ	1	wit

1970年6月7日 晴れ

ツマベニチョウを求めて

2年 山口 秋生

。コース 8:30(万世発) - [バス] - 9:15(大浦着) 秋目着 - 3:40

秋目発 - 5:00 - 万世着

大原さんから先日、今日は秋目にツマベニチョウが多数いると聞いたので、秋目へ行った。8:30のバスで、大浦まで行きそこから歩くことにした。この日はめずらしく晴れであった。大浦では、モンシロチョウやアゲハが多く目についた。そして峠へ着き一気に秋目までおりた。歌を歌って歩いて行くうちに、秋目の海岸に着いた。秋目の店でコーラを飲んだ。スカッとさわやかになった。そして鑑真の記念碑のそばを歩いて行くうちに、ツマベニチョウを目撃した。さらに、短い足を最大限にのばして、ギョボクの所へ行った。そこにツマベニチョウが飛んでいた。浜川がとうとうとしたが惜しくも逃げられた。今度は、平崎の方に足をむけることにした。それにしてもかんかん照りだ。馬鹿にならないのがおかしい。やがて亀ヶ丘の下にあたる所に来た。そこに谷川があったので、中腹の所まで登ってみたがギョボクがなかったのでおりることにした。水を飲みたいと思ったが店のある所までがまんしようと思った。ところが浜川は近くに水道があったのでその水を飲んだ。水を飲んだ後、そばにあった立て札を読んといきなり水を吐き出した。その立札には「この水は飲料水ではありません。」と書いてあった。そして秋目にもどることにした。それにしても暑い。浜川はすぐもとのギョボクの所へ行き、幼虫と卵を採って来た。そこへ、木佐貫がやって来た。弁当を食べた後これからが僕の出番である。すぐにさっきのギョボクの所へ行き幼虫を捜すことにした。その谷川沿いには、ギョボクが5、6本あった。若令幼虫を4頭ぐらい採った。そして周期的にツマベニチョウが飛んで来て大騒ぎをする。1時過ぎだったろうか浜川が下の店に水を飲みに行った。残っているのは僕と木佐貫だけである。例によってツマベニが飛んで来た。木佐貫が一振りしたが失敗した。そのツマベニチョウは上の畑の方へ逃げた。これを見ていた僕は、木佐貫の上の畑で待つことにした。また例のごとくツマベニがやって来た。例のごとく木佐貫が失敗し例のごとく上に上がって来た。そこで一振り、ツマベニチョウがひるむところを採集。うれしかった。三角紙にツマベニチョウを入れる時には、足が震えて、手も震えていた。さっきの興奮もさめ、よこになっているとそこへまたツマベニチョウがやって来た。すばやく僕はさっきの畑へ行った。また例のごとく木佐貫が失敗し、例のごとく僕が2頭目を採集した。木佐貫はくやしがっている。そこへ浜川が登ってくる。浜川はまったく信じなかった。不器用なこの僕が2頭も捕るはずがないと思ったのだろう。浜川も大変くやしがった。その他何回もツマベニチョウが飛んで来たけれども失敗。インガケチョウも目撃した。2:30ごろまた僕がツマベニチョウを捕った。僕だけ3頭も捕ったのである。浜川や木佐貫はやけ気味である。3:00が鳴ったので帰ることにした。帰るしなくてはしているうちに、またツ

マベニチ ♪ウがやって来た。浜川が今度ばかりはと執念深く追いかけてついに捕った。

うれしさのあまり声が出なくなったというのは少しオーバーであるけれども、大変うれしがっていた。かわいそうなのは木佐貫である。同じ苦勞をしたのに。それで帰ることにした。帰りに店によった。木佐貫はやけ気味でコーラを3本も飲んだ。帰り道は、1人でシ ♪ボンとしていた。途中から車に便乗させてもらった。バス代がたすかった。

〔主な採集及び目撃蝶〕

◦ツマベニチ ♪ウ 488 coll

◦アゲハ 44

◦モンシロチ ♪ウ 井

◦イシガケチ ♪ウ 1wit

1970年度文化祭反省

2年 阿久根 雄 二

〔テーマ〕 植物の働き

(出 展 物)

〔実験コーナー〕

- 葉緑素の抽出
- ブドウの発酵
- 水耕法
- ニワトリ、カエルの解剖
- 水草による気泡の発生
- でんぶんの観察

〔昆虫コーナー〕

- 昆虫標本の展示

〔観察コーナー〕

- ネムの木の落花数調べ
- ネムの木に飛来するアゲハ蝶類

〔調査コーナー〕

- PTC実験

〔販売コーナー〕

- 葉脈標本

〔その他〕

- スライドによる植物の構造と働き
- 岩石の展示
- 植物写真展示
- 秋の加世田市周辺の植物展示

〔反省〕

短的に言って今年の文化祭は、70年代最初の文化祭としては、何か新鮮さに欠けるものであったように思われる。ネムの木の落花数調べやネムの木にくるアゲハ蝶類は別として、最近の文化祭はマンネリ化してきていると思う。今度の文化祭では、何か新鮮なものをと考えていたが、大部分の部員が準備が遅れたり、実験に失敗したりして、文化祭の数日前になってから急に題材を変えて自分が納得できないまま、文化祭に臨んだというような形になって今までの文化祭と何ら変わらないものになってしまった。長期間にわたる身近かな観察といったようなものがあったらと悔まれる。

1970年9月27日 晴れ

佐 多 採 集 記

1年 浜 川 睦 文

・参加者 木佐貫彰 浜川睦文

われわれは前から思っていた佐多町への採集を実行することができた。そこで、タテハモドキとツマベニチョウでも見てこようと思った。まず26日の夕方加世田驛を出発し枕崎の彰君のおとうさんの勤めている測候所に1夜お世話になった。翌朝7時に枕崎を出発し8時5分のフェリーで佐多に向かった。9時に伊座敷につきさっそくタテハモドキをさがしにかかった。彰君は8月にも1回ここに来ており1頭タテハモドキを目撃した。そこにまず我々は行った。ぶらぶら田んぼの中をさがしまわが見あたらない。ほかの場所へ行こうとするとぼくの前に1頭飛びだして来た。すぐネットをふったがはいらず、彰君がそいつはいただいた。また近くのソクズ?の花にツマベニチョウが吸蜜に来たがすぐ飛んでいってしまった。そこでべつな場所に行くことにした。ぼくは今度はそそタテハモドキを探つてやるぞと思ったが、あまり元気がでない。さっきのことがまだ気になる。でもぼくはそこで大変なやつを探った。日のあたらない路上をゆったりと飛んでいる1個体を発見したのである。彰君は向こうの田んぼの中にいた。ぼくは初めはルリタテハかスミナガシじゃないかと思って気にしていなかったが、そいつはよっぽどぼくが好きらしくゆっくり飛んでくる。しかたなしにネットの中に入れて、何だろうと思いネットの中を見た。なんとその中にはリュウキュウムラサキがはいっているではないか。♂(中破)であったので死んでもらった。逃げてもらってはこまる。ぼくは大声を彰君へ向かって叫んだ。〔リュウキュウを採った!!〕と彰君は信用しないらしくゆっくりとしている。それでもぼくの方へ近づいてきてその個体を見てびっくりした。これでぼくにも逆が向いてきたらしく前いなかったタテハモドキがその辺の田んぼにはたくさんいた。ぼくはそこで合計7頭彰君は5頭採集した。これでタテハモドキはいいだろうと思いツマベニチョウを見に島泊に行った。数頭目撃しただけで採集できなかった。帰りのフェリーが2時だったのであまり採集する時間がなかったがぼくは大変満足だった。

リュウキュウムラサキ 1♂(中破) coll アカタテハ 井wit

タテハモドキ 12coll (1頭秋型) wit イシガケチョウ 1wit

ウラギンシジミ 2♂ coll ツマベニチョウ 井wit

大 浦 ~ 秋 目

1年 神 野 辰 郎

◦参加者 佐方先生 山本先生

2 年 阿久根雄二 大工和清 山口秋生

1 年 木佐貫彰 浜川陸丈 神野辰郎 阿久根美智代 宮野絹子

◦コース 加世田発(8:40)―〔バス〕―大浦(9:30)―〔徒歩〕―秋目(12:00
〜1:00)―〔自動車〕―大浦(2:00)―〔バス〕―加世田着(4:30)

第1回採集会は、新入部員の入部歓迎と秋目方面の昆虫・植物採集の二つの目的で行なわれた。私たち一年生は、初めての経験でおずおずした態度でした。加世田からバスに乗り、でこぼこ道にゆられ、外の風景を見ながら大浦に向った。大浦についてから、リックの中の荷を変えた。ドウラン、ネット、根掘りなどを出し、一番だいせつな弁当を入れた。その間に服装を整えて、秋目に向って歩きはじめた。

二年生の後について、周囲を見て歩いて行っった。昆虫グループは、初めから収穫物がなく、歩いているばかりであったのにくらべ、植物グループは、どんだんドウランにつめこんでいった。一年生は、おとなしく先生に聞くのもはずかしそうであったが、進むにつれて、「先生この植物の名は。」と言ったことが続発して来て、採集会ももり上って来た。そのころ、朝から降りそうだった雨が、降りだし、雨の中の採集会となってしまった。また一年生を残念がらせたことは、よきおねえさまの二年生女子部員の参加がなかったのが雨とともに、残念でした。峠をこえてから、部員の歩きがばらばらになり、私と阿久根さんとは、一番最初に歩き、かたかたふるえながら、ほかの部員を待っていた。1時後に全員そろい、みんないっしょに秋目小学校の校舎で昼食をとり、腹もまんぶくな顔つきで、帰りの道をたどった。帰りは、雨のために何にも収穫物はなかった。

＜採集及び目撃蝶＞

モンキアゲハ 井 ジュコウアゲハ 十 アサキマダラ 1wit

ミカドアゲハ 井 1coll モンシロチョウ 十

採集した植物

キク科 ノゲシ、ウスベニニガナ、ハハコグサ、ニガナ、チチコグサ、アカネ科 ヤエムグラ、スイカグラ科 スイカズラ、シソ科 タツナミソウ、サクラソウ科 ルリハコベ、コナスビ、オトギリソウ科 オトギリソウ ツツジ科 ミツバツツジ ミズキ科 クマノミズキ、ウコギ科 タラノキ ジンチョウゲ科 コシウノキ スミレ科 タチツボスミレ ツバキ科 モッコク ミツバウツギ科 ゴンズイ ニシキギ科 マユミ、ツルウメモドキ、マツカゼソウ科 イヌザンショウ マメ科 ネムノキ、スズメノエンドウ、ハギ類ユキノシタ科 マルバウツギ、コンテリ

ギ ナデシコ科 マンテマの一種 クワ科 クワクサ ラン科 トンボソウ ユリ科 ソクシ
ンラン、ノビル カヤツリグサ科 アオスゲ イネ科 イチゴツナギ、ヒメコバンソウ、マカラ
スムギ、ナギナタガヤ、ホソムギ ウラボシ科 タマシダ ゼンマイ科 ゼンマイ ヒカゲノカ
ズラ科 ミズスギ

○四葉のクローバーについて（口絵写真1）

幸福（シアワセ）をもたらすと四葉のクローバー探しの経験は多くの人がもっている。この四
葉が大浦から秋目への途中畑道に群生したクローバー中に普通より肥だちのよいものが沢山見つ
かった。写真のほかにもあって15本ばかりもあった。しかも小面積（1.5平方mぐらい）にで
ある。このほか六ツ葉も1本あった。本校庭で調べた所では90平方cm由にわずかに1本であっ
たことがある。（まのせ2号34頁）

1970年10月25日（SUN） くもり 第2回採集会

笹 連

2年 阿久根 雄 二

○参加者 佐方先生 山本先生

2年 山口秋生 阿久根雄二 松田芳子 中間睦子 前田栄子

1年 本坊憲光 神野辰郎 木佐貫彰 阿久根美智代 宮野 絹子

○コース 加世田発（8：10）－（バス）－士卒（9：00）－笹連着（12：00）－
－河前（15：50）－（バス）－加世田着（17：00）

日頃の活動のおかげなのだろうか。今日は採集会にはもってこいの天気だ。我々は、8時10
分加世田発河前行のバスに乗りこんだ。1行12人、生物部の採集会にしてはさびしい感じだけ
れども、みんなそれぞれの思いを胸に秘めてはりきって出発した。

季節は秋、道路沿いの柿の木には真赤に熟した柿の実が枝もたわわになっている。バス停から
10mぐらい行ったところの柿の木に、ルリタテハが1頭飛んできた。しかし、ネットを振る間
もなく、すぐに飛び去って行った。さらに進んで行くと、野菜畑がありスジグロが数頭飛び交っ
ていたが、3頭だけとり、先をいそいだ。

ぼくは、皆より数10m先を歩いてた。やがて、みかん畑と松の山との間の曲がり道にさし
かかろうとするとき、何か白い大きなものが、松の木の方に飛んだように思われたので、すぐに
その方を見ると、白っぽくて、モンギアゲハと同じくらいの大きな蝶が、ヒラヒラと山頂をめざ
して飛んでいくのが見えた。とっさにぼくは、後からくるみんなを呼んだ。しかし、木佐貫や山
口が来るころには、もうすでにその蝶は、山頂の樹間に姿を消してしまっていた。とうとう確認
はできなかったが、迷蝶らしかった。それから少し歩くと、ウラギンシジミがいた。木佐貫と山
本先生がすぐにとったけれども、長居は無用と先をいそいだ。

さらに先に進んでいくと、我々は、急に視界が開けススキの密生しているなだらかな山の頂上付近の峠道にさしかかった。峠の下から涼風が吹いてき、2時間余も山道を歩き、汗ばんだ体に快い感じを与える。まるでえびの高原を歩いているような錯覚にとらわれる。

12時頃、笹連小に到着した。そこで昼食をとり、約1時間ほど休息した。笹連という所は、なんとなく神秘的なところである。

帰りは別の道を下った。山本先生が、途中20mぐらいありそうな杉の木立ちの中でアサギマダラをとられた。先生は、ルリタテハとアサギマダラをとっていばっておられる。というのは、それまでほぐたち蝶屋が、ルリタテハやアサギマダラをとっていなかったからだ。でも、先生の自慢もすぐに消えた。ほくが、切り通しの所で吸蜜中のアサギマダラと飛来してきたルリタテハを採集したからだ。この頃になると、植物採集をしている神野や女子部員の銅らんはいっぱいになって、彼らは土手に咲いているリンドウをとっている。下りは、上りのときより蝶もあまり出てこなくて、ただ、駅に向かって歩くだけで、駅の近くになると、女子部員は、黙りこんでしまった。

＜採集及び目撃蝶＞

ルリタテハ	6coll	キチョウ	井
ツマグロヒョウモン	井	ウラナミシジミ	2coll
アカタテハ	2coll	ルリシジミ	井
クロコノマチョウ	井	ツバメシジミ	
スジグロチョウ	井	コミスジ	井
モンシロチョウ	井	クロアゲハ	1wit
ツマグロキチョウ	井	ナカサキアゲハ	1wit
		アゲハチョウ	+wit

＜採集した植物＞

キク科 シラヤマギク・アキノキリンソウ・ノコンギク・ダンドボロギク・ヨメナ・ツワブキ・ヤマヒヨドリ・オトコヨモギ・ヤクシツウ・アメリカセンダングサ・センダングサ・ヤマジノギク キキョウ科 ツリガネニンジン ウリ科 カラスウリ オミナエシ科 オミナエシ・オトコエシ スイカズラ科 スイカズラ・ガマズミ・ハマニンドウ アカネ科 アカネ オオバコ科 オオバコ ハマウツボ科 ナンバンギセル シソ科 ヒキオコシ・ヤマハッカ・アキタムラソウ ウコギ科 タラノキ アカバナ科 ミツタマソウ ノボタン科 ヒメノボタン グミ科 ナワシログミ・ツルグミ ジンチョウゲ科 コガンビ オトギリソウ科 オトギリソウ キブシ科 キブシ ツバキ科 ヒサカキ サルナシ科 ナシカズラ モガシ科 モガシ ブドウ科 エビズル・ツタ・ノブドウ ミツバウツギ科 ゴンズイ・ショウベンノキ ニシキギ科 ツルウメモドキ モチノキ科 ナナメノキ ハゼノキ科 ハゼノキ・ヌルデ トウダイグサ科 エノキ

サ・カンコノキ ニガキ科 ニガキ マツカゼソウ科 イヌザンシウ・カラスザンシウ フ
 ウロソウ科 ゲンノシウコ カタバミ科 カタバミ マメ科 クズ・カワラケツメイ・ヌスビ
 トハギ・ミヤマハギ・ドヨウフジ・ミソナオシ・ヤハズソウ イバラ科 ダイコンソウ・ニオイ
 イバラ・キイチゴ・ナワシロイチゴ・ワレモコウ・クマイチゴ・ホウロクイチゴ ユキノシタ科
 コンテリギ ケシ科 タケニグサ クスノキ科 タブノキ・シロタモ モクレン科 サネカズ
 ラ ツヅラフヂ科 ハスノハカズラ・アオツヅラフジ アケビ科 ミスバアケビ キツネノボタ
 ン科 センニンソウ ヒユ科 イノコヅチ アカザ科 アカザ タデ科 ミズヒキ・ミソソバ
 ボロボロノキ科 ボロボロノキ イラクサ科 ヤナギイチゴ クワ科 コウゾ・イヌビワ ニ
 レ科 エノキ ブナ科 マテバシイ・クヌギ・コナラ ヤナギ科 ネコヤナギ ラン科 ジカバ
 チソウ・ヤマサギソウ ヤマノイモ科 ヤマノイモ ユリ科 ヤマラッキウ・ホトトギス・ソ
 クシンラン・サルトリイバラ ツユクサ科 ツユクサ・マルバツユクサ イネ科 アブラススキ
 ・ササクサ・ヒメアブラススキ・イタチガヤ・ウシクサ・ナルコビエ・ヌカキビ・ハイキビ・ネ
 ズミノオ・チカラシバ・キンエノコロ・トダシバ・スズタケ ヒノキ科 ヒノキ マツ科 クロ
 マツ ウラボシ科 マメツタ・ホラシノブ・オシダ・クリハラン ウラジロ科 ウラジロ・コシ
 ダ ヒカゲノカズラ科 ミズスギ・トウゲシバ

。ベニバナボロギクとダントボロギク（口絵写真3）

笹連採集会のとき、士卒・笹連間の士卒よりの左側のひのき林の縁に、ボロギク2種類が、70
 cm位隔てて、並んではえていた。ベニバナボロギク（左）は、1955年に初めて、帰化植物と
 して、新和名が付けられ日本各地に、広く分布しはじめ、山手の伐採地などに、多く群生するよ
 うになった。ダントボロギク（右）は、1937年に新和名とともに、帰化植物として報告され
 て、各地に広がったが南薩では、少ないようである。この両種が、偶然肩を並べて仲よく生活し
 ているのが、珍しい。写真は、山本先生撮影。

。オオタニワタリ（口絵写真2）

1970年9月10日黒瀬勇〔赤生木〕氏が太当の山から、2株のオオタニワタリ大株を運ん
 で来て、本校温室用に寄贈された。葉数が25～28枚、葉の長さ130cm、巾15cmのみごと
 な株である。現地では照葉樹林内の岩質の斜面や樹上に着生して、局所的に分布している。
 熱帯気分豊かなシダ植物である。

1970年度生物日誌

〔植物関係その他〕

<4月>

1年生ヘクラブ紹介

3 温室の裏のヒヤシンスが1輪咲き

6 チューリップがつぼみをもつ
レンゲ草, アネモネ, 桜咲く

30 部会を開く。第1回採集会について

<5月>

6 部日誌を作る

10 第1回採集会(大浦, 秋目方面)

13 サボテンの花が咲く

14 ギンモクセイに黒い実がなっている
フロックスが満開
花びし草がすたれてきた
ひまわりの本葉が2枚になる

16 矢車草が満開
フロックスの濃い桃色の花が鮮明

21 マーガレットがきれい

22 あふちの花が咲いている

23 ムラサキツユクサ(永田洋子さん
持参)定植

24 ムラサキツユクサ(大原賢二さん
持参)定植

26 ひまわり, ニワゼキショウ, キキ
ョウがだいふ伸びる

27 ひまわり, くじゃく草, 百日草,
コスモス定植(職員室前の花壇)

28 ひまわり, くじゃく草, 百日草を
定植(円型花壇)

まのせ7号の誤りを訂正

30 ひまわり, コスモス, くじゃく草, 百日
草を定植

13 まのせ7号届く

※5月ごろから「私たちの自然」を向こう1年分
徳永直氏より寄贈

<6月>

1 ネムノ木の葉がいっぱい咲いている
マリゴールドがきれい

サボテンの花がいくつか咲いている
2 百日草, ひまわり, フレンチ, コス
モス, サルビア, ホウセンカ定植
フロックス, ダリア, 石竹, ガーベ
ラがきれい

3 竹田神社の池のスイレンの花が咲い
ている。

4 朝顔に3本つつ竹を立てる

8 フレンチ, 葉ゲイトウ定植
サボテンの花が咲いている

9 ひまわり定植, フレンチ, あじさい
アマリリス咲く, キクのさし木
ネムノ木がつぼみをもつ

10 部会を開く, ネムノ木の落花調べに
ついて。トウワタの花が咲く。
ハイビスカスとブーゲンビリアの枯
れた枝を切る。ムラサキツユクサを
株分けする。

12 アスパラガス(ブルモ・サスナナス)
が2cm位のびる。(温室)

13 ネムノ木の花がごくわずかに咲く

17 百日草の花が咲く

18 ネムノ木の花が満開

26 百日草の花が咲く

<7月>

1 百日草, コスモス定植

7 百日草, マリーゴールド咲く

11 ネジ花が咲く

20 部会を開く。ネムノ木の落花数調べについて

26 長尾山シダ採集(ヒロハコンロンカの花・大株リュウビンタイ)(写真6)

<8月>

17 台風で温室のガラス2枚割る

<9月>

1 文化祭計画について話しあう

10 オオタニワタリ(2株), 黒瀬勇氏(笠沙町森林組合)寄贈

12 スイゼンシナ(川上司書大浦から持参)こちらでは珍らしい蔬菜。

<10月>

12 播種(ルピナス, パンジー, さきょうなでして, 忘れな草, きんせん花, 小町草, カーネーション)

13 コスモス, マリーゴールドが満開

21 とうがらしを鉢に定植

22 部会を開く(第2採集会について)

23 マリーゴールドが満開

26 ルピナス発芽

25 第2回採集会(笹連方面)

<11月>

3 磯間山採集会(浜川, 本坊, 佐方, 山本南先生, 川上司書)キレツチトリモチ(花)など採る

11 蔵多山へ植物採集(山本先生山口本坊)

<2月>

25 ボケ, キンセン花が満開

<3月>

13 チューリップの定植

15 キンセンカ, チューリップ定植
〔昆虫関係〕

<4月>

19 大浦〜秋目方面へ蝶採集に行く
(山口, 浜川)

※竹田神社へ昆虫採集(21, 25, 26,

<5月>

5 八瀬尾の滝へ蝶採集に行く
(浜川, 山口)

31 鹿児島市城山, 加世田市益山の〆おかん山^クでそれぞれ蝶採集を行う。

※竹田神社へ昆虫採集(4〜9, 11〜13, 15〜16, 25〜27, 30)

<6月>

7 秋目方面へ蝶採集に行く。
(木佐貫, 浜川, 山口)

※竹田神社へ昆虫採集(3〜6, 9, 15, 17, 18, 23, 27)

<7月>

19 鹿児島市城山で蝶採集を行う。

※竹田神社へ昆虫採集(14, 21, 22, 27, 28, 30)

金峰山へ蝶採集(23, 24, 25, 28)

<8月>

11 枕崎方面へ蝶採集(浜川, 木佐貫)

15 " " (木佐貫)

16 佐多方面へ蝶採集(木佐貫)

秋目方面へ蝶採集(山口)

23 鹿児島昆虫同好会に出席(木佐貫, 浜川, 山口)

※竹田神社へ昆虫採集(1, 5, 6〜8, 20, 22, 24)

<9月>

- 13 秋目方面へ蝶採集(浜川, 本坊,
山口)
27 佐多方面へ蝶採集に行く(浜川, 木
佐貫)

※竹田神社へ昆虫採集(9)

<10月>

- 4 金峰山へ蝶採集に行く(木佐貫)
10 大当へ蝶採集に行く(浜川, 山口)
20 八瀬尾の滝へ蝶採集に行く(浜川)

<11月>

- 29 鹿児島昆虫同好会談話会に出席
(木佐貫, 浜川)

生物部とともに

3年 田 中 洋 海

生物部とともにすごしたこの3年間。こういうとなんとなく大げさな気がするがとにかく生物部員として活動してきた。いや遊ばしてもらったといったほうが適切なかもしれない。卒業した現在ほんとうに生物部には行ってよかった。楽しかった。幸せだったといいたい。

入部当時、生物というものに何の興味もなかった私であったが、朱に交われば赤くなるという格言通り知らず知らずのうちにそのとりことなってしまった。その分野は蝶と限られたものであったが「いきもの」にはどれも共通する魅力があるように思える。私が一番好きな蝶はアサギマダラである。それも竹田神社の森の中を弱々しき青紫色に輝くという感じで飛ぶ姿である。その姿が蝶の一番美しい姿として私の心に焼ついている。しかし、標本箱の中のアサギマダラには、その輝きというものが失なわれているように思える。そこに生物と無生物(死物)のちがいがあると思う。この何ともいえない不思議な魔力とでもいえるようなものの潜む世界が生物の世界だと私なりに考えさせられるようになった。

思えば、先輩につれられて竹田神社へ何回足ををこんだだろうか。モンシロチョウ以外のチョウチョの名前も知らなかった私にとって見るチョウチョすべてが珍種であった。りきんでがむしやらにふるネットになかなかチョウチョは消えなかった。はじめて見たのがクロノマチチョウ。その後 スミナガシ、アオバセセリ、の幼虫。見るからにグロテスクな気味悪い感じをうけた。アオスジアゲハ、ミカドアゲハ、ゴマダラと次々に知識はふえて行った。竹田神社の森は蝶屋の教室であった。とにかく1年の時は楽しい思い出でいっぱいだ。

しかし、2年になったら楽しいことばかりではなかった。先輩達が部の運営にいかに苦勞なされていたかひしひしとわかった。しかし、それが私をひとまわりも ふたまわりも大きくしてくれる(身長ではないよ!!)と思って頑張った。これもまたなつかしい思い出だ。

とにかく多くの先輩方や先生、それに生物部の仲間たちとすごした3年間は高校生活での最大の収穫物であったといいたい。

(S46.3.29)

俗説薩隅植物誌 (3)

津貫の巻 (後篇)

佐 方 敏 男

(215)ヒゲムシ(チカラシバ)——路傍などオヒシバと同様な場所にしかと根を張り容易に除去されない雑草で、秋月出穂した形が大きな毛虫のようである。芒の色は紫を帯びたものが普通である。またビンアライ(金峰町など)ともいうのは、試験管洗いに見立てた名である。このほかインノシッポ、ネコンシッポ、ムカゼグサなどの名も聞かれるが、これらは別植物にも当てられる。例えば、オカトラノオをネコンシッポ(吹上、平鹿倉)、タチクラマゴケをムカジグサという所(金峰町)などがある。

(216)ヒゲモモ(モモ)——元来は、多毛小果の在来品をカテシモモまたはカタシモモ(ツバイモモの方言〜日置郡など)という無毛品に対して名付けた方言でケモモとも呼ばれた。一般に我国では桃は史前から導入されていたが、果物としては品種も少なく、江戸時代になっても実桃は、花桃の品種数に遠くおよばなかった。著しいものとしては、伏見のサモモ、同サツキモモ、オオウスモモの三色勝れて味いよし。彼地の名物なり〔農全8〕など記されている。明治8年支那から伝来したスイミットウ(水蜜桃)は、漸次在来種を駆逐し、末葉から大正にかけて自家用に栽培されている桃はスイミットウが通名となって南薩の農家でも知られていた。手入れも十分ではなく樹にはよく樹脂(ヤニ)が出ていた。農業全書には、盛長して4,5年の後は皮をたてにたちさくべし。やに多くて皮厚きゆへしめられて痛み枯るる事ありと記し、草木六部耕種法には、脂膠ノ甚多キ者ナルヲ以テ成長シテ四五年ヲ経ルトキハ必起線皸(ミゾカンナ)ノ細者ヲ用テ堅ニ其ノ皮ヲ傷ベシ云々と述べてある。支那の古農書齊民要術の中に、桃性皮急四年以上宜シク刀ヲ以其皮ヲ堅ニサク可シ(元漢文)と出ていることである。桃は果花葉が食用薬用観賞用になる外年中行事に用いられたりするばかりでなくこのヤニまで薬になるというのが本草書に見える。

(217)ヒゴザ(ヒルムシロ)——水田の害草として昔から知られる多年草。蛭のゴザの意であるがイゴザと呼ばれることもある。江戸幕府より代官への令達の中に、田草ノ中蛭藻等ハ殊ニ稻ノ痛ミナリ……右様ノ藻草之アル田地ハ仕付ノ際鶏糞ヲ入ルレバ藻草絶ユ……之アル村方ヘハ宜シク此ノ法ヲ教示スベシ(天明7年10月)というのがある。

(218)ヒツシノツ(タイミンタチバナ)——山中の常緑高木。フツノッ(大浦大木場、久志)堀切山ではヒツツイといい牛の鼻とおしにするし、黒瀬ではフツイノッといい実はヒヨドリがよく食べ木は稻田のウマ(稻架)の脚に使えばくされにくいという。赤生木ではフツイノッ^{くら}といい堅木だときいた。「百姓は、ヒツギの山矛(ヤマオコ)でステテコてんでに集る所はお蔵の前じゃが……」という加世田蔵元一揆当時の俗謡(安政5年、1858)のヒツギはこの木と思われる。此直幹を人丈よりも長目に切取り両端を尖らせたヤマオコを持った勇ましい集団がしのばれる。

(219)ピーピーバナ(グラジオラス)——— 切花用に栽培され、花の色に変化が多い。花茎を短かく切り取り笛として吹きならしたりしたので、ヒメヒオウギズイセン同様この方言でも呼ばれるらしい。カヤバナ(日置・吹上町など)ともいわれる。因みにピーピーダケ(南薩一帯)、ホンホンダケ(日置・吹上町など)は水辺のヨシのことで子供らが麦笛のように吹きならすのでこの名がついた。スズメノテッポウなどもピーピーグサという所がある(吹上町など)。高倉などでは、ヨシをヒヒンダキという。

(220)ヒメカズラ(サネカズラ)——— 山足などの雑木にからみつるかずらで秋冬の候雌株には小球果は花托上に頭状に集まり紅熟して美しい。稀には生垣にからましていることもある(加世田市)。枝葉を細切し白中でたたき湯でうすめてドロドロになったもので洗髪した。之で洗うと光沢が出て美しくなる。牛の毛なども洗ったという(東市来など)。○此葉ヲビン水ニ入テつかふに髪品うるわしく赤キ毛黒ク長クなるとて用人多し〔花地る〕伽羅の油昔は葉種尾にて商い男の髪ばかりに少しつけ女はさねかづらといふ物にて日々に梳りける故臭気もいわず奇麗なりしに四五十年以来男女とも頻に油を用い……〔翁草〕など記されている。ベンカズラ(笠沙・大浦町など)、ピンカズラ(大浦町) アブラカズラ(小湊)とも呼ばれる。またヒネカズラの通名もある。

(221)ヒメガタシ(サザンカ)——— 山中に自生し、10月下旬白花を開く。花卉は5枚であるが多数化した株の自生もある(磯間山中腹)。人家の生垣に用いたり、蜜柑山などの土堤に植え込んだりする。種子から油を搾るが、椿油より高価である。庭木に観賞用として植えられる品種には、白、紅または混合花色で八重品もあり、ツバキと称し、真のツバキ品種と同名で呼ばれる。野生のヤブツバキは一般にカタシという。

(222)ヒヨドイノミ(シロダモ)——— 秋冬の候ヒヨドリが熟果を好んで食べる木の実をこの方言で呼ぶ。老人はシロダモをスイメノキの名で覚えているがこの方言を知らぬ人は総称名としてのヒヨドイノミなどという。もちろんこの種に限定された名ではない。

(223)ヒワ(ビワ)——— 屋敷内に1,2本植えられている所もある。大形常緑葉のある枝頭に冬季白花を簇生し5月下旬頃より果実は色づきはじめる。果実について、枝頭子ヲ結デ竜眼ノ大サノ如ク簇簇ト相連リ肉少ク皮厚シ初メ黄緑熟スルトキハ則金黄微赤ヲ帯ブ上ニ菊様小臍有テ而青黒ナリ此ハ則チ花萼之残留スル者也(中略)或曰枇杷ノ実ヲ種ルトキハ則チ十カーニハシユロヲ生ズト此亦一奇ナリ然レドモ予未ダ之ヲ試ミズ〔食鑑4〕と要を得た記事が見えるが、後半の奇事は何の感違いかからだろうか。香味のあるビワを賞する人で、その核の大きなことを歎かぬ者はないが、全く無核のものの存在が古くから明記されている。ビワは我国に野生が知られ、大分、山口、福井の諸県では天然記念物に指定されている。果樹としては中国伝来の品種または在来種との交配種中優良種が普及するようになった。南薩の在来種は唐ビワである。ヒヤ(笠沙・万世など)ヒワ(津貫方面)が往時からの方言名であって楽器の琵琶(ビワ)とはっきり区別されていたが近頃では枇を濁音で読みビヤという人が多い。支那名はビパであるが俗にルクーと呼ばれるのは驢櫛の音で、その葉形がロバの耳に似ているからだという。熊本県や福岡県で、小形の在

来種をヒワ、大形果品種をビワと名付けて区別していることは興味深い事実である。

(224) ヒンカッコ(スマレ) —— 原野路傍の陽地に多く3月頃紫色花を咲く。南薩には数種類が見られ、有茎種のツボスマレやタチツボスマレと共に最も普通である。アオイスマレも稀に見られることがある(加世田)。子供達は「ヒンカッカをすいが(しょう)」といって、花のひっかけ合いをして遊んだものである。ヒンカックニ(鉄山)、ヒンコネ(赤生木)、ヒンカッソ(大浦)、ピンコッコ(金峰町池辺)などの方言も聞かれる。このほかウマンコッコ(日吉、吹上、金峰、川辺町など)、ジサンバッサンとかジジババ(吹上、金峰町)などいわれる。加世田名勝志帳には、駒引草の名が出ている。

(225) ブイダラ(カラスザンショウ) —— 山中に自生し羽状葉を互生する高木で羽片には油点が明らかであり幼木には丈夫なトゲを密布する。ブイダレともいい下駄材としてカガミに用いられは軽くてよいと喜ばれる。歯にはイチイガシ(イチノキ)がもちがよいがタブなどを使うこともある。またシャモジをつくることもあるという(大浦など)。種子は小鳥のエサとなる。

(226) フクイ(シチトウイ) —— 加世田市新川や相星川口付近の水泥中に見られる。津貫では方祭の太鼓踊りの時太鼓のムチはこの草で作る。単にイともいい大浦などでは白砂(シラスナ)にまぶして干し根元を束ねて先を捻げ折り返して板元を包むようにして結束して先端の花穂は切り捨てる。また裂いて薙(畳表)を作ることもある。豊後の青薙(大分県)は古来有名で琉球より伝えた(寛文年間)という。大蔵常永の国産考3に、席草 七嶋藺ともいう。薙に織りたるを琉球表と言うと記して詳説している。茎に髄が発達しているためジンガラグサ(万世など)の方言で呼ばれることもあるが、この名は多くイ(燈心草)に用いられるようである。

(227) フシノヅ(ヌルデ) —— 向陽の山足などに自生する落葉性羽状葉小高木で9月白花穂を開く雌雄異株。葉、枝にできる虫こぶを五倍子即ちフシといい特にミミフシは壁が厚くタンニン含有量も多い。ミミフシ(アブラ)ムシにより作られたもので中間宿主はチョウチンゴケ類だという。このフシを集め1升マスを伏せた上などにのせヒオコシ(火吹竹)などで押し転がして粉末にする。これと鉄屑などをよく混ぜ合せオハグロをニワトリの羽箒毛などを以ていろいろ端で菌染めをしたものという。明治末から大正初年までは既婚婦人に見られたことである。○雌漆 葉うるしのごとく秋紅葉する事花にかへたり実ハ女中齒黒ニ合ルふしと云物也一名構ぬるで共云かつつの木共云〔花地3〕。

(228) フカズラ(クス) —— 山足陽地に逞ましくはいまわったり木に巻きついたりする。この蔓は15夜行事の大綱の心に入れるものであった。新葉茎は牛の好物である。また蔓をさいて薪を結束したりする。カンネカズラ(日吉、吹上、川辺町、堀切山)、カンネンカズラ(阿多、高倉、指宿市他)、クンマッカズラ(吹上、赤生木、黒瀬など)ともいわれる。

(229) フツェクサ(イネの二度芽ばえ) —— 稲の刈株から二度芽立ちしたイネをいう。フツェグサ、フツェンクサともいう。大浦町クシキ馬場では、これを煎じて脳葉としたという。ヒツハエ、ヒツツ(種子島西表など)ともいう。○或有一歳再熟之稻、此称比豆知亦不足用也(食鑑

1]。カヤツリグサにこの方言名を転用していることもある(吹上町花田ほか)が誤用かも知れない。またクグガヤツリをフケと呼んでいる所(日吉町)などもある。

(230)フデバナ(イタチガヤ) ——— 火山灰の崖の斜面などによく生える1年生小草で穂の形が筆状である。またホウキグサなどともいわれる。ツンベルグの植物誌に、なよなよしたこの穂花の全草が図入りで発表されている。クリニツムという新名は弱い長毛を持つ意で全くそんな感じの穂である。

(231)フタナレ(ヤエナリ) ——— 小豆(アズキ)の近似種で更に小粒緑皮で発芽時胚軸が伸長著しいのでモヤシ(方言オヤシ)に作って喜ばれる。農業上は緑豆リョクトウと呼ばれているが古くはロクスと読まれたらしい。四月に蒔きて六月に収む。其たねを蒔きて八月に収む。此ゆへに農人はを二なりともいふ〔農全2〕。また、いなかにてはまさめと云ふとも記している。日用食品として、かゆ、だんご、あぶりもの、めん、酒のほか餅のアレによいとされ、解毒などの薬用にもよいという記事は、アレを除けば、支那の農桑通訳の引用である。二粒のこの豆で苦しんでいた脚疾がついに全快したという話や皮はつけたままでないと薬のききめは少ないなど支那の本に出ている。

(232)フダンス(フダンソウ) ——— 不断草の訛りで、不時種子をまいて生じ四時これある故につけられた名称。支那名は莧菜、甜菜、蒼蓬菜などで前二者は音テンサイであるが、我国では甜菜をカンサイ〔農全4〕カンツェイ〔和漢三才102〕としてあったが、現今ではテンサイと読み農業上では、サトウダイコンに当てている。蒼蓬の意味については、流石の季時珍も、義未詳とカブトをぬいでいる〔本草綱目菜部27〕。韓国では、クンデーの名で知られている。吹上町や金峰町などでは、カムナとかカモナといっているのは、甜菜の重箱読みであるのかも知れない。フダンソウを俗にトウチサということについて良安は、葉はチサに似てしばまず白けなきを異となす故に唐莧と名づく」と記している。この種は茎を抽いてから葉をかいで、ゆでて、酢味噌と和して食べることが多いが、味噌汁にも用いられる。あくが多い欠点がある。高三四尺茎ソクズノ如ク細稜有リ夏盛ニ冬枯ル〔本草図経〕など書かれている。

(233)フ(ヨモギ) — 路傍に多い雑草で、春先若葉を摘んでヨモギ餅(フノモチ)を作る。生葉は傷口の血止め用によく使い著効がある。ヨモギの綿毛は、モクサをつくるが、支那では艾蒿(ヨモギ1種)で之を製し灸に用いることが古くから記されている。その時の火は太陽を珠(レンズ)でうけ集めたものがよいとされ、木では槐の火がよく、八木の火(松、柏、桑、柘、棗、橘、榆、竹)は用いてはいけないという〔本草綱目〕。また張葉の博物誌に、削氷令円拳以向日以於後承其影則得火などの記事がみえる。端午の日に、鶏未鳴時採艾似人者攪而取之用灸有驗〔荆楚歲時記〕とあるように、まだ夜の明けない中に人の形に似たヨモギを探してとるなどの記事は何から思いついたものか。我国のヨモギは、夏昼夜に於て葉の上下運動をするので夜間は昼間平開した葉が上向して茎に向い葉裏の白毛が殊のほか目立って見えるものであるから、このような変化に気づいていた古代人の知恵に発したものかも知れない。また同書には五月五日採艾以為人懸門戸上以穢毒氣ともあって、この場合は、人の形をつくって門戸の上にかがけて毒

気をはらうのである。我国では軒端に、シ・ウブやヨモギをさす風習として伝わっている。

(234)フロマメ(ジュウロクササゲ) ——— 支那名は豇豆で、蔓性をなし若い莢を夏菜とする。莢は多く淡緑白色で横しわが多く30cm許のものと、更に長く、種子毎に莢面にくびれのある3尺ササゲというのがある。前者が早熟であるがいずれも若い莢を食べる。夏菜の上品なり民用を助る事茄子に對す〔菜譜下〕とし、食鑑1には、大抵夏時至秋与茄子為蔬中之上品也として籬ササゲ長さ丈余、地ササゲ蔓短似大豆高と區別している。約之救荒本草紀聞12には、紫豇豆十六ササゲ、ヘリトリササゲ、莢長二尺許下垂ス蒴ノヘリ薄紫ニ変ズとし、豇豆ササゲ蒴上向ス葉用ハ赤者許ヲ用フ方言甚多と云っている。豇豆の図を、植物名実図考2についてみるに、蔓性で枝端に二長莢相接し下垂していてジュウロクササゲの状である。親民鑑月集には大角豆の事としてササゲ類18品を記名し、18ささげ、ふらう、赤ふらう、筋ふらう、うすいろ、むらさきふらうの6色は、すくれてかつらなければ、竹のなかきにまかせたるほと実多し……三月より六月初まで植てよし。はやくハあぶら虫とて、ありか付申候。乍去、はやくおそく、せんくりせんくり植て吉。など書かれてある。フロマメという名は、莢が硬化しにくいから不老豆と呼ばれた方言名である。〔莽草〕毒ニ中タル者豇豆煮汁ヲ以テ飲メバ即解と云。

(235)ヘガラ(ハマクサギ) ——— 木に1種の臭気があり、蠅を追払うために枝葉を使う。大浦などでは馬屋などに吊して蠅よけにしたという。長島あたりでは、山中で弁当(ガエ)をあけて昼食する時など箸にこの枝を使うと蠅除けになるといい、また知覧町ニツ谷などでは、木炭(糴)にも製されるときいたから、まんざら捨てた木ではない。

(236)ヘゴ(シダ類) ——— 群落をつくる普通の種類では、ウラジロやコシダが山中に見られ、特に林中ウラジロの深い群落などをヘゴドンス(万世、大浦、金峰町など)、ヘゴダンス(吹上町小湊、堀切山など)といわれる。ウラジロは、支那南部から広く熱帯アジアに分布するが支那名は裏白と記され、最近では里白と略字が用いられている。良安は、和名オニワラビ俗云山草と記し、齒染(シダ)穂長(ホナガ)裏白(ウラジロ)を連記し、以飾元旦嘉祝之物と説明し、支那名の貴衆に之を当てている。しかし現在では貴衆はヤブソテツ類とされている。齒染の字にシダとヨワイノエダニ通りの仮名をつけ、正月に用之〔下学集〕とあるのを見ればこのシダは明らかにウラジロと思われる。羊齒類の読みは現在では、シダルイであり、ヒツジノハと書いてシダと読むが、シダは齒染が本源であろう。山草ヤマクサの名について、若人家園中植之不育実山草也〔和漢三才〕とあるが或はそうかも知れない。(93)、(137)参照。

(237)ヘコハツ(マルバシャリンバイ) ——— 山地向陽の地に普通の低木で5月白花が美しい。球形は紫黒色で子供らは生果を食べるが核は大きい。クンゴ(桶)の輪帯入れの時などに用いるサズシ(木ヅチ)はほとんどこの木を用いた。また大浦では盆踊りに鳴らす鉦タタキも之で作る。笠沙町や山川方面ではこの枝葉をせんじた液で魚網をそめた(浜島幸盛氏)という。

(238)ヘツカズラ(ヘクソカズラ) ——— 右まきの蔓草で対生葉は広狭変化があり、毛がなく表面光沢あるテリハヘクソカズラも見られる。大形葉では巾7cm、長さ17cm以上に及ぶも

のものもある。花は7月初頃から咲き、子供らは、ハナタコまたはハナテングと称し鼻柱にくっつけて遊び、黒瀬あたりでは小鳥捕りに用いたり、「うんま」遊びの時帯の後にこのツルをつけたりしたという。支那の植物名実図考(1848)の蔓草部に、臭皮藤、牛皮凍、鶏矢藤という蔓草の図がある。臭皮藤は江西に多く一名臭茎子とも言い葉は円く馬蹄の如くして尖る。秋青黄実を結び之を破れば汁あり甚だ臭し。土人以て瘡毒を洗うという。小野氏重修本(1884)にはこれにヘクソカズラが充ててある。この図は円果を伴っている。次にある牛皮凍は、対生葉で、花果を伴った良図で、説明に、湖南園圃林薄極多……葉濃緑光亮葉間秋開白筍子花小弁五出微卷向外黄紫色結青実有汁腥医云与臭皮藤一種円葉為雌長葉為雄云々とある。帝国大学理科大学植物標品目録(1886)にはこの支那名をヘクソカズラに充て、現在でも之が正しいとされている。最後の鶏矢藤は円果をつけた図で互生葉が書かれている。説明に、産安南黄緑莖葉長寸余……秋結青黄実硬殼有光円如緑豆稍大氣臭腥医以為洗藥云々と記している。この支那名こそ現今支那でヘクソカズラの正名として植物誌中に用いられているのである。この矢というのは尿のことでこの植物の臭気はどこまでもまといついている。和漢共に上品な名前ではないが仕方ない。

(239)ヘトイグサ(モウセンゴケ) —— 多湿の傾面や溝脇などに群生を見ることがある。別種コモウセンゴケも同様な立地に稀に見られ、短柄の葉をロゼット状に密生し、夏日淡紅花を咲く。両種共周知の食虫植物である。

(240)ペンペン草(ナズナ) —— 最も普通な春の七草の一つで、日当りよい所では1月早々ロゼット葉の中心から小白花を抽出する。近頃はこの草を食草とするのをきかないが、古くは菜として用いたのであろう加世田名勝志帳中に菜類として出ている。朝鮮半島では北部でナシ、中南部で、ネンイ、ナンジなどの呼称があり食用とされるし、支那でもチミツァイとして摘菜として用いられる。またナズナの花を3月3日に採って油花ト(占ない)とする行事なども書いたものがあるし蓄効ある薬草としても記されている。果実は小さな扇形で、バチグサと古歌にもある。ジジノキンチャク(愛知県)、スズメノガラコ(青森県)などは巾着状の果形によった方言名であるが、学名でも英名でも、羊飼いの巾着(キンチャク)というのをみると人情はいずれも同じである。袋の口を長い紐でしばり込んでとじてまきつける錢袋は今は滅多に見られぬ珍物となつてしまったが、ナズナのキンチャクやヒナノキンチャク(別植物)のキンチャクは永久に残るのだろう。○結実三角……似三絃之撥小兒以其ニ相摩則有音故名三絃草(シャミセンクサ)〔三才〕。(241)ペンタブ(タブノキ) —— タブにペンタブとシロタブがあつて後者は、材としてはコナムシがつきやすいという。前者は、枕崎で鰐釣りの船の人達が、魚の組板(方言キリバン)に用い30年も50年も保つといっている。(139)参照。

(242)ボイバナ(センニチコウ) —— 古くから農家に作られ、干藺盆に墓前仏前の供花になくてもはな花であつた。淡紅花と白花があり、天和(1631~33)頃渡来し、乾花としてもよろこばれた。ボウズバナ、ボンボン(津貫)、ボンボイ(日吉町、金峰町など)などとも言う。

(243)ホシャノツ(コナラ) —— 雑木林中にあり ホサノツ(加世田、堀切山など)ともいう。炭につくられる。また雑草栽培にこの木を使うときいたが、これに似た木で葉が少しちがうのを

ナルというのがある（知覧町ニッ谷）という。古名波々曾〔新撰字鏡〕は、又俗称保於曾〔和漢三才〕ともあって之は波保曾加之波〔大同類集方〕と同じで即ち細葉の義という。ナルという木は、クヌギと思われ、岡村尚謙の云うように、此葉變黄の時猶枝梢に附着して不落其風を得て鳴動する故にならとは名付し物ならん。クヌギは正にこの通りで、秋変葉後も離層の発達わるく、あたかも枯葉をつけた状態で冬を越すもので、吹く風にざわつく此木にしみじみとも鳴るの木と名付けたのであろう。南薩では、ナラと云わずにナルというからそのものずばりの名前ともいえる。古今要覧稿草木部にハハソの図があるが、ハハソ2種、ナラ、コナラ、オオナラ、カシワ、コカシワ、クヌギ、メクヌギの9図は省略されて十分の一ほどしか図を出してない。活字版は惜しんででも余りある感がある。

（244）ホタルダケ（メダケ）—— 津貫でホタルダケ、上津貫では、ニガッダケなど称することがある。ホタルダケというのは、ホタルを捕りおさえる竹笹として用いたから名付けた名らしい。ニガッダケというのは、ニガダケを威勢よく区切ってなまった発音であろうか。（194）参照。

（245）ホトクロ（メヒジワ）—— 畑地に多い厄介な一年生雑草。茎は下部節毎に発根四方に広がり地にへばりつき除去に難儀する。ホトクイとも云う。和名メヒジワは、オヒジワ（87）に比し弱々しいからついたけれども、ヒジワの名義については、旱芝かという〔嬉遊笑覧12〕し牧野氏は、之ヲめひじはト云フハ音便ニ曲リシナランという。島根県で、フチハイ（雲州）、タケヒジハ（石州）などの名があり、ヒジ（肱）がはたがったようなこの草の生態にもとづいた名だと、同県赤名の人にきいたことがある。ハというのはハグサのことでこの草の方言にも残っている所があるのを考えれば、メヒジハが音便によりメヒジワとなっているのであろう。前記植物標品目録には、メヒジハと書かれ、其10年後の植物名彙には、メヒジハと記しメヒジワと読んでいる。吹上町方面で、ホトクイハッというのはこの草の畑一面に群生した状をいうのか。

（246）ホトケミン（スベリヒユ）—— 肥沃な畑地によく生える夏草。仏の耳の意で葉形に基づく。和名は、馬齒 莧 牟末比由今案俗云須倍利比由〔多識3の7ウ〕とある。茎葉をゆでて干したものを貯えて食用にすることができ、支那ではこの遺風が伝わっている。楚俗是を元旦に食す〔野譜〕とある。中支では戦前、農家の庭先に拡げた薤上に黒変したこの干物を夏日下に見ることができた。この草は茎赤、葉青、花黄、種黒、根白であるので五行草と云うのはよいが、多肉な茎などが表皮をとおして白っぽく見るから水銀が取れると他愛もないことが本草書に記されている。支那名馬齒 莧は、馬の歯に葉が似ているからで、支那の県志中に、鼠 齒 莧と出ているのを写したことがあるが、これはスベリヒユの小形のものだと書いてあった。花については、其花千葉黄色小而美〔和漢三才〕、葉間ニ黄花ヲ開ク大サニ分許十弁ナリ〔救荒啓蒙13〕とあって如何にも八重花のようにしてあるのは、この花が小さいばかりでなく正開する条件が限られているため観察不十分の結果であろう。

（247）ボブラ（ボウブラ）—— 南瓜の和名をボウブラといい扁円形菊座形の大果をつけるものでこの地方では近時は、カボチャと呼ばれることが多いが、古くは和名の訛ったボブラと称し、本来のカボチャ即ち長円形で首のあるもの区別していた。南瓜今俗云南蛮字利〔多識3の9〕、

俗云保字不良、形色似阿古陀瓜阿古陀瓜不煮食〔和漢三才〕 南京瓜 東埔塞瓜、唐茄子共俗稱〔同書〕。南瓜慶長元和の頃初て日本に来る。京都には延宝年中はじめてうふ其前はなし〔菜譜中〕。カボチャの小さなを唐茄子と名付くはやり出せしは明和7,8年(1770)頃なり〔嬉遊笑覧〕。カボチャ トウナス 上高クツボノ形ナルモノ、形扁ナルモノヲボウフラト云、円クヒダナク皮赤色ノモノヲアコダト云〔物品識名乾51〕。広く作られているボウフラは、この地方でみかけないカボチャに、その名をすりかえられてしまった。カボチャ即ナンキンボウフラは番南瓜という。

(248)モホー(モッコク)——葉状稍シャリンバイ(ハママッコク)に似、葉柄は帯紅色、葉身表面光沢があって美しい。庭木にしたり、墓所に植えたり、シバとして用いたりする所(開聞地方)もある。本国此木人このんで庭にうふ〔花譜下〕とも書かれてある。木を切ると中が赤い。手杵にしたり、伐木の際伐口に打ち込む矢の材としてよい。支那の書に、水木犀というのがあり益軒は之をハママッコクに当て、良安はモッコクにあてているがいずれも誤用らしい。後藤光生はハママッコウと仮名をつけているが誤植だろう〔物品目録上31ウ〕。

(249)ホンザンショウ(サンショウ)——薬用、食用等に古来広く用いられたが、この木はスリコギをつくるによいという。支那では古く、荆楚之俗正月一日長幼悉正衣冠以次拜賀進椒酒などの記事がある。別種フユザンショウは、紀州にてフダンザンショウと云〔救荒啓蒙9の4〕、支那にも分布し竹葉椒と称せられる。イヌザンショウは漢名崖椒にあてているが、本草綱目によれば不甚香而子灰色不黒無光の後段が気がかりになる。種子は漆黒色で光沢があるからである。同書には、野人炒テ鶏鴨ノ食ニ用ユと用途を記している。古来山椒をつぶして川魚を捕ふるの習俗あり〔民間薬用植物誌〕というのがこの地方では未だこの事実をきかない。(103)参照。

(250)ボンバナ(オミナエシ)——お盆の頃さく。仲秋の名用へ、ススキ、ハギなどと共に供花とする。オミナエシの名は、万葉集に見えるし女郎花と書かれているが、後オミナメシ〔易林本節用集など〕などとも云われた。花壇綱目中に、女郎花、花黄也。南楼、花白也藤袴とも云とある。この南楼は男郎即ちオトコエシである。益軒は、おみなへし七月花をひらく……本草に敗醬あり女郎花なるへし。敗醬は白花のよしみえ侍る。されとも花の色は所によりてかはる事あり〔花譜下〕と記しているが、後、敗醬本草ニ載ル所蘇恭力説ハ花黄ナリ時珍力説ハ花白ト云…本邦ニテモ黄白二色アリ…古歌ニヨミ国朝ノ詩人ノ詠ゼシハ黄花ナリ白花ナルヲ俗ニヲトコヘシト云…此花葉ノ臭醬ノ損ジタルガ如シト本草ニイヘリ今試ルニ然リ根モ同臭アリ黄花ハ七八月開ク白花ハ四月開ク又秋開クモアリ〔大和本草〕と正している。この中四月開花のものは、ハルオミナエシ(カノコソウ)を指しているのかも知れない。地花菜〔救荒本草〕はヨミナメシは黄花ノ敗醬ニシテ即女郎花ナリ〔救荒啓蒙5〕。加世田市万世あたりでは、ノダケをボンバナと云っていたようである。オトコエシは山野に多いが、瓶花としてはほとんど用いられない。

(251)マカヤ(チガヤ)——陽当たりよき原野に群生する。刈取って屋根葺用にした。大形のものは、十五夜竊作りの時ワラに混ぜて用いることがあった(阿多白川など)。春数センチに伸び出した穂ばらみの部分をオンバナやツバナと言って、子供達は抜きとって食べること(40)に記

した通りである。地下茎も掘取ってかみしゃぶると甘味がある。図経本草に、春生苗布地如鍼俗間謂之茅鍼亦可噉甚益小兒夏生白花茸茸然至秋而枯其根至潔白亦甚甘美六月採根用とあり、本草綱目には、其根甚長白軟如筋而有節味甘俗稱糸茅と言ひ、其根乾之夜視有光故腐則變為螢火などの怪しい記事も見える。また茅之白者古用包裹礼物以充祭祀縮酒用と書いたものもあって支那では神聖なものとして用いられていたようである。古来、ツバナを食うとふると信じていたのかやせたうてつばなも食はぬ花盛という俳句があるほどである。娘ざかりは、太ることが余ほど気になるとみえる人情は今も変らぬ。オトコガヤ(トキワスキ)に対しオナゴガヤ(チガヤ)と言う。

(252) マゴヤシ(ヤクシソウ?)——牛の飼料になる草。鉄山(加世田市)などでは、ヤクシソウをウマゴヤシといっているが津貫方面では、はっきりしない。長島では、オニノゲシをマゴヤシといい牛馬に食べさせるときた。ニガモツ、チチケシ(大浦など)、ニガケシ(小湊など)は、ノゲシのことで牛の好飼料である。ウマゴヤシ〔和漢三才〕は黃瓜菜に充つ細子有不成絮と。ヤクシソウ方言ニガクサ(大浦、長屋鮎川など)は、馬が自分の耳と取りかえても欲しがる好物。

(253) マッコノキ(シキミ)——山中にしばしば見られる常緑高木で3月淡黄多弁花を開く。稀に帯紅花のウスベニシキミもある(万世など)。この群落が磯間どん(磯間山)の上方にあり。葉をせんじつめたものを風呂に入れると神経痛に効ありという。神への供しげにする所(阿多白川など)もあり、種子はお手玉の中に入れたりする。樹皮は線香材料に利用された。河太郎ト相撲トリタル人正気ヲ矢ヒ病スルニシキミノ木ノ皮ヲハギ抹香トシ水ニカキタテ吞スレバ忽正気ニナリ本復ス屢用テ効アリ——貝原益軒は、こんなことを真面目に書いている〔大和付録1の21〕。

(254) マッサカズラ(テイカズラ)——よく樹石にまといついている常緑のかずらで新梢に有毛なものは、ケテイカズラである。マサキカズラは古名をマサキツラ、アマノマサキなどといい、今名ツルマサキに充てられたこともあったが、今ではテイカズラのこととされている。古事記などに之をカツラにしたとあり、この地方では別名方言モテカズラといわれる通り、元結に用いられたようである。マッサカズラは、古名が伝わり残ったものと思われる。このつるは帯黒色で、葉は濃緑光沢があり秋冬紅葉を交えて美しく、また新葉も淡紅を帯びるものがある。

(77) 参照

(255) マッドゴ(マンリョウ)——山中にも自生するが、よく庭先に植えられる。この方言は、津貫できいたが、マルダゴイの転じた名と思われる。マンリョウのことをダゴイと思っていた老婆があった(加世田柿元)が元来はイヌマキのことらしい。イヌマキはヒトツバが通名となっていて雌木は、赤い甘い花托の先に緑色の種子の球がついているが、マンリョウは単に球状紅果が房状につくので丸の名を冠したのであろう。栽培品には、白質果のものも見られる。津貫からアメリカへの移民の中に、この美しい紅果をしのび、わざわざ故国から種子を取り寄せた人もあったそうである。津貫小学校に北米原産のラクウショウ(落羽松)の大本が1本あるが、

明治38年に小苗を植えたものだという。移民の手を経て移植されたのであろう。因みに、長屋小学校の講堂前に、チュウリップノキ(ユリノキ)の大木がみられるのも移民と関係があるのかも知れない。北米と極東(中支)に1種ずつある珍木である。

(256) マツバグサ(スギナ)——路傍や畑地の雑草で地下茎が深く除去し難い。今の子供にきけば、ほとんどスギナ(杉菜)と答えてマツバグサ(松葉草)の名は知らぬものも多いが、50年も前はすべてマツバグサが通名で、よく兎の餌にしたものである。しかし、ツクシはこの地方では食べる習慣がみられなかったのは不思議な程である。花茎ヲ煮食ス味美シ、葉如杉馬好ンデ食フ〔大和5〕といい本草食鑑は食用ツクシ堀りの状況を伝えている。ツクシの頭部は、裸子植物の雄花の集りを想起させ、胞子を粉状に飛散する量は夥しく、それが予期に反して緑色チョークの粉色なのおどろくことがある。マツガネ、マツガネクサ、マツネグサなどの名は多く日置郡(日吉、吹上、金峰町)でしかれる方言である。また、ツツゲグサというのは、節々でつなぎ合わせたようになっているからつけた名か、遊びに由来した名であろう。

(257) マツラン(ボウラン)——松の木に着生することがある。加世田市新川の松林中にも見られる。ボウランを漢名釵子股一名金釵股なりとして、東壁日石斛名金釵花、此草状似之故名の文を引用、琉球産近世薩摩ヨリ来ル…中山伝信録ニ直に棒蘭ニ作ル〔平賀源内：物類品彙3〕など書かれている。セッコクと似た生態の着生ランである。ミルラン(薩州)とも出ている。

(258) マテノツ(マテバシイ)——常緑のカシでドングリは煮て食べることがある。防風垣に用いることもある。子供らは、この果実を指間でひねってコマ廻しの遊びをする。マテガシともいわれる。さつま椎葉各別大キシ実も大キ成よし〔花壇地錦抄3〕というのは、マテバシイのことらしいが続紀伊風土記中には、薩摩椎、末天葉椎を別種として取扱ってあるようである。マテというのは、貝の一種マテの殻形にその葉が似ているからかよくわからない。

(259) マホギ(ムベ)——山中に見る藤本で時には庭に植えられる。常緑の小葉はアケビに似て大形光沢がある。マボケ(鉄山など)、マホゲ(鮎川など)ともいわれるが、ムベの名でよく知られている。戦前は、各地小学校の運動会の時など出店にこの紫紅果もよく見られた。アケビとちがい縦に裂開することなく白い果肉は果内を満たして甚だ甘美であるが種子が多すぎるのには閉口する。救荒本草10に野木瓜というのがあり、古来ムベにあて、最近ではアケビにあてた本がある。採斂瓜換水煮食樹熟者亦可摘食とあるのを、森約之の紀聞には、換水未熟者アヨクサシ故ニ水ヲカヘテツケレバジクスル也と説明している。山中でたまたまムベやアケビの果実を発見すれば、それが青い未熟果であっても、子供らは大抵見逃さず持ち帰る習慣がある。家で米糠中に埋めて置けば早熟するときき、米ビツの中に入れて成熟を待つのであった。方言名マボケは真木瓜らしく、大隅では、アケビをアオボケ、ミツバアケビをアカボケという〔鹿児島植物民俗記5〕。

(260) マンザイギク(エゾギク)——切花用として栽培され、深紫帯青や淡紅色、白色などがある。草木図説16に、サツマギク、サツマコンギクの名で図解がある。漢字では、藍菊〔花鏡〕翠菊〔群芳譜〕と書かれている。

(261) マンダラ(ケイトウ)——切花用に栽培され今では品種も多い。ハマンダラはハゲイトウ、サガイマンダラはヒモゲイトウでいずれもケイトウとは別属である。蔓陀羅花は、チョウセンアサガオ一名キチガイナスビであるが、ケイトウを何故こう呼ぶのか。

(262) ミソヒッチ(シャシャンボ)——浅山に普通の低木で、5月中下旬の新葉は紅色で美しい。葉形一見ヒサカキに似る。秋期黒熟した果実を生食する。ミソチッ、ミソツッ、ミソッチョ、ミソイッチョ、ミソヒッチン、ミソソツなどが南薩線沿いの地域で呼ばれている。別系統の方言サセッも大浦、小湊、万世方面などで使われている。サセッという名は、古名佐之夫乃紀が転訛して伝えられたものらしい。本草の南燭または烏草にあてているが後世之をナンテンなりと誤信するようになったが、南燭と南天は別物である。南燭を俗に南天燭と謂うという図經の記事がまちがいのものとなったらしい。果実は支那でも、其味甘酸小兒食之〔本草綱目〕というが、また葉を搗いた汁で飯を染めると青くして光あり能く陽氣を資くと言う。この果実はあまり食べると歯が黒くなると大浦などではいっている。

(263) ミツバゼ(ミツバゼリ)——ひかげの湿地にみられる。子おちて自能自生す其茎味よし。むかしは不食近年食する事をしりて市にもうる春の間食す他月は食するにたらず〔菜譜中〕といひまた、今人多賞之故十月採出於宿根嫩苗販之然不如正二月之風味佳者也〔和漢三才〕とあって早春食用に供したことがわかる。三葉芹和名不加豆美京俗謂牛之比多伊〔食鑑〕はタガラシか。

(264) ミツバツツジ(ツクシアカツツジ)——磯間山中腹以上にあり、4月下旬から5月上旬に花がある。故菊野さんによれば、常緑と落葉の2種があるという。

(265) ミバナ(アオモジ)——10年ばかり前、15-6人の人夫達が本坊家の山払いに出かけた時、伊作方面から導入しその後山にひろがったという。蕾は冬月墓へ供花とする。秋の黄葉は他樹の中にひき立って見える。堀切山などでは、ショガバナといい家周りに植えられた所がある。葉のショウガのような香気に基づいた方言。

(265¹) ミンヤンノクサ(ユキノシタ)——庭先などによく栽培されていて観賞用の外薬用にもされる実用植物。5月中旬頃から白花を開く。方言名は、耳病の草の意。漢字名は虎耳草といい本草書では石草部に入れられる。国訓トラノミミ〔多識篇〕ユキノシタ〔花壇地錦抄〕キンソウ〔花譜中〕という。全草硝酸カリ、塩化カリを含むという。ミンダラ(久木野など)ミンダレグサ(大隅)ミンナオシ(日置など)の名もある。またチョカンフタ(吹上、金峰町、川辺町など)チョカマツ(内山田、内布、長屋など)チョカマキ(加世田)チョカモッコ(益山)等。

(266) ミンツンボ(オニタビラコ)——随所に多い越年生小雑草で小形頭状花は黄色で後冠毛ある種子を結ぶ。本草綱目菜部の黄瓜果はこの植物にあてられている。其花黄其氣如瓜故名と釈名に出ているからさしあたりキウリナ(クサ)という所だろう。オニタビラコを堀切山ではゴンメモツというのは、小形を意味した言葉に輕視の意を含めた俗語であろう。ニガモツ(大浦など)というのはノゲシのことであって牛の飼料になるときいた。野人茹之亦采以飼我鳥〔前掲書〕という。モツというのは餅に関連があるのかまだ確証を得ない。(96)(298)参照。

(267) ムクロ(ムクロジ)——人里に稀に栽培される落葉高木で、羽状複葉を互生する。球形の硬種子は、正月羽つきの玉に用いた。即ち小孔をあけ、鳥の羽を植えた玉を羽子板で打ち揚げる女子のあそびであった。また果皮を石けん代用にした(吹上町など)という。黄色梅干大の果実を手でもむと、泡がたつ(大浦 川上美和子さん)などいう。其子皮煎汁洗衣能去垢又漬水以管則泡脹起以為戲俗云奢盆〔和漢三才83〕というのが無患子の条下にある。石鹼に使用したりシャボン玉遊びをするというのである。世人相伝以此木為器用以厭鬼魅故号曰無患人人訛為木患也〔古今注〕といい我国にも其事を伝えて、胡鬼子(コギ)といふものを作り出せしに無患木槩其子相似たれば、竟に木槩子を用ゆる事になりしなるべし〔東雅16〕という。また旧説には、春初に羽子つきぬれば、夏に至て咬にささる事なきまじないなりといふ事あり〔同上〕とも言われている。ムクロジとモクゲンジ(木槩樹または槩草)はよく混同されてきたが後者は外来種と見なされている。南薩には見かけない。モクロ(津貫、吹上町)、モクヨ、ムクヨともいう。

(268) ム(ムギ)——ムギの総称名。麦之種類多品不減稻類……といひ穀のないものを稗麦尋常之麦を荒麦といひ六角黑白日向三月等の名があり稗麦には京青赤等、極小粒のものをチムチクリ(小麦に似て円肥白色味もよい)、禾穂紫色小粒のものを紺屋麦、餅をつくるによい餅麦などあり〔食鑑1〕。近年朝鮮ノ種ヲ世間ニツクル大麦ナレトモ小麦ニモ似タリ皮ナクシテ如小麦と大和本草にあるのはこれであろう。同書には、1株数十茎を生ずる長者麦の名も見える(普通品種は20数茎)が多肥を要する故一般農家向きではないと言っている。其種子色々かず多き物なり。はだか麦の内には米むぎやす、京むぎやす、赤むぎやす(此むぎやすと言ふはいなかのはだか麦の事をいふ)又広嶋はだかなと言ふあり〔農全2〕。また、凡大麦の種類無慮30余品あり……中には実知子(ミシリコ)は地を踏ず取実最鋭し……〔成形図説17〕とか其品凡50余種アリ〔重修17〕など出ている。小麦については、此亦数種名品稍多不可作飯食惟作粉……〔食鑑1〕、按小麦種類多、早麦としてムカデ、晩麦として坊主をあげ、下種は大麦と同時であるが刈収時は大麦より10日許おくれる。丸亀産は上と為し、饅頭をつくって色が白い。関東、越後のはソウメンやフとしてよく、肥後では醤油としてよい〔和漢三才〕と記され、大麦品種に比べると数は少なく、10品に満たず〔重修17〕と言っている。加世田名勝志帳には、小麦六角、穂長、坊主、大麦六角、青ハダカ、荒麦などの名がみえる。日干が不十分な小麦種子をカマスに入れて貯蔵すると「チュチュが出る」と言う言葉通りに麦蛾が羽化して種実はずっかりからっぽになることがある。江戸期農業宝典で有名な農業全書には、この重大事にふれてないのは不思議であるが、大和本草には次の通り記されている。「述異記晋永嘉中梁州雨七旬麦化為飛蛾今モ麦タウシク苞ニ入ヲキテテ雨間日ニホサザレバ化シテ飛蛾トナル非奇事」〔大和4の10〕と。之を防止する法として、よく晒乾してからツボやオケ中に入れ、以乾蓼蓋密不生蛾と古今医統に出ているそうである。ハダカムギは、押麦(方言オッシビイ)につくり、白米と混炊して昭和初年までは農家では常食であったが、屋弁当には釜の上面の暗色の麦をのけて下層の白飯を入れたものだ。押潰された円形の麦粒には縦にかっ色の条溝が目立っていた。戦後も押麦は自家用につくられたが、5~6年前から新型押麦がピタバアレーの名で登場し黄色なビニール袋1kg

入り70円で販売されている。精麦100gにビタミンB₁ 1.2mgを強化し、白米に不足しがちのB₁が補給できますとある。宮崎県製造品。在来押麦より小粒白色であり、チンチクリ系統のものらしい。ビール醸造用の二条大麦は大粒で、ビール麦と称し時に栽培されているが、一般に大麦は脱穀は大正、昭和(戦前)までは千歯、其後は廻転脱穀機で行なって穂首をはなしてから連枷(メグイボ)でたたくなど面倒であったので味噌など製造用のはかは栽培も減少した。終戦後は食糧増産に必死で大麦の移植法が一時行われたこともあったが立ち消えとなった。

(269)メイゲナ(シャクシナ)——水田裏作などによく作られて蔬菜に供された。大正年間、近頃普通のキャベツは栽培されず、シャクシナなど一般であった。明治初年の移入だという。中国原産で、揚子江流域では高脚白、箭桿白などの名で県誌に記されている。メシゲはシャモジのことでその葉形に由った名で、音便によりメイゲになった。

(270)メゴタケ(オカメザサ)——時々植えられるが、金峰山麓浦之名方面、川辺山寺山などには群生する所がある。メゴ(目籠)を作るに利用されたのでこの名がある。和漢三才図会には五枚篠として、植寺院玩之といい、花壇地錦抄には、豊後笹くまささに少にて各別也と出ている。

(271)メツッパイ(セキシウ)——メツッパリの意で、穂を適当な長さに切り、上下のまぶたにうまく当てて目を大きく広げて遊ぶのでこの名がある。この植物のほかオオバコ、ジャノヒゲなどを用いることもある。また一般にはナツツタの葉柄や時には、ツボグサ(益山、川辺など)の葉柄を用いたりする。和歌山県でツタをメハリカズラ、ツボクサをメッパグサという〔和歌山県植物方言集59, 61頁〕のと同様な意味を含むのであろう。メツッパリは単なる遊びだけでなく老人など疲れた目を癒すための実用的療法としてツタなどを用いたのであろう。

(272)メノッ(エノキ)——またメノキとも言う。人里の所々にとり残されたように大木を見ることがある。黒熟した果実は食べることがあるがムクノキ(方言も同名)よりは小形である。7年位前からエノキをヒラタケ栽培に使うことを始めたと言う。伐採後3週間位、1尺5寸位に切り日蔭の地面に2寸位埋めてヒラタケ菌をたたき込むと翌年秋ヒラタケが出る。この菌はシイノキに生えず偶然エノキの切株に生えたのを発見したことがあったのだと言う。正月にこの木の枝に切餅を差し所謂メノモチを作り祭る風習があったが今は殆んどすたれている所も多い。赤生木では餅年に餅をさすのに用いたのでエノキをモッサシノ(赤生木、大浦など)の名があり、粟や米餅のメノモチを部屋の四隅にさして飾ったが、加世田市唐仁原では1月15日にネコヤナギと共に部屋の天井隅から枝垂れるようにして祭る。下げた真下に寝ると病気になるという俗信もあった。日置郡でもメノモチを祭り、モチツナギの方言名(吹上町和田など)などきかれる。ツンベルグ植物誌に、メノキの日本名が記されている。〔114頁〕。

(273)モガセ(コバンモチ)——随所に生えかなり高大木を見ることがある。常緑広葉樹で紅色の葉を混生するものが多い。短柄のモガシも同方言で呼ばれる。材は軟くて無用ともいい、また3つ割りや4つ割りにして鎌の柄にすることもあるが、葉は牛の飼料として諸所で使われている。オカビノ(阿多など)、オカベデンベノ(和田など)とも呼ばれ、葉が軟いのでオカ

ビ即ちオカベ（豆腐のこと）の木と言うのだと考えている人もある。モカイノッ（益山，大浦，金峰町）モガシノッ（赤生木，堀切山など）とも言う。木の中新芽が最も早く出ると言い，モガキの葉が出たら……せよなどと言う。

（274）モクラモッ（トゲソバ）——随所に多い逆刺ある雑草で，5月中旬頃より淡紅花を開き6月最盛期となる。金平糖状の花序は時に純白色のものもありシロバナトゲソバと言われる。モグラグサとも言われ，吹上町などではミゾソバ，加世田市川畑，内山田などではトゲソバに当てているが，内布などでは，ヤエムグラを指していることもあるらしく，麦畑にあって麦にはいあがりトゲがあると云っている。和名毛久良俗云無久良として，按称無久良者多而葎草少有之猪殃々多又有（ミゾムグラ）注水溝傍〔和漢三才蔓草類〕と記され，夫々カナムグラ，ヤエムグラの図が出ていますが最後のミゾムグラの今名はよくわからない。植物名実図考温草類に絆根草の図があり，爾雅茜蔓千或即此とあり，ハイキビかキシウスズモノヒエを想起させるイネ科植物を示している。所が葎の本場の支那でも，ダンギク（クマツヅラ科）と言う全く別植物に当てている〔種子植物名称82頁〕ものもある。

（275）モソダケ（モウソウチク）——人家付近に栽培されることがある大形の竹で支那（浙江）原産で揚子江下流域にもこの竹林を見ることがある。早春有毛の竹皮に包まれた筍を生じ美味である。結節は1輪状で節の上段は極めて低く下辺は稍高いのでマダケやハチクと区別できる。桿の下部は大きいので花生にしたりする。元文1（1736）年琉球よりはじめて薩藩に伝来された竹で2株が磯別邸に植えられた。竹譜詳録には，竹身下麤上細竿大葉小不宜図画と其状を載す。

（276）モッゴメ（モチイネ）——古くは，松笠餅，川内餅，ヲウミコ餅，尾張餅，目黒餅などの品種が加世田名勝志帳に見えるがこのうち川内，尾張餅などは明治終り頃までは作られたらしい。金峰町などではウッダイ（尾下）餅（日向餅と言う），サンドビッキイ（川内餅のことで，分葉力大で収量多く美味）など作られたと言う。10月亥（イ）の日には餅をついてフラット2個におさめこれをX形に竹幹に結えつけ，収穫跡の田に立ててまつ。子供らは，このツトを見つけると中から餅を取り出して食べる習慣がある。雑五行書云十月亥日食餅令人無病又一説云 能生多子…〔下学集〕とあって水田の多収を祈っての祭りであろうし，これにあやかりおさがるの餅をいただいた子供は健康に育つというものであろう。

（277）モロノッ（イヌガヤ）——正月8日にこの枝葉を墓に供えるが一方モロノッとタラの茎を割ったものを薪にわらでしばりつけて住家（イイヤ）の外側の柱の根元4，5箇所を立てかけ馬舎（ウマヤ）にも2，3箇所同様に立てかけた（上津貫），正月7日夕方取り集めて焚火をしてあたたまった。この火をオネッカと言った。明朝早起してみるとこの火の跡に鬼が傘程大きな餅を焼いてあってとても甘くておいしいものだと子供達は教えられたものである。伊作では正月1～5日にはクロマツ，ユズリハ，6～10日はモロとタラ，11～15日はネコヤナギのケズイタテを墓前に供えるという（12）参照。イヌガヤは葉先が針状であり，タラノキは茎にトゲが多いので悪鬼をよせつけぬというまじないで悪魔払い厄払いの意味があるのであろう。こ

の両植物について上津貫に伝わる伝説がある。蛇性の女房に追われて命からがら逃げて、タレ山にとび込んだ主人（大工）は大声を張り上げて、タレと叫んだところ1本の木がすっと広がって追跡をまぬがれたが 1万蛇は火を吹いて追ってきたのでタレの下の木モロモロを持って防火命拾いをした（この木はパチパチと音をたてるのみですぐには燃えない）という（生きて居れば90才になるという祖父より義母がきいたという話を福元教子さんが語ってくれたもの）。イヌガキは、モロ、モロンハ（各地）、モロモロノッ（大浦、黒瀬、津貫など）などともいわれる。外種皮（赤）は生食す。

（278）モレカ（ムクゲ）——古く支那から伝来されたと思われ、花は朝開暮落の故を以て万葉集などではアサガオと呼んでいる。和名抄には牽牛子をアサガホと読んでいるが古今集ではケニゴシの名が見える。即ちアサガオの名は二物を指していたようであるが、今名としては後者が残り前者即ち木槿（~~葺~~）はムクゲの和名に定まってしまった。同名異物の証拠として、下学集下に面白い詩が引用してある。宋人詩曰、~~槿~~華 下点秋事，早有牽牛上竹来，此ノ詩ノ意ヲ以テ見レバ則チ~~槿~~葺，牽牛ト各別也云々（後半原漢文）。花ノ下品也トイヘドモ好花モ亦アリ〔大和12〕また凡下不堪観者名~~籬~~槿入薬用白花味噌汁煮治痢疾〔本草一家言2〕と言う。觀賞品種には長八本（花八重二べにのはきかけあり同花に色濃とうすき二種あり）白縮緬（なるほど白大りんひとへ也）紫ちりめん（むらさき大りんひとへ）うすずみ（ねずみいろのやうにて八重ひとへあり大りん）そこあか（うすずみいろひとへ八重有花の中あかし）此外いろいろあり白紫八重ひとへの四色は野原にあり〔花地3〕と出ている。舜英，白 単葉其花大似木芙蓉〔和漢三才84〕とあるのは、白ちりめんであろう。この型のものが吹上町などの畑地に見られ美事である。ムクゲの花は何故か忌み嫌われる所もある。金峰町大野辺では、この花にさわると中風のように手がふるえるようになると恐れ、墓花にも仏花にも供えず。また家花として庭にも植えず畑の境木などにしている。子供らも絶対花にさわらぬように教えられているという。この花をモレノハナ（加世田など）などいうことを考えると、花形がモレドン（托鉢僧）の打ち振る小鈴の形に似ているからこう言う俗信が生れたか、或は亡霊花の意味として捉えたためおそれられるのだろうか想像すると果てしがたい。一方加世田市益山などでは、子供達がギンヤンマとりにこの花の副葉を用いたりして遊ぶ。副葉を2個とりそのもとを1本の馬の尾毛の両端に結びつけて稻田の上を直進飛来するギンヤンマを待ち伏せて、これを投げかけるのである。今ではもうこんな状景も滅多に見られない。モネクワ（益山）モレンカ（阿多）ゴレッカ（日吉町、川辺町、内山田）ゴレンカ（金峰町白川、川辺町）ゴレツパ（大浦）の方言名のほかウカゼバナ（金峰町田布施）ともきいたが一般的ではないようで、ブチンカ（阿多）もあまり耳にしない。大隅方面では、ボンチカの名がある。（25）参照。支那の本では、白ムクゲの花を摘んでアツモノにすれば甚だおいしいとして江西湖南での利用が記され、花を売る者蔬菜と同じだ〔救荒本草〕とあるかと思うと、花について 小兒忌弄令病瘥俗名瘥子花〔群芳譜〕など記されている。またこの木は挿木し易いとして、夫木槿楊柳斷植之更生倒之亦生横之亦生生之易者莫過斯木也〔抱朴子〕と出ている。

（279）ヤッデ（ヤツデ）——陰地樹下の常緑低木で冬期開花後小球果を繖形球状につける。

上津貫新地（天神のある部落）では、田の神を祭るとき、ヤツデの葉に包んだシトギをワラツトに作り真田編みにした縄で田の神の肩にかけ石像前の2本の竹筒に供花をさしてまつたという。シッチン講の日に行なう行事であった。12月氏神祭りの際、ヤツデの葉で赤飯を受けて食べる行事が、加世田市や阿多などであったが、益山春では10年も前になくなったときいた。この行事に用いるので、オジ・オレンハ（万世）オジ・オジンハ、オジ・レンハ（阿多）オジ・モレンハ（内山田、中野）オジモレンハ（長屋）などの名がある。吹上町和田などでは、オニハとかテングハと呼んでいる。鯉ノサシミヲ八手ノ葉ニモリテ食スレバ死スト俗ニイヘリ〔大和12〕とあれど上記の如くこの地域ではメシを盛って食べる。

（280）ヤブレガサ（シュロガヤツリ）——湿地に時に栽培觀賞用にされる。熱帯アメリカ原産と言う。加世田市万世などでは逸出し野生化の兆の見える所がある。

（281）ヤマイモ（ヤマノイモ）——山中諸所に野生があり晩秋イモを堀り蔬とするはカカルカンなどの材料とする。丸麦飯にはトロロ汁としてかけて食べる。支那でも、杞菊山芋牛蒡道家以為嘉蔬〔続博物志6〕とある。然しこの山芋は本邦のヤマノイモでなく薯蕷即ち山薬（ナガイモ）である。南薩でツクイヤマイモ（作り山芋）というのがこれである。薯蕷を山薬と言うことについて下学集下に、趙宋之時兩度去諱故有多名也とみえる。五代宗諱預故此字をさけて薯蕷と改め更に宋英宗名曙をさけて山薬と呼んだのであると言う。帝王死んで二度ナガイモの呼名を改めさせたと言うのだ。支那ではこのナガイモの堀取について次のような俗信が記してある。若し堀取ラント欲スレバ黙シテ然スレバ則チ獲、名ヲ唱エレバ便チ得ルベカラズト〔異苑〕（元漢文）。薩摩でよっぱらいがブツブツ独語することをヤマイモヲ堀ルと言う。これは、冬期ヤマイモ堀りの時、枯れたつるをたぐり アッチセージョロカイ、コッチセージョロカイなどつぶやきながらビヤグチ（地下茎とつるの接目の所）をキンツキという堀具で探し堀りすることにかこつけたのだと言う。支那ではだまって堀れと言うのと比べて面白い。

（282）ヤマウメ（ボロボロノキ）——山にあり木は折れ易く、スズラン状の花が咲くと言うが実物を示されてないので断言はできぬ。一応ボロボロノキに当てておこう。葉の色は緑黄色で紅葉は美しい。

（283）ヤマゴボウ（ ）——山地にあり高さ1m位、ゴボウの葉のようで薬用にすると言う。ヤマゴボウという書名の農業実用書を店頭で開いてみたらモリアザミについての本であった。

（284）ヤマザンシュ（イヌザンショウ）——山地に多いが栽培することはない。香りもよくないが、果実を味噌につけて食べられるが たたきつぶして、冷汁かけに2〜3粒入れると香りと辛味がある。

（285）ヤマシッカ（トキワガキ）——山地生木肌黒く葉は細長く果は小さい。子供らは熟果を食べることがあるが、小鳥は好んでついばむ。薪やイネ束などをにやう時の棒即ちサシ（ヤマオコ、ヤマゴ、オゴとも言う）をつくる。また小木は連枷（メグイボと言う）の先の廻り棒を作ったりするが、ヤマビワやイスノキを用いることもある。ヤマガキ（堀切山）とも云果で

魚網を染む。

(286) ヤマシ ヌガ (ハナミ ヌガ) — 林下に多く、牛の飼料にしたりする。笠沙町の一部でヤマサレンというのはこの植物かも知れぬ。

(287) ヤマジンチ ヌ (コシ ヌノキ) — 山中林下にあつて冬月白花後紅果が目立つ常緑低木。樹皮をはいて独楽 (コマ) 廻しのムチを作ったりした。

(288) ヤマダケ (アオキ) — 林下に見かける常緑低木で幹も緑色。雌株には冬月だ円形紅果を結び美しいが稀には白色果も野生する (金峰山など)。先細の果形のをヒゴアオキといい時にこの型もある。冬期は牛の飼料とし、葉をあぶり貼付して吸出し薬として効あり。

(289) ヤマザクラ (ヤマザクラ) — 山中所々にあり3月下旬新葉と共に白や淡紅花を開き、花葉色が株毎に小異あり、常緑樹林の山腹を色どり満開時は美しい。この特徴ある美しいサクラが支那の書には見えないが、朝鮮にはあるかどうかを確めた経緯が大和本草12に出ている。昔年朝鮮より漂来の舟のトマゲタを見ると疑もなく本邦のサクラであつた。名をきくと奈木と言ひ淡紅白花を陶くと。その後1748年に來朝した朝鮮信使に青木昆陽が尋ねた所、サクラは彼地にもあつてホンナモと言つて言った。奈木 (ナム) というのは朝鮮語の木を意味するから、トマゲタの木の名をきかれて、「木」だと答えたのを真に受けてサクラの名称と考えたのであろうか。朝鮮半島にはヤマザクラの数品種が野生している。

(290) ヤマニンジン () — 何種が確認できないが山地に普通なシラカワボウフウのことか或いは根の形がニンジンに似た別科の草かも知れない。

(291) ヤマゴンニャク (同 名) — 日吉、吹上、金峰町などのほか津貫、川辺町、堀切山などで聞かれるが実物は、金峰山麓大坂で確認しただけであつて、金峰山中腹で採集したことがある (昭22年6月) が津貫方面にもあるのだろうか不確実で マムシグサ類を指すのかも知れず。

(292) ヤマビヤ (ヤマビワ) — 山中にあり雑木林中では白肌の直幹が目立つ。箕の縁を屈む曲木に用う。金峰町尾下では、田植踊 (5月6日) の長刀の柄にこの木を使う。軽くて固いから適しているといひ青少年が集まつて山に伐りに行くと言ふ。堀切山では、ハマビワをヤマビワと言つていたが、黒瀬では和名通りハマビワと言ひ、黒瀬勇氏の話では、沖縄糸満のもぐりの人々が幹をくりぬいて水中眼鏡の枠につくり臘でガラスを固定はめ込んで用いたと言ふ。海岸林に多いこの木を臨機使用したものであろう。ヤマビワを尾下では、オトンボと呼ぶ。

(293) ヤマフジ (ヤマフジ) — 時に山中に自生する左巻短花序のフジで花はフジに酷似する。稀に白花を栽培していることがある。

(294) ヤマフズキ (ハダカホウズキ) — 山中に見られる草年草で、秋日紅果を結ぶがホウズキのように宿存がくには包まれていないので球果が其處現われている。この形で茎がつる性のものにヒヨドリジ ヌグがあるから、之もヤマフズキの中に含まれることもあろう。(203) 参照。そのほか、クコ、サネカズラ (日吉、吹上町) ハスノハカズラ (吹上町和田) などの紅果をヤマフズツということがある。ここまで書いて、川名興氏の好著千葉県の植物方言第三報

(同氏の好意に依る)を開くと、同県でヤマハウズキというのに、ヒヨドリジョウゴとハダカホウズキの場合があることが記されていた。県下川内市では、クコをカワフズキと言う所があると聞いた。

(295) ヤマモモ(ヤマモモ)——山中普通の常緑高木で雌雄異株。生果を食用にする。南薩で二三品を区別している。クマモモと言うのは果特に大形なもの(吹上町伊作)、マンモモ(松モモ)は果小形で味松ヤニの香いあるもの、シトモモ(白モモ)は大形果淡色味よきもの(何れも赤生木など)を言う。山もも是に大小あり紅紫白の三色あり。其中に白き物取分き甘く大きなり。勝れたるは野梅程なるもあり。早く花咲く木は実る事なし。是花ももとて葉はふとく木さかへてうるはしく見ゆれども、花ばかりにてみのらず。又葉細く木立のびやかならず実るといへども小さく味酸く賞翫ならざるあり。是松ももと言ふなり。……又桑の木をだい木として楊梅を接ぎたるは酸からずして甘し〔農全8〕。雄者不実幹に方寸の穴を作雌木で填之乃実と支那書にある。

(296) ヤマツツシ(ヤマツツジ)——山地向陽の稍乾燥地に多く5月満開時は見事で株毎に花の色に変化がみられる。赤生木では、アラゲザクラツツジをヤマツツシと言う。普通淡紫サクラ色で花は小形であるが、ヤマツツジより木立は大きくなる。近頃はこの種の乱獲が目立ってきたようである。庭木観賞用にする為である。野間岳には多いが時には白花のシロバナアラゲサクラツツジがある。津貫辺にはこのツツジは見られない。栽培ツツジをムラツツジ(堀切山など)と言い、花葉共に大形で美しいケラマ(ケラマツツジ)は古くから植えられている。

(297) ヤンモ(モチノキ)——山中の照葉樹で3月下旬小白花を開く雌雄異株。樹皮を剥ぎとり搗いて流水で洗いながら皮渣を除くとトリモチがとれる。学名はツンベリーが、イレックスインテグラとつけて発表したが之にクロガネモチの和名を当ててある。クロガネモチも同頁に、イレックスロツダと発表してあるが和名は出てない。通訳人が感違いして教えたか、御自身が思い違いでこうなったのか知るよしもない。モチノキの和名は、今名クロミノシゴリと言う全く別種の樹木の新学名(プルヌス属として)と共に記してある〔ツ氏植物誌200頁〕。和漢三才図会84灌木類に、麝膠(トリモチ)ハ鳥ヲサス所以ノ者ナリ…其樹数種有りと記し、真麝(マモチ)鉄麝(クロガネモチ)江戸麝(エドモチ)の三種の粗図を出し、エドモチはまた朝鮮モチと云葉狭長添枝茂如楊梅之葉様…栽庭園佳云々として小低木の様に画かれている。また花壇地錦抄3冬木の条下には、終精(モチノキ)、大坂もち、鳥取もち、いさはいもちの4種を記しているが、大坂もちはつねのもちより葉大、鳥取もちは葉大坂もちのごとく木にねばりあり、いさはいもちはつねのもちのごとくにて葉に白きさらさとび入りと説明がある。初頭のものがクロガネモチで鳥取もちがモチノキらしい。トリモチで小鳥を捕えることをこの地方でサスといい、小鳥がヒツイタリすることをウタツタと言う。(100)参照。ニガモ、モグラモなどいうモは、麝の意で冠毛のついた種子が接触また飛来して衣服についたり、鈎刺ある葉茎が衣服にひつつくことに由来した名かもわからない。(266)、(274)参照。コン(この)ヤンモ(とりもち)チャ、ナイノ皮ナ(何の木の皮なの?)と小僧が、和尚にきいた。知ッ

ョッテタンヌッ(わかっていきく)バカスツトンノ皮ヨ(大馬鹿者の木の皮だ)と頭ごなしにやられた小僧。考えてみれば、ヤンモチ(とりもち)は、ヤンモチノキ(もちのき)からとるといふことであって、小僧の間中この木の名が出ているのである。大正10年、筆者が祖父からきいた笑話。(106)参照。

(298)ユイノッ(イスノキ)——山中に普通の常緑高木3月開花の有用樹である。この木は所によっては生籬にする。庭除に植れば、火災の時風を発生し火を防ぐ〔草本性譜人〕。葉面及び枝条に虫こぶができ、膨大硬化したものをサッポポ(万世)トッコンミ(吹上町ートッコはフクロウのこと)コッコンミ(万世、長屋など)など称し、子供等は之を吹いたりした。ポッポノッ(吹上、金峰町など)とも言う。但しこの名はオオムラサキシキブに当てることもある。(黒瀬など)。セッペセッペノキ(日吉、吹上、金峰町)は虫こぶの多いイスノキの呼名らしく金峰町阿多では、フウトウカズラもこの名で呼ぶ人がいた。吹上町和田などでユノギというのはイスノキのことらしい。ずっと昔鹿児島市あたりでも虫こぶを突き合わせて遊ぶ童戯があったらしく数年前母からサイボツゲと言う言葉をきいた。イスの学名を発表する時彼のシーボルトもわざわざこの虫を画き本文にはくだいて慢性下痢の薬とする旨記している〔植物誌94図、180頁〕。

(299)ユダレクイ(ナンバンギセル)——またユダレバナとも言う。ユダレはヨダレで花心の粘液に基づく。竹馬草〔花地4、5〕というのはこの小草である。曰、花形童幼のりてあそぶたけ馬のごとく成小草也色むらさき野に有と。然るに岩崎常正の本草穿要にあるタケムマソウは次の様に記されている。「山中に生ず、高さ三寸許、茎白色にして透徹す、本に鱗甲ありて根は小塊あり1茎1花、花の形馬頭に似たり」と。これは明らかに、ギンリョウソウのことで、磯間山をはじめ長屋、金峰山などにあり5月初開花の腐生植物である。同書には引続いて、「一種秋月蘆荻根傍に生じ俗にナンバンギセル又ユウレイタケとも云、1根数茎を生じ赤黄茎頭に1花あり。斜に向て煙管頭の如く、開くときは紫色なり、高さ三、四寸根に小塊あり」と要領よくのべている。

(300)ヨネガハ(ヨメナ)——原野路傍の稍湿地に多い多年草で新葉はゆがいて豆腐と白あえにして食べることがあった。またヨネゲサとも言う。ヨネガハ(伊作、川辺、堀切山など)ヨネガンハ(伊作)ヨネガハッ(小湊)ヨニガハ(高倉)ヨネガグサ(日吉町、吹上、阿多など)はいずれもヨメガハギの転訛である。この名の下に、大和本草諸品図上に花枝、茎図がある。本朝食鑑3には、支那名鶏腸草を与米加波岐(ヨメガハギ)と訓み、和漢三才図会102では、鶏腸草をムラサキハコベと平仮名で示し、いずれも四五月有小茎開五出小紫花としてあって必ずしもキク科植物とは思えない。その上小児がこの汁をクモの網につけて蟬取りをするとも引用してある。有名な植物名実図考13に鶏腸菜の図がある。根元より分岐した葡萄茎があつて五弁小粉紅花は花弁不甚分岐四弁平翹一弁下垂…と説明があり長梗を持った不斉合弁花らしいのが3花ついている。之は明らかにヨメナではない。同書12に、鶏兒腸があつて之はヨメナらしいが、葉味微辣という引用文が気になる。約之救荒本草紀聞3に 辣ハ辛が1倍マス也和ハ辣程デハナシ

風土ノ違也と記し又一種薄赤ノ花ノ者アリ野生ナシ植木ヤニテ塩ガマ菊ト言ヘリ馬錢根〔馬先蒿一筆者註〕モシヲガマ菊ノ名アリ同名異物也と。この地の紫茎のヨメナの葉は、味わってみても少しも辣くないし、くせがなくてあえものとしてはかっこうな野蔬となり得る。この草は、川べりなどにも多いのでカワギク（吹上町、益山など）などとも言う。支那揚子江域で早春野蔬とされているヨメナの苗を漢陽などでは、馬菊（マチー）と呼んでいた。馬蘭〔本草綱目、救荒本草など〕と言うのが之に当るのであろう。赤茎白根……南人多采淘…為蔬及饅餡入夏高二三尺開紫花花能有細子と記している。良安は馬蘭に和漢兩種ありとし、和は近年琉球より多く来た薑黄であるが、本草の馬蘭は見えていないが紫菊の一名があるから菊類であろうそうすれば、越前菊と言うのに稍似ているようだ云々〔和漢三才93〕と云い葉に大異あるがキブネギク即秋明菊を引合に出している。

（301）レンゲソウ（レンゲソウ）——水田に緑肥としてつくられる。上津貫には、大正7年はじめて播種されたと言う（菊野氏による）。フズバナ（日置、永吉、吹上、藤元など）フゾバナ（日吉町、吹上町、金峰町、鹿児島市など）。三月開紅白花又有白花者西土小児採花集而括之如腰囊の記事と花葉図をのせ〔大和諸上21ウ〕また京畿の小児これをレンゲバナと言、筑紫にてホウソウバナと言〔大和9の9〕と出ている。また、げんげ草むらさきと白有〔花地4～5〕とみえる。日置から阿多辺までは一般にシフンと呼ぶ。支那紫雲英の訛りである。良安は、碎米菴を俗云レンゲバナ（蓮華花）にあて、其多キ処錦ヨ地ニ敷クガ如シ人以テ野遊ノ一興ト為スと云い白花者有り和州多ク有之能ク湯火傷ヲ治ス葉ヲ揉テ汁ヲ伝ク〔和漢94之末〕とある。救荒啓蒙の著者はレンゲソウは紫雲英なりと断じ、碎米菴をタカラシ、タネツケバナ、スズナに当て、之を図によりレンゲ草に充てるはオダヤカならずとしている。異名同物を理もなく無視するようなことこそオダヤカでない。この二名だけではない翹搖という名もレンゲバナで、春末刈取馬ニ飼ヒ田ヲ墾ス貝原氏大和本草ニ碎米菴ヲ載テ翹搖ナル事ヲ不知云々〔本草正論4〕とも出ている。牛馬の飼料の草刈の時草切テゴを早く満たす為、他家のレンゲを盗刈りすることもあったので戦前はキンチクのムチ稈などをカギダケにしてシメをしたレンゲ畑も見うけられたものだ。

（302）ワラベ（ワラビ）——山麓原野の陽地に普通である。今はほとんど顧みられないが新苗は山菜となる。昔時は根茎からワラビ粉を取りワラビ餅などを作り飢をしのいだのであろう。蕨粉性不好葛粉ニ似テ性甚ヲトル然レ共食シテ消化シカタケレバ飢ヲ助ル事ハ葛（クズ）ニマサレリ〔大和5〕と。ワラビをマムシ（蝮）除けのマジナイにするという処がある。大隅の志布志町四浦では、山で最初に見付けたワラビを足先に塗りつけておくとマムシ除けになると言うのである。その由来をたどると、牛糞中にワラビが生えていたのでその下を調べてみたら一匹のマムシが死んでいた。これはワラビがマムシを殺したに違いないと判断し、ワラビのこの魔力にあやからうと言うことらしい。搜神記ニ、生蕨（ワラビ）ヲ食シ心腹疼痛ノ後一赤蛇ヲ吐出シ蛇一宿ヲヘテ蕨トナリ病癒シト記セリ〔大和5〕と言う記事と併せて考えると興味深い。

以上で本文は次の写真二葉を添て終りとする。右はキイレツチトリモチ、左はチ。ウセンノギクでいずれも磯間山中の自生状況を示す。後者は大陸系植物で対島、長崎県と本山が日本での産地。



植物和名・方言名索引

(和名には語頭・印を、語尾に科名を付した。数字は植物記載番号を示す。)

〔ア〕

アオイスミレ(スミレ科)	224	アサネゴロ	144 83	イセクサ	59
・アオキ(ミズキ科)	288	アサネブツ	83	イセッソ	13
・アオギリ(アオギリ科)	16	・アジサイ(アジサイ科)	155	イソツゲ	14
・アオスゲ(カヤツリグサ科)	126	・アズキ(マメ科)	75	・イタチガヤ(イネ科)	238
・アオツヅラフジ(ツヅラフジ科)	167	アッガレグサ	6	・イタビカズラ(クワ科)	44
アオボケ	259	アック	5	・イチイガシ(ブナ科)	15 225
・アオムチウラシマソウ		アッブクサ	8	イチカシ	15
(サトイモ科)	174	アッブツイ	8	イチノキ	15 225
・アオモジ(クスノキ科)	265	アブラカズラ	220	イッサツ	16
アカイッゴ	1	・アブラナ(アブラナ科)	47	イッセンバナ	17
・アカガシ(ブナ科)	2	・アマチャ(ユキノシタ科)	7	イトバナ	211
・アカカタバミ(カタバミ科)	83	アマドコロ	179	イヌガヤ(イヌガヤ科)	149 277
アカシ	5	・アマリリス		・イヌザンショウ	
アカスイジ	122	(ヒガンバナ科)	38	(ミカン科)	103, 249 284
アカスナ	129	アマンジャ	7	イヌグス	170
・アカジクホソバイヌビウ		アマンジョ	7	・イヌマキ(マキ科)	255
(クワ科)	146	アマンチャ	7	・イヌビウ(クワ科)	146 159
アカダマ	3	・アメリカフウロ		・イネ(イネ科)	229
アカボケ	259	(フウロソウ科)	82	・イノコヅチ(ヒユ科)	100
・アカメイモ(サトイモ科)	189	・アラゲサクラツツジ		イブスッバナ	100
・アカメガシワ		(ツツジ科)	297	イブタ	19 166
(トウダイクサ科)	41	・アリドウシ(アカネ科)	14	イボクサ	20
アカヤンモ	160	アリノミカン	10	イボコロリ	20
・アカカサスゲ(カヤツリグサ科)	126	・アレチノギク(キク科)	161	イボンクサ	20
・アキグミ(グミ科)	185	アワバナ	9 162	イモグサ	21
・アキノウナギツカミ		アワホグサ	8	・イリオモテニシキソウ	
(タデ科)	96			(トウダイクサ科)	159
・アケビ(アケビ科)	5	〔イ〕		イワゴケ	23
アコッソ	4	・イ(イグサ科)	226	イワコタ	44
・アサ(アサ科)	36	・イガハウスキ(ナス科)	203	イワダカナ	22
・アサクラザンショウ		イゴザ	217	・イワタバコ	
(ミカン科)	103	・イスノキ(マンサク科)	285 299	(イワタバコ科)	22

・イワヒバ (イワヒ科)	23	ウンマンコッコ	34	(クマツヅラ科)	94
インガネッ	186	ウンマンコシユ	33	オカビノッ	298
インキンミ	24	ウンマンドッ	33	オカベデンベノッ	273
インコタッ	44	ウンベ	28	・オカメザサ (タケ科)	273
インタッ	44	ウンメ	27	オジモレンハ	270
インノクソバナ	25	・ウメ (サクラ科)	27	オジョオレンハ	279
インノコシヨッシヨイ	26			オジョモレンハ	279
〔エ〕					
インノシッポ	215	エコッノッ	124	オジョレンハ	279
イシビ	28	・エゴマ (シソ科)	104	オジョウジンハ	279
インフズッ	203	・エゾギク (キク科)	260	・オトコエシ (オミナエシ科)	250
インミ	27	エッヘゴ	35	オトコガヤ	251
インモレ	25	・エノキ (ニレ科)	272	オトコシバ	37
〔ウ〕		エノコアワ	8	オトンボ	293
		・エノコログサ (イネ科)	8	オナゴガヤ	251
ウカゼバナ	278	・エビヅル (ブドウ科)	48	オニタビラコ (キク科)	96
ウギンチョク	29	エラブツツジ	81	・オニノゲン (キク科)	266
ウシイッゴ	177	エンズヘゴ	35	・オニノコロ (ヤマノイモ科)	252
ウシコロシ	30	エンツクサ	35	オニハ	179
ウシノベッタイッゴ	177			オニユリ (ユリ科)	279
ウシボテ	32	〔オ〕		・オヒシバ (オヒジワ)	200
ウジュキッ	188			・オヒジワ (イネ科)	151
・ウスイロツユクサ		オ	36	・オミナエシ (オミナエシ科)	30
(ツユクサ科)	163	オイダンハ	63	・オミナエシ (オミナエシ科)	245
・ウスイロツワブキ (キク科)	169	オイランハ	63	オヤコバナ	9
・ウスベニシキミ (シキミ科)	253	オエダ	63	オンジョシバ	250
ウノハナ	155	オエダグサ	63	オンバコ	38
・ウバユリ (ユリ科)	207	・オオアレチノギク		オンバナ	37
ウマゴヤシ	252	(キク科)	161		39
ウマコロシ	31	・オオイタビ (クワ科)	91	〔カ〕	
・ウマノアシガタ		・オオカラスウリ (ウリ科)	52		
(キンボウケ科)	33	・オオタニワタリ	136	カイゴマ	42
・ウラジロ (ウラジロ科)	137	・オオバコ	3, 9	カイモノ (カライモ)	41
ウンマンカッゴ	236	(オオバコ科)	214	カエルッパ	214
ウンマンコ	34	・オオハング (サトイモ科)	174	カカラ	210
		・オオムラサキシキブ		カカランハ	66
				・カキノキ (カキノキ科)	46
					173

・カギカズラ (アカネ科)	102	カラクサ	82	・カンラン (アブラナ科)	148
カゴシマバナ	197	・カラスウリ (ウリ科)	51		
カサネバナ	18	73			
カズラコップ	43	カラスコゲ	54	[キ]	
カタシ	44	・カラスザンショウ		キイチゴ	56
カタシノシンゲ	221	(ミカン科)	225	・キイレツチトリモチ	
カタシノシンゲ	45	・カラスビシャク		(ツチトリモチ科)	160
カタシノシンゲイ	45	(サトイモ科)	174	キクラゲ	41
カタシノ	45	カラダケ	62	・キカラスウリ (ウリ科)	52
カタシモモ	216	185		キシノトイノシッポ	65
・カタバミ (カタバミ科)	83	・カラタチ (ミカン科)	78	キシシ	66
・カタヒバ (イワヒナ科)	23	ガラッパグサ	55	・キチガイナスビ (ナス科)	154
・カタメンウスジロツワブキ		カラハウチウゲ	94	・キツネノボタン	
(キク科)	169	カラヒ	57	(キンポウケ科)	96
カッターニ	47	ガリガリカズラ	186	キッネンカズラ	186
カッターネ	47	カワイッゴ	56	・キノギ (マメ科)	213
カテシモモ	216	カウギク	300	・キノナセッコク	101
・カニクサ (カニクサ科)	135	カワソ	58	・キブシ (キブシ科)	165
カネオキギ	106	カワソバ	59	・キブネギク (キンポウケ科)	300
ガネクサ	49	カワゾマ	59	キューイ	67
ガネ	48	カワバタ	188	・キューウリ (ウリ科)	67
カネノキ	106	カワフズキ	60	・キューウダイバナ	38
カバシカイッゴ	1	カワフズ	294	・キランソウ (シソ科)	158
・カブカンラン (アブラナ科)	148	カワヤナギ	61	・キリ (キリ科)	68
カボチャ	247	・カワラケツメイ		・キンエノコロ (イネ科)	8
カミシヤカ	50	(カワラケツメイ科)	10	キンキンカズラ	49
カムナ	232	カンカンハ	63	キンギンカズラ	69
カモナ	232	カンキツ	178	キンクネ	188
・カヤツリクサ		カンコノキ		キンチ	75
(カヤツリクサ科)	207	(トウダイクサ科)	166	キンデカン	71
カヤバナ	219	カンシバ	50	キンネンタバコ	20
カライアック	51	カンチク (タケ科)	90	・キンミズヒキ (バラ科)	100
カライガネ	186	カンナレンソメ	64	ギンミズヒキ	95
カライノイッゴ	52	カンネカズラ	228	・ギンリョウソウ	
カライモバナ	53	カンネンカズラ	228	(イチヤクソウ科)	299
カライモボタン	53	カンノキ	146		
		カンノケヒツパイ	95		

〔ク〕		クロマサカズラ	77	・コシヨウノキ	
・クキダチオオバコ		クロマメ	75	(ジンチヨウケ科)	287
(オオバコ科)	39	クワクワラ	210	ゴシヨミズヒキ	95
・クグカヤツリ		クワズイモ	171	コス	88
(カヤツリグサ科)	229	クンマツカズラ	228	コガネグサ	83
・クコ(ナス科)	295			コカノ	84
・クサイチゴ(バラ科)	11	〔ケ〕		・コカンスゲ	
・クサギ(クマツヅラ科)	72	・ケイトウ(ヒユ科)	80	(カヤツリグサ科)	126
クサタ	141	ケカタバミ	261	コキ	178
クサタブ	141	ケサバナ	83	・コゴメイワガサ	
クサツナ	72	ゲシ	189	(シモツケ科)	138
・クサニワトコ		ゲセン	78	コタ	146
(スイカズラ科)	141	ゲタギ	66	コッコ	91
・クサネム(マメ科)	10	ケヅマイ	125	コッコンミ	299
・クサハギ(マメ科)	100	ケツバナ	79	ゴッパンハ	169
クシノ	227	・ケテイカズラ	80	コップ	91
・クズ(マメ科)	228	(キョウチクトウ科)	254	コップカズラ	44
・クスノキ(クスノキ科)	117	・ケヒサカキ(ツバキ科)	98	・コデマリ(シモツケ科)	138
クソゴイ	73	ケラマツソジ	81	・コナギ(ミズアオイ科)	21
クソタノキ	141	・ゲンノシヨウコ	297	・コナラ(ブナ科)	243
・クチナシ(アカネ科)	74	(フウロソウ科)	82	コバ	92
・クチヒゲウラシマソウ				・コバノボタンヅル	
(サトイモ科)	174	〔コ〕		(キンボウケ科)	139
クスドンゲ	115	・コウオウソウ(キク科)	153	・ゴバンモチ	
クツナシ	74	・コウゾ(クワ科)	146	(ホルトノキ科)	273
・クスギ(ブナ科)	243	・コオニユリ(ユリ科)	200	・コブナグサ(イネ科)	168
クネ	188	コクワノ	83	コヘゴ	93
・クマノミズヒキ(ミズキ科)	186	ゴゼゾキダケ	90	コベコベ	94
・グラジオラス(アヤメ科)	65	ゴゼダケ	90	コボシ	129
グロアツ	219	コサンダケ	85	コーマーイー	214
クロアツ	75	コジ	86	コマツナ	151
クロカズラ	77		93	ゴマバナ	95
・クロガネモチ(モチノキ科)	298	・コシダ	236	コマヒキグサ	224
クロカンネ	106	コジュコロシ	87	・コミカンソウ	
・クロキ(ハイノキ科)	76	コジュロ	151	(コミカンソウ科)	3, 10
クロ	160		89		120
クロ	76				

ゴミゴミ	94	・サツマイモ		・シソ(シソ科)	104
コメゴミ	94	(ヒルガオ科)	42	・シチトウイ	
ゴメゴメ	94	・サツマサンキライ		(カヤツリグサ科)	226
ゴメゴメシ	94	(サルトリイバラ科)	210	シッカズラ	105
・コメナモミ(キク科)	100	・サツマハギ(マメ科)	213	シトッノッ	106
・コモウセンゴケ		・サトイモ(サトイモ科)	189 193	・シナヒガンバナ	
(コモウセンゴケ科)	239	・サトウダイコン		(ヒガンバナ科)	180
・コールラビ(アブラナ科)	148	(アカサ科)	232	シノッ	86
ゴレツカ	278	・サトウモロコシ		シノノメダケ	107
ゴレツバ	278	(イネ科)	178	シバ	108
ゴレンカ	278	・サネカズラ		・シバグリ(クサクリ)	
・ゴンズイ		(マツブサ科)	295	(ブナ科)	99
(ミツバウツギ科)	173	・サフランモドキ		シバナ	108
コンペイトウグサ	96	(ヒガンバナ科)	129	シマクロ	110
ゴンメモッ	266	・サルトリイバラ		シマダケ	111
		(サルトリイバラ科)	66 110	シマデコン	112
[サ]		サルンウツバ	41	・シマニシキソウ	
サイ	100	サンシュ	103	(トウダイクサ科)	159
サイゴグサ	161	・サンショウ(ミカン科)	103	シモフリカタバミ	83
サイゴドンバナ	157	・サンショウクス		ジャガタ	113
サガイゲン	97	(クスノキ科)	117	ジャクシナ(アブラナ科)	269
サガイマンダラ	261	サンバチョウジ	153	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
・サカキ(ツバキ科)	50	サンバツ	153	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
・サカキカズラ		サンバツシ	153	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
(キョウチクトウ科)	77			ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
サカシバ	98	[シ]		ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
・サクラツツジ(ツツジ科)	297	・シオガマギク		ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
ササグ	99	(ゴマノハグサ科)	300	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
ササラン	101	シオツツイッゴ	177	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
・サザンカ(ツバキ科)	221	・シキミ(シキミ科)	253	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
サシ	100	ジサンバツサン	224	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
サツカケ	102	ジシウバ	124	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
サツイゲサ	132	・ジシバリ(キク科)	34 150	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
サツボツボ	299	・ジジミバナ		ジャクシナ(アブラナ科)	262 190
		(シモツク科)	152	ジャクシナ(アブラナ科)	262 190

・ショウベンノキ (ミツバウツギ科)	173	ジンチヨノキ 〔ス〕	121	・セイタカアワダチソウ (キク科)	162
・ショウロクサギ (クマツヅラ科)	72	・スイカズラ (スイカズラ科)	69 127	・セイヨウタンポポ(キク科)	150
ショガバナ	265	スイジ	122	・セキシウ(ショウブ科)	271
ショノクシ	117	・スイセン(ヒガンバナ科)	71	・セッカヤマネギ(ネギ科)	196
ショノノ	117	ズイダマ	123	セッペセッペノ	299
・シラカワボウフウ(セリ科)	291	・スイバ(タデ科)	122	・セリ(セリ科)	130
シラユリ	118	スイメノ	124	・センジュギク(キク科)	153
シロウンベ	28	・スイミットウ(サクラ科)	216	・センダン(センダン科)	131
シロオイダ	63	スイメノキ	124 222	センダンノ	131
・シュロガヤツリ (カヤツリグサ科)	280	・スギナ(トクサ科)	256	・センナリホウズキ(ナス科)	203
シロスイジ	122	スクロ	125	・センニチコウ(キク科)	242
シロスナ	129	・スゲ類(カヤツリグサ科)	126	センネンボトクイ	132
シロタ	139	スゴッバナ	95	センモト	133
・シュロチク(ヤシ科)	89	・ススキ(イネ科)	181	・センリョウ(センリョウ科)	14
シロタブ	241	スズメアワ	8	〔ソ〕	
・シロタモ(クスノキ科)	124 222	スズメカズラ	127 69	ソデキ	178
・シロナンチン(ナンテン科)	190	スズメノ	124	・ソバ(タデ科)	134
・シロバナアラケサクラツツジ (ツツジ科)	297	・スズメノテッポウ(イネ科)	219	ソハマメ	172
・シロバナキランソウ(シソ科)	158	スダイゴ	177	ソマ	134
・シロバナサクラタデ(タデ科)	140	スッカズラ	105	〔タ〕	
・シロバナタンポポ(キク科)	34 150	スッポボン	128	タイカズラ	135
・シロバナツユクサ (ツユクサ科)	163	スッポン	128	ダイギナ	173
・シロバナトゲソバ(タデ科)	274	スッポンボン	162	・ダイズ(マメ科)	172
・シロバナマンジュシャゲ (ヒガンバナ科)	180	スバナ	69	・タイミンチク(タケ科)	175
シロユリ	118	・スベリヒユ(スベリヒユ科)	246	タイワタイ	136
ジンガラグサ	226	・スマレ(スマレ科)	34 224	タイワタロ	136
ジンガラノ	165	スモトイグサ	151	タイワタロノイトコ	136
ジンダン	120	スモトイサトキ	178	タイワンヘゴ	137
・ジンチョウゲ (ジンチョウゲ科)	121	スナ	129	・タカサブロウ(キク科)	20
		セイ	130	タカヘゴ	137
		〔セ〕		・タガラシ(キンポウゲ科)	263
				ダゴジロバナ	138

・タチクラマゴケ(イワヒバ科)	215	チクサ	158	ツキデノッ	165
タジ	140	チゴザクラ	205	ツクイヤマイモ	281
・タチツボスミレ(スミレ科)	224	・チゴザサ(イネ科)	152	ツズロコ	166
タッノッ	139	チチクサ	159	ツズロコ	166
タチバナ	141	チチケシ	252	ツッゲグサ	256
タッガシキ	147	・チチコグサ(キク科)	79	ツヅラ	167
ダッガヤ	141	・チチコグサモドキ(キク科)	79	・ツヅラフジ(ツヅラフジ科)	167
ダッキショ	181	チチコップ	146	ツヅンボトクイ	168
ダッキュ	142	チチミザサ(イネ科)	168	ツバキ	221
ダッキュバナ	143	・チトニア(キク科)	157	・ツバイモモ(サクラ科)	216
・タデ類(タデ科)	129	・チャボミズヒキ(タデ科)	95	ツバナ	40
タヅメ	144	・チャンチン(センダン科)	125	・ツブラシイ(ブナ科)	251
タテバナ	145	・チャンモッ	160	・ツボクサ(セリ科)	86
タツブノキ	147	・チュウリップノキ		・ツボクサ(セリ科)	271
タニワタリ	146	(モクレン科)	255	・ツボスミレ(スミレ科)	224
・タニワタリノキ(アカネ科)	197	・ツルウメモドキ(ニシキギ科)	208	・ツルグミ(グミ科)	97
・タブノキ(クスノキ科)	136	・ツルボ(ユリ科)	129	・ツルマメ(マメ科)	172
タボ	139	・ツルレイシ(ウリ科)	191	・ツルクサ(ツルクサ科)	132
・タマスダレ	241	・ツクサ(ツクサ科)	163	ツワ	169
(ヒガンバナ科)	146	・ツワブキ(キク科)	169	・ツンセンノッ	170
タマナ	140	・ツンセンノッ	170	・ツンノッ	170
・タラノキ(ウコギ科)	149	・ツンボグサ	96	・ツンボンハナ	96
・タリア(キク科)	53	・ツンミノッ	170		
タレ	149				
ダンザイゴ	177				
タンタンノハ	63				
・タンポポ(キク科)	150	・チリメンジロ(シバ科)	104		
	34	チンダイグサ	161		
[チ]		チンダイバナ	162		
チイクサ	158	チンチョロゲ	163	・チイカズラ	
・チガヤ(イネ科)	40	チンチロボトクイ	132	(キョウチクトウ科)	77
チカラグサ	251	チンチロリン	163	デシイモ	254
・チカラシバ(イネ科)	151			デシゴンニョク	171
チカラボトクイ	215	[ツ]		テッポウユリ	118
チキメカズラ	151	ツガ	164	デッマメ	172
	206				

デノッ	173	・ドクダミ(ドクダミ科)	55	・ナツダイダイ(ミカン科)	188
テハレ	174	・トゲノバ(タテ科)	274	・ナツツタ(ブドウ科)	271
テハレオンジョ	174	トコロ	179	ナッデデ	188
テハレゴンベ	174	トコロテン	179	・ナツフジ(マメ科)	54
テハレゴンニャッ	174	トジンバナ	180	ナベトイノッ	165
テハレゴンゴン	174	ドズッナ	180	ナル	243
テハレゴンジョ	174	ドズンナ	180	・ナワシロイチゴ(バラ科)	1
テハレゴンチ	174	ドズンナバナ	180	・ナワシログミ(グミ科)	97 185
テハレボンボン	174	ドズンバナ	180	ナンカタロー	132
デメダケ	175	トッガ	181	ナンキンイモ	189
デモダケ	175	トッガガヤ	181	ナンキンマメ	142
・テリハツルウメモドキ		トッガンホ	181	・ナンゴクウラシマソウ	
(ニシキギ科)	105	トッコンミ	229	(サトイモ科)	174
・テリハヘクソカズラ		トッサゴ	182	・ナンテン(ナンテン科)	190
(アカネ科)	238	トッノッ	183	・ナンバンギセル	
・テリミノイヌホウズキ		・トベラ(トベラ科)	184 160	(ハマウツボ科)	299
(ナス科)	203	トラゲン	185		
・テンサイ(アカサ科)	232	トンノッ	183	[ニ]	
				・ニガガシュウ	
				(ヤマノイモ科)	179
[ト]		[ナ]		・ニガキ(ニガキ科)	195
トイッガネ	186	・ナガイモ(ヤマノイモ科)	192 281	ニガクサ	140 252
トイノクソバナ	153	ナガシバナ	155	ニガクシ	252
トイモガラ	176	・ナガバモミジイチゴ		ニカゴ	192
・トウガ(ウリ科)	164	(バラ科)	56	ニカゴイ	191
・トウガラシ(ナス科)	88	・ナガミオニシバ(イネ)	108	ニガシッ	193
トウガン	164	・ナガミノハダカホオゾキ		ニガタキ	194
トウザイバナ	38	(ナス科)	203	ニガタケ	194
・トウモロコシ(イネ科)	178	ナキビシカズラ	186	ニガッダケ	244
ドカンス	177	・ナキリスゲ		ニガッノッ	195
ドカンスイゴ	177	(カヤツリクサ科)	126	ニガモッ	252 266
・トキワガキ(カキノキ科)	285	・ナシカズラ(マタタビ科)	91	・ニシキギズン(ギズン科)	165
・トキワススキ(イネ科)	181 251	ナスッ	187	ニガモモ	152
トキッ	178	・ナスビ(ナス科)	20 187	・ニッケイ(クスノキ科)	66
トキッノヨメジョ	178	・ナズナ(アブラナ科)	240	・ニラ(ネギ科)	196
ドクスッナ	180	・ナタマメ(マメ科)	145		

ヒトツバ	255	[フ]	ヘキコウボク	115
ヒナタザンショウ	103	ブイダラ	225	ヘクソカズラ (アカネ科)
ヒネカズラ	220	ブイダレ	225	・ヘゴ (ヘコ科)
ピーピーグサ	219	・フイリハクチュウゲ		ヘコハツ
ピーピーバナ	219	(アカネ科)	94	ヘットカズラ
ヒヒンダキ	219	・フウトウカズラ		ヘッノクシャツ
・ヒメイタビ (クワ科)	44	(コショウ科)	298	ヘッノシヤクシ
ヒメカズラ	220	・フウラン (ラン科)	101	ヘッノミ
ヒメガタシ	221	フクイ	226	ヘビイチゴ (バラ科)
・ヒメジョオン (キク科)	161	フケ	229	ヘビノガラン
ヒメバライチゴ (バラ科)	1	ブタイッゴ	177	ヘビノゴハン
・ヒメヒオウギズイセン		・フタイロツユクサ		ヘビノマクラ
(アヤメ科)	17 219	(ツユクサ科)	163	ヘビンス
・ヒメムカシヨモギ (キク科)	96 161	ブタウリ	212	・ヘラオオバコ (オオバコ科)
・ヒモゲイトウ (ヒコ科)	261	フタタキ	165	・ヘリトリササゲ (マメ科)
・ヒメユズリハ (ユズリハ科)	12	フタナレ	231	ベンタツ
ヒヤ	223	フダンザンショウ	249	ベンタブ
ビヤ	223	フダンス	232	ヘンノイッゴ
・ヒヤクニチソウ (キク科)	18, 43 157	・フダンソウ (アカサ科)	232	ペンベングサ
ヒヨドイノミ	222	ブチンカ	278	
・ヒヨドリジョウゴ (ナス科)	294	フツ	233	[ホ]
・ヒルムシロ (ヒルムシロ科)	217	フツイノツ	218	ボイバナ
ビールムギ	268	フツカズラ	228	・ホウショウ (クスノキ科)
・ビロウ (ヤン科)	92	フツチェックサ	229	ホウスバナ
ヒワ	223	フツツノツ	218	・ホウセンカ (ホウセンカ科)
ビワ	223	フツテンクサ	229	ボウブラ
ビンアライ	215	フツロコノツ	166	・ホウライチク (タケ科)
ビンカズラ	220	フデバナ	230	・ボウラン (ラン科)
ヒンカクニ	224	・フユイチゴ (バラ科)	177	・ホウロクイチゴ (バラ科)
ヒンカッコ	224	・フユザンショウ (ミカン科)	103 249	ホサノツ
ヒンカツ	224	フヨウ (アオイ科)	61	・ホシダ (オシタ科)
ビンコッコ	224	フロマメ	234	ホシヤノツ
ヒンコネ	224			・ホソバイヌビワ (クワ科)
		[ヘ]		・ホソバタブ (クスノキ科)
		ヘガラ	235	ホタルダケ

ポッポノッ	298	マムシグサ	174	ミルラン	257
・ホテイチク(タケ科)	85	・マルバシヤリンバイ		ミンダラ	265
ホトクイ	245	(ナシ科)	237	ミンダレグサ	265
ホトクイハッ	245	・マルバツルグミ(グミ科)	97	ミンソソボ	96 265
ホトクロ	245	マルバツユクサ		ミンナオシ	265
ホトケミン	246	(ツユクサ科)	163	ミンヤンノクサ	265
ボブラ	247	マルバシギ(マメ科)	213		
ボホー	248	・マルミノクチナシ		[ム]	
・ボロボロノキ		(アカネ科)	64	ムカゴ	192
(ボロボロノキ科)	282	・マルバルコウ		ムカジグサ	215
ホンザンシヨウ	249	(ヒルガオ科)	154	ムカゼグサ	215
ボンバナ	250	マンザイギク	260	・ムギ(イネ科)	268
ボンボイ	242	マンジュシヤゲ	180	・ムクゲ(アオイ科)	25 278
ボンボン	242	マンダラ	261	・ムクノキ(ニレ科)	272
ホンホンダケ	226	・マンリョウ		ムクヨ	267
		(ヤブコウジ科)	14 252	ムクロ	267
[マ]				・ムクロジ(ムクロジ科)	267
マカヤ	251	[ミ]		・ムサシアブミ(サトイモ科)	174
マゴヤシ	31 252	ミガシキ	193	ムッ	268
・マサムネゼキシヨウ		・ミズヒキ(タテ科)	95	ムグゲン	185
(シヨウブ科)	58	ミソチ	262	・ムベ(アケビ科)	28 259
・マスクサ(カヤツリグサ科)	126	ミソツ	262	・ムラサキホタルブクロ	
マツガネ	256	ミソツチ	262	(キキョウ科)	156
マツガネクサ	256	・ミソナオシ(マメ科)	100	ムラツツジ	297
マツコノッ	253	ミソヒツチ	262		
マツサッカズラ	254	ミソヒツチン	262	[メ]	
マツダゴ	255	ミソソツ	262	メイゲナ	269
マツネグサ	256	ミゾノバ(タテ科)	32, 49 96	メゴタケ	270
マツバグサ	256	ミツカズラ	186	メザンダケ	194
マツラン	257	ミツバツツジ	264	・メダケ(タケ科)	175, 194 244
マテガシ	258	・ミツバアケビ(アケビ科)	5	メツツパイ	58
マテノッ	258	ミツバゼ	262	メツパイ	271
・マテバシイ(フナ科)	258	・ミツバゼリ(セリ科)	262	メドリノキ	173
マホギ	259	ミバナ	265	メノキ	272
マボケ	259	ミミツンボ	96	・メヒジワ(イネ科)	245

メンノッ	272	〔ヤ〕	ヤマダケ	288	
		ヤイノミカン	10	ヤマダゴジロバナ	138
〔モ〕		ヤウンメ		・ヤマツツジ(ツツジ科)	296
・モウソウチク(タケ科)	275	・ヤエナリ(マメ科)	231	ヤマニンジン	290
モカイノッ	273	・ヤエヒメバライチゴ		・ヤマノイモ(ヤマノイモ科)	281
・モガシ(ホルトノキ科)	273	(バラ科)	1	・ヤマハゼ(ウルシ科)	201
モガシノッ	273	・ヤエムグラ(ヤエムグラ科)	274	ヤマビヤ	292
モガセ	273	・ヤクシソウ(キク科)	159 252	・ヤマビワ(アワブキ科)	292 285
・モウセンゴケ		・ヤグラオオバコ		・ヤマフジ(マメ科)	206 293
(モウセンゴケ科)	239	(オオバコ科)	39	ヤマフズキ	294
・モクゲンジ(ムクロジ科)	267	・ヤダケ(タケ科)	107	ヤマフズッ	294
モクヨ	267	・ヤツデ(ウコキ科)	12 279	・ヤマモガシ(ヤマモガシ科)	183
モグラクサ	274	・ヤツマタオオバコ		ヤマユリ	200
モクラモッ	274	(オオバコ科)	39		
モクロ	267	・ヤナギイチゴ(イラクサ科)	135	〔ユ〕	
モソダケ	275 185	・ヤナギタデ(タテ科)	140	ユイギ	298
モチイネ(イネ科)	276	・ヤブツバキ(ツバキ科)	221	ユイノッ	298
・モチノキ(モチノキ科)	297	・ヤブニッケイ		・ユキノシタ	
モッガワシロ	119	(クスノキ科)	170	(ユキノシタ科)	265
・モッコク(ツバキ科)	248	・ヤブヘビイチゴ(バラ科)	52	ユザンシウ	103
モッゴメ	276	・ヤブマメ(マメ科)	172	・ユズリハ(ユズリハ科)	12
モッサシノッ	272	ヤブレガサ	280	・ユスラウメ(サクラ科)	152
モツツナギ	272	ヤボフツチエンカズラ	206	ユダレクイ	299
モチカズラ	254	ヤマイモ	281	ユダレバナ	299
モネクワ	278	ヤマウメ	282		
・モモ(サクラ科)	216	ヤマガキ	285	〔ヨ〕	
モレイカ	60	・ヤマザクラ(サクラ科)	290 72	ヨシ(イネ科)	219
モレッカ	278	ヤマクサギ	72	・ヨウシュヤマゴボウ	
モレンカ	278	ヤマゴボウ	283	(ヤマゴボウ科)	24
モロ	277	ヤマゴンニャク	291	ヨードチンキノミ	74
モロノッ	296	ヤマザンシュ	284	ヨニガハッ	300
モロハ	277	ヤマサレン	286	ヨネガクサ	300
モロムキ	149	ヤマシッカッ	285	ヨネガハ	300
モロモロノッ	277	ヤマシウガ	286	ヨネガハッ	300
		ヤマジンチョ	287	ヨネガンハ	300

ヨネゲサ	300
ヨミジヨ	178
ヨメジヨキッ	178
ヨメジヨトキッ	178
・ヨメナ(キク科)	300
・ヨモギ(キク科)	233

〔ラ〕

・ラクウショウ(スキ科)	255
・ラッカショウ(マメ科)	142
・ラッキョウ(ネギ科)	143

〔リ〕

・リュクトウ(マメ科)	231
・リンドウ(リンドウ科)	157

〔ル〕

・ルコウソウ (ヒルガオ科)	154
-------------------	-----

〔レ〕

・レンゲソウ(マメ科)	301
-------------	-----

〔ワ〕

・ワケギ(ネギ科)	133
・ワラビ	302
ワラベ	302

〔ン〕

ンベ	206
----	-----

薩摩半島南西部に産出する植物化石について

山 本 英 司

本地域に植物化石が産出することは以前からこの地域の人々にとっては知られていたし、すでに宮園(1956)がその一部を報告している。植物化石は凝灰岩および層灰岩中に包有されているが、これらは南薩安山岩類(森田, 1958)——磯間山、亀ヶ丘および野間岳などを構成している岩石で、輝石安山岩類および集塊岩類と、さらに峯尾峠角閃石安山岩類を総称する——活動後の湖沼堆積物で局所的な分布をなし、中山(加世田市)、金山、山口および耳取峠(枕崎市)、椎ノ木(笠沙町)、車岳(坊津町)が知られている。また、これらの時代は層序的な面から新生代鮮新世後期から更新世初期とされている。今回は、中山・耳取峠および椎ノ木産の化石だけに限り、どんなものが産出するかを報告にとどめ詳細については次の機会を待つことにしたい。

植物の化石はほとんどが葉の化石であり、普通葉片が層理面に平行に埋蔵されている。しかし葉脈の跡だけが刻まれている場合が多く、保存状態が悪いので全形をとどめている例は少ない。また、種は非常に多いと思われるが識別が困難である。これらを調べることで地層の堆積年代や堆積環境を知る手掛りが得られるはずである。一般的には、中新世から鮮新世にかけ陸成層が発達し、これに伴ない多くの植物化石が産出する。中新世は阿仁谷型と台島型に二大別され、前者は温帯性落葉広葉樹を主とし針葉樹も含むが、後者は温帯性落葉、暖帯性常緑樹が主で針葉樹は少ない。また、中新世後期から鮮新世にかけては暖温帯常緑種は減少し、ブナ、カンバなどの冷温帯種が増す。特に、鮮新世は暖温帯種はほとんどなくシデなどの温帯種が多く、後期には冷温帯種がほとんどになる。更新世は漸移的にはあるが気候は冷涼化する。この時代の生物種の大部分は現生種またはこれに近い絶滅種も少なくない。

鹿児島県内では、錦江湾沿岸各地に分布する永野層および国分層などの堆積層に多くの植物化石を産出する。これらは層序的・岩石学的研究から更新世初期のものとされている。宮園は椎ノ木産として、*Pterocarya* sp(?), *Carpinus* sp(?), *Ulmus* sp(?), *Diospyros* sp(?)などを記載し、この凝灰岩層は国分層群相当層であるとしている。次に産地ごとの植物化石名を記す。

〔中山〕

- | | |
|---------|--|
| Fig 2 | <i>Acer uweharae</i> Kon'no |
| Fig 3 | <i>Cercidiphyllum eojaponicum</i> Endo(?) (カツラ) |
| Fig 4 | <i>Actinidiophyllum</i> sp. |
| Fig 5 | <i>Liriodendron honshuensis</i> Endo (ホンシューウリノキ) |
| Fig 6・7 | <i>Tilia</i> sp. (シナノキ) |
| Fig 8 | <i>Acer pictum</i> Thunberg or <i>Acer subpictum</i> Sap. (?) (イタヤカエデ) |

- Fig9・18 *Acer pictum* Thunberg (イタヤカエデ)
 Fig10・29 *Acer diabolicum* Blume (オニモミジ)
 Fig11 *Acer* sp. (カエデ)
 Fig12 *Magnolia elliptica* Tanai & Onoe (モクレン)
 Fig13 *Quercus* sp. (カシ)
 Fig16 *Liquidamber mioformosana* Tanai (フウ)
 Fig19 *Xelisma elliptica* Nakai (ネジキ)
 Fig24 *Ulmus* sp. (ニレ)
 Fig26 *Carpiniphyllum pyramidale* Goppert (エノキ)
- 〔耳取峠〕
- Fig1 *Tilia japonica* Simk. (シナノキ)
 Fig2 *Cornus controversa* Hemsley (ミツキ)
 Fig3 *Platanus aceroides* Goeppert (カエデスズカケノキ)
 Fig4 *Castanea crenata* S. et Z. (クリ)
 Fig5 *Salix* sp. (ヤナギ)
 Fig6 *Fagus crenata* Blume (ブナ)
 Fig7・8・11 *Quercus* sp. (カシ)
 Fig10 *Acer* sp. (カエデ)
Myriophyllum verticillatum Linne (フサモ)
- 〔椎ノ木〕
- Fig1 *Cinnamomum* sp. (クス)
 Fig2・5 *Quercus* sp. (カシ)
 Fig3 *Styrax* sp.
 Fig4 *Ulmus* sp. (ニレ)
 Fig7 *Carpinus erosa* Blume (サハシバ)
 Fig8 *Fagus* sp. (ブナ)
 Fig9・10 *Carpinus* sp. (シデ)

中山はカエデを中心とした落葉広葉樹の大型葉片が多く、針葉樹は認められないし、温帯種が多い。椎ノ木は落葉樹の小型葉片が多く、カエデなどの大型葉片、針葉樹は認められず、大部分のものが温帯種である。また、耳取峠には温帯種と暖帯種との混入が認められる。すなわち、本地域に産出する化石は暖帯や温帯に繁茂している植物、特に温帯種が多いのが特徴である。これに寒さを好むカエデ、ヤナギ、ブナなどがまじっている。上述したように、落葉広葉樹がほとんどであり針葉樹は全く認められない。現在この地域ではブナなどは認められず、霧島などの1000 m以上の山地に生育しているのを考えると、当時の気候は幾分寒冷であつたろうと思われるし、さらに温帯、暖帯種の混入を考えると、現在より夏冬の気温差が小さく、しかも夏はいくぶん低

温で 逆に冬は高温であろうと思われる。時代的には中新世後期から更新世初期の範囲内と考えられるが、断定的なことは言えない。また化石種が異なること、岩石の質が異なることなどを考えあわすと、中山・椎ノ木・耳取峠の堆積層は時代的には少しずつ間隔があるとも考えられるので、さらに詳しく追求したいと思う。中山の化石採集に際して、ご協力をいただいた中村勉氏に対して感謝の意を表する。

文 献

Asano Kiyoshi : A Survey of the fossils from Japan
Illustrated in Classical Monographs
日本古生物学会

遠藤誠道：日本産化石植物図譜，産業図書株式会社

遠藤隆次（1966）：植物化石図譜，朝倉書店

小泉源一（1940）：塩原更新世植物叢，植物分類・地理，第9巻，第1号，p 1-27

宮園 亨（1956）：鹿児島県野間半島の地質，鹿児島大学文理学部卒業論文（手記）

山本温彦・他3名（1969）：鹿児島県薩摩半島南西部，野間半島および加世田～枕崎地域の地質，鹿児島大学理学部紀要，第2号，p 15-25

生 物 部 員 名 簿

顧問：佐方敏男・山本英司

〔 3 年 〕

田 中 洋 海
大 迫 祥 三
金 竹 修 一
浜 川 知 博
山 口 力 三
有 馬 満 代
大 島 靖 子
小野田 章 子
阪 本 京 子
崎 山 順 子
崎 山 民 子
田 実 初 子
樋 渡 祥 子
前 田 久美子

〔 2 年 〕

阿久根 雄 二
大 工 和 清

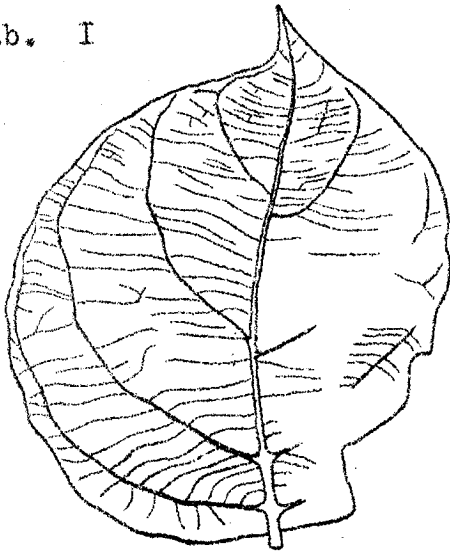
窪 淳 郎
山 口 秋 生
下 園 弘 子
園 田 米 子
前 田 米 子
中 間 睦 子
本 田 ゆみ子
西川路 孝 子
森 永 香代子
松 田 芳 子

〔 1 年 〕

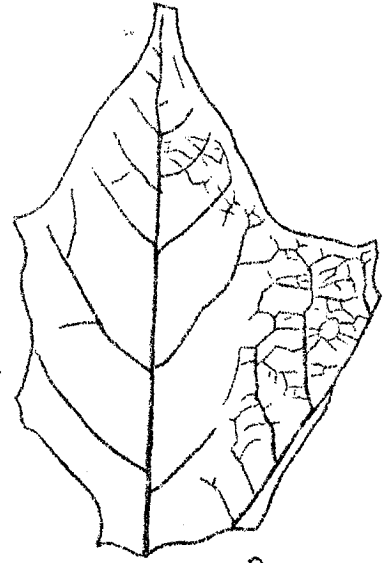
浜 川 睦 文
木佐貫 彰
神 野 辰 郎
本 坊 徳 光
阿久根 美智代
金 竹 美代子
宮 野 絹 子

1971年1月現在

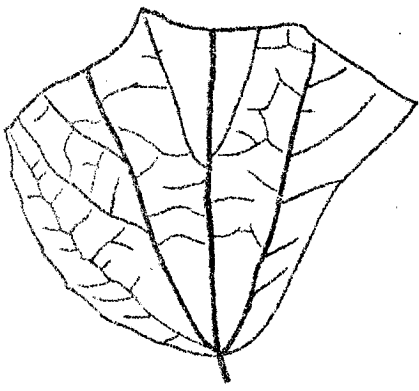
Tab. I



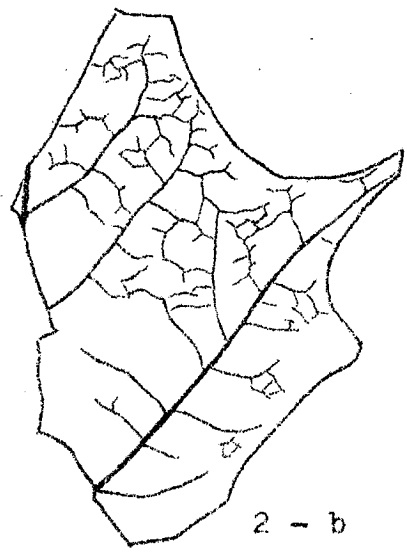
I.



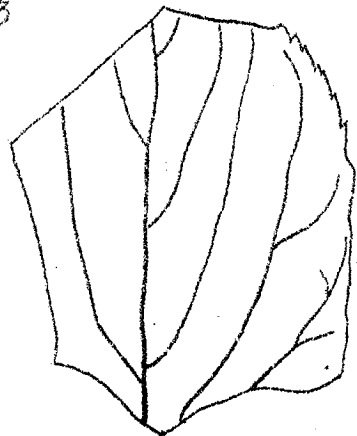
2 - a



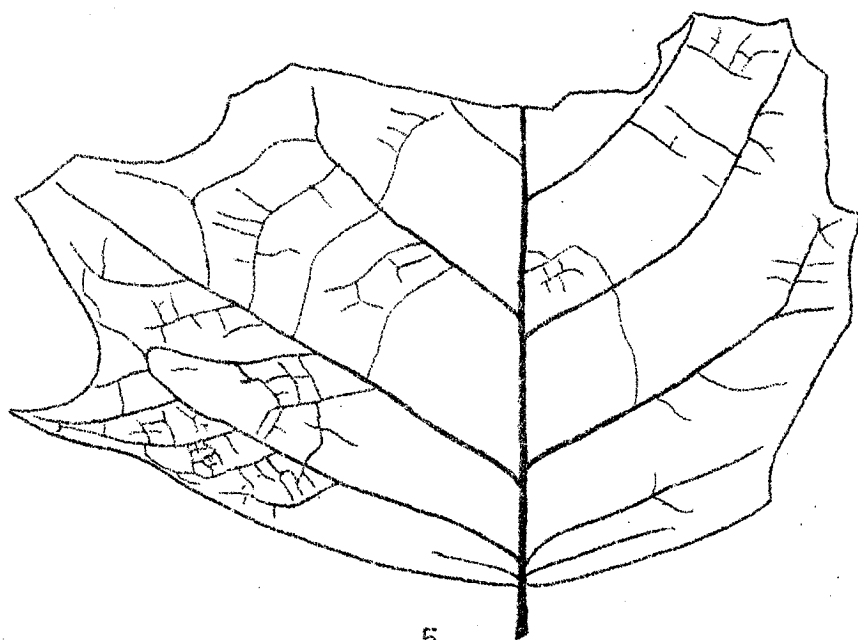
3



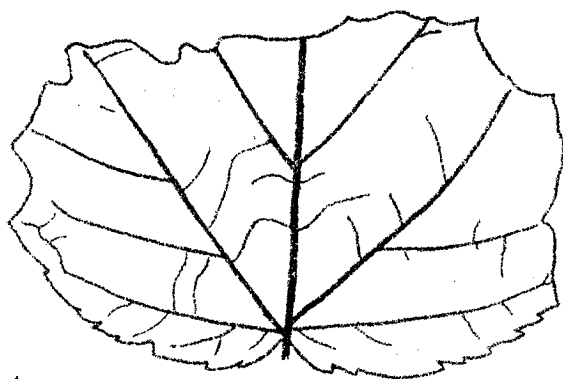
2 - b



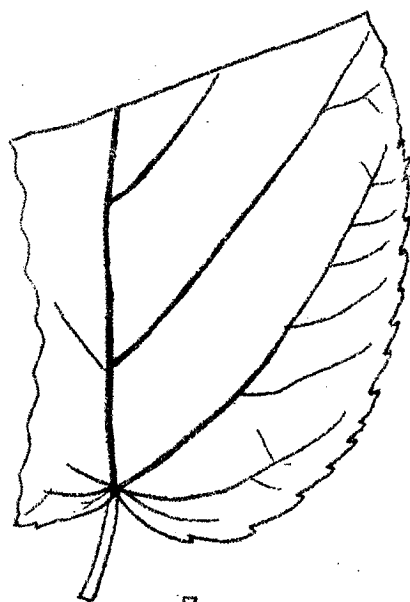
4



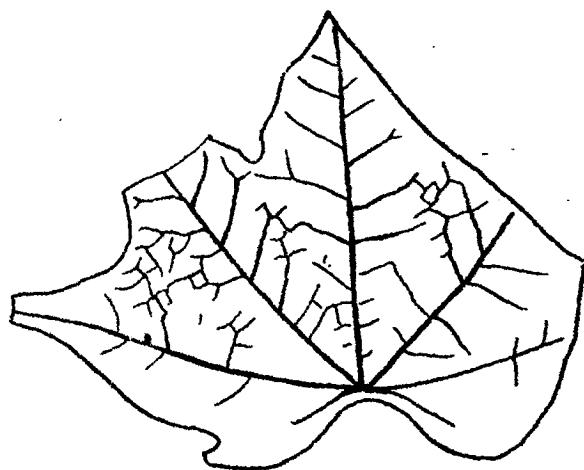
5



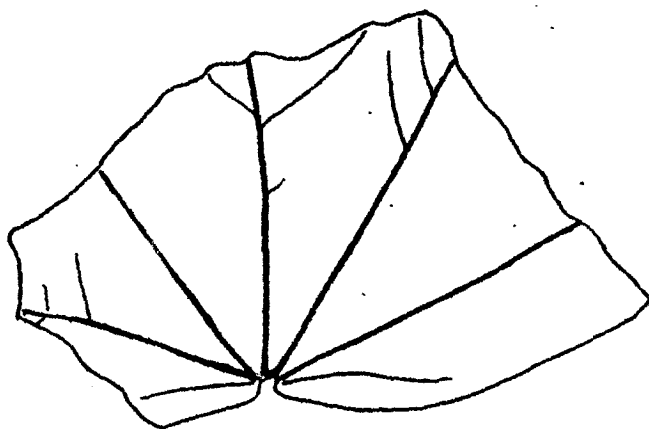
6



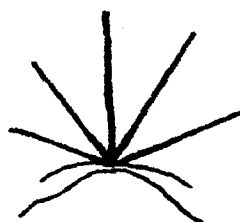
7



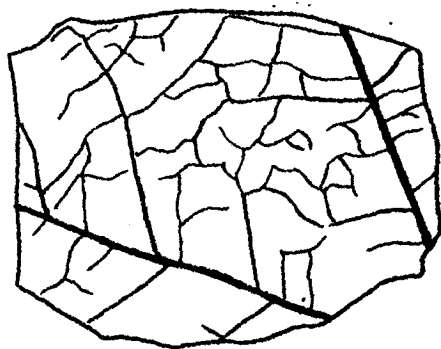
8



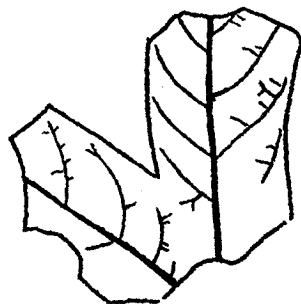
9 - a



9 - b

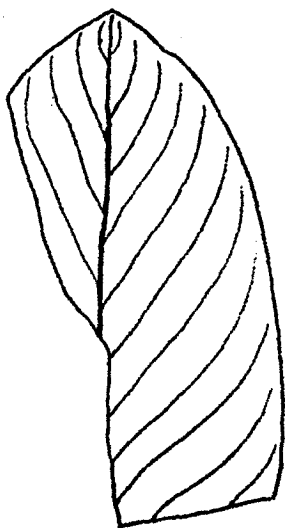


10

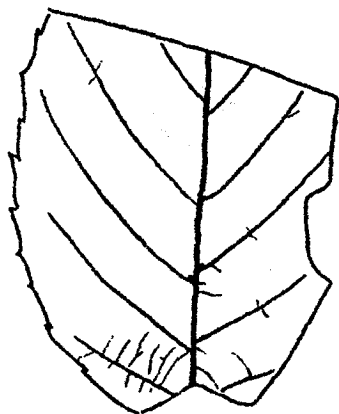


11

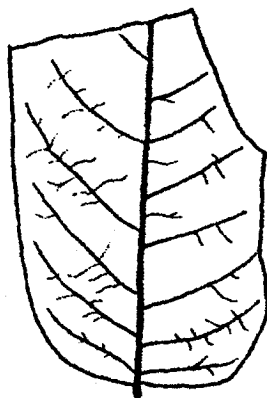
Tab. 4



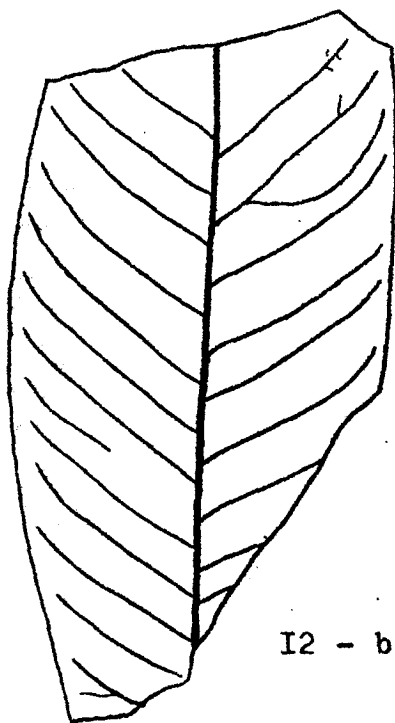
I2 - a



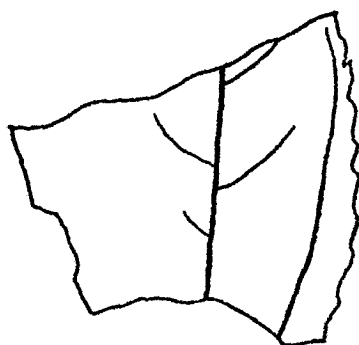
I3



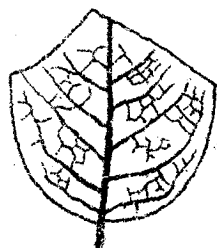
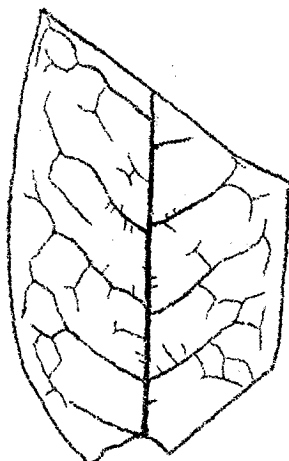
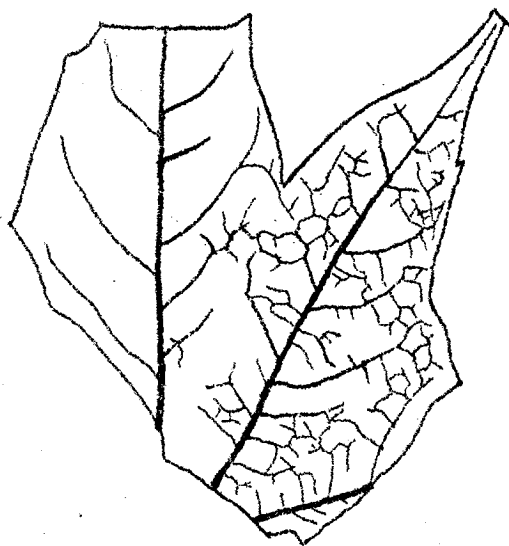
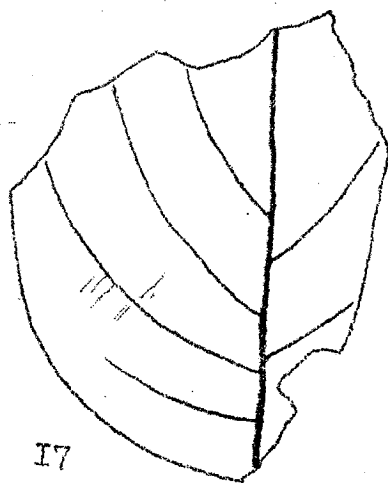
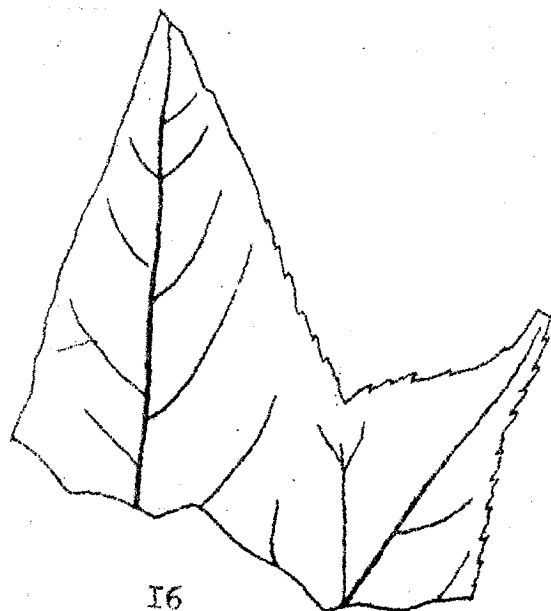
I4



I2 - b



I5



20

21

22

23

I3

I6

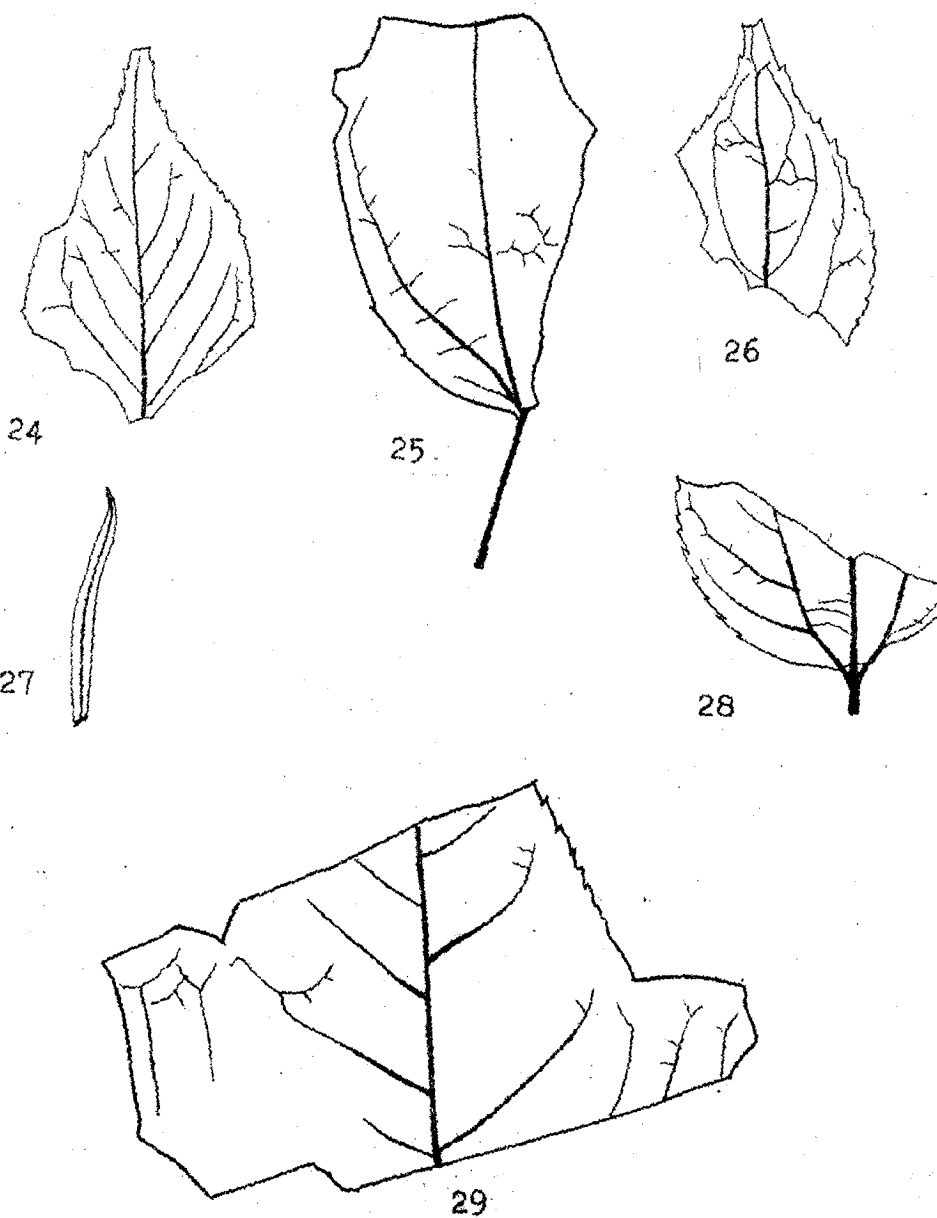
I7

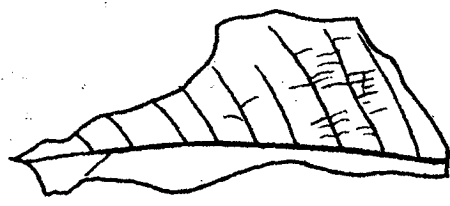
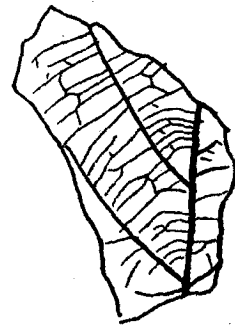
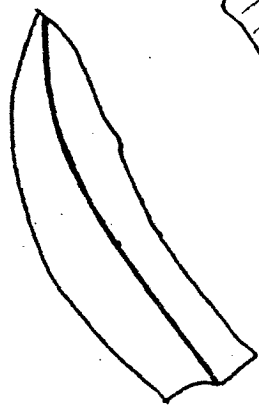
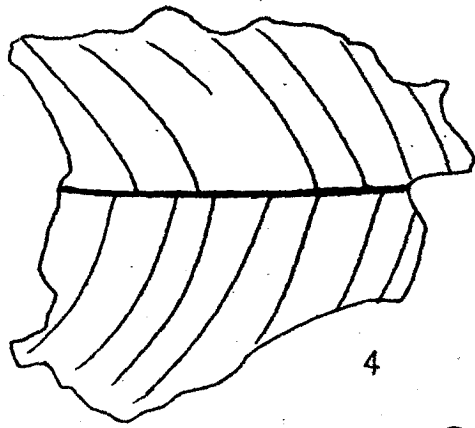
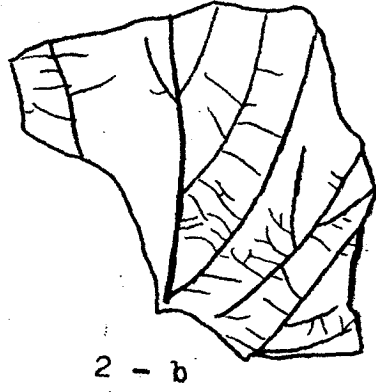
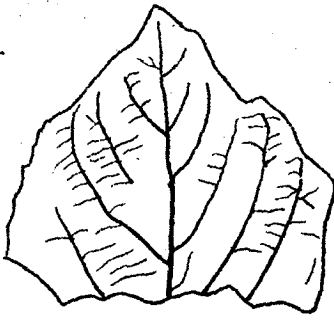
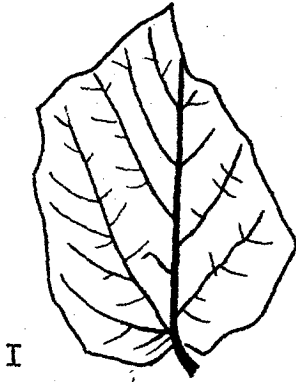
I4

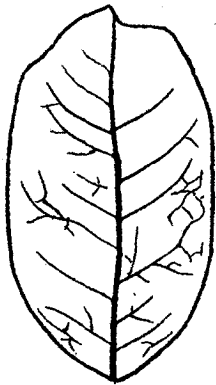
I9

5

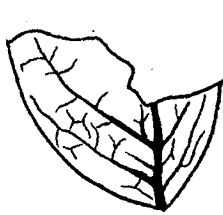
Tab. 6



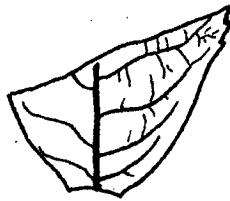




7



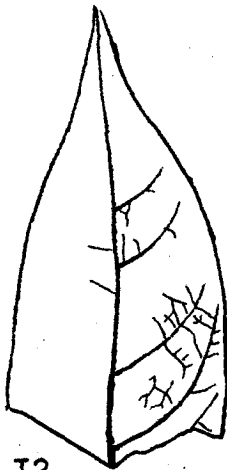
8



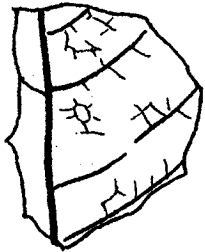
9



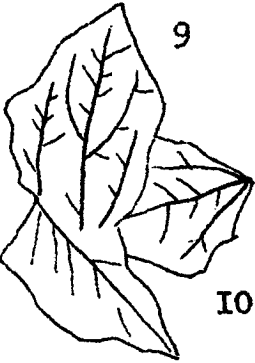
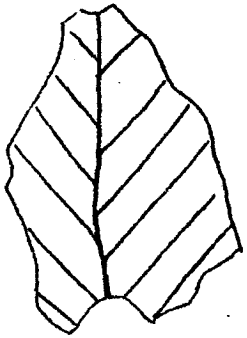
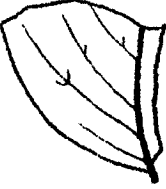
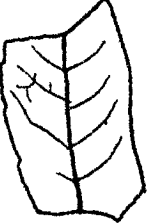
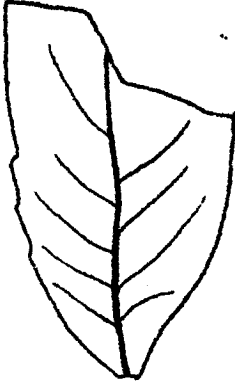
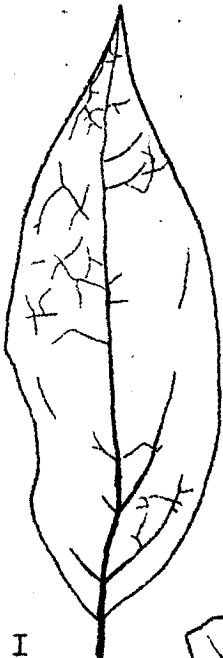
10

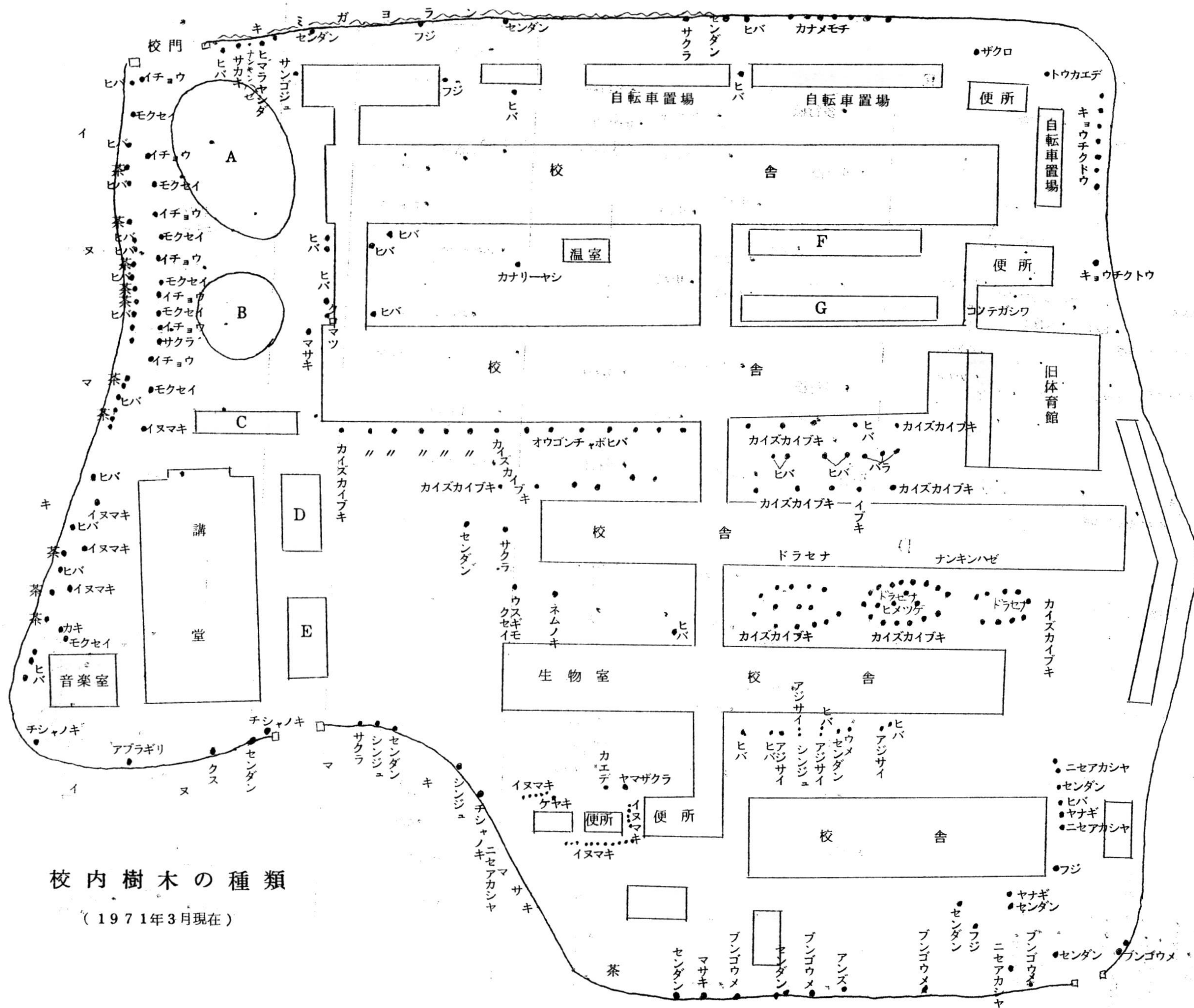


12



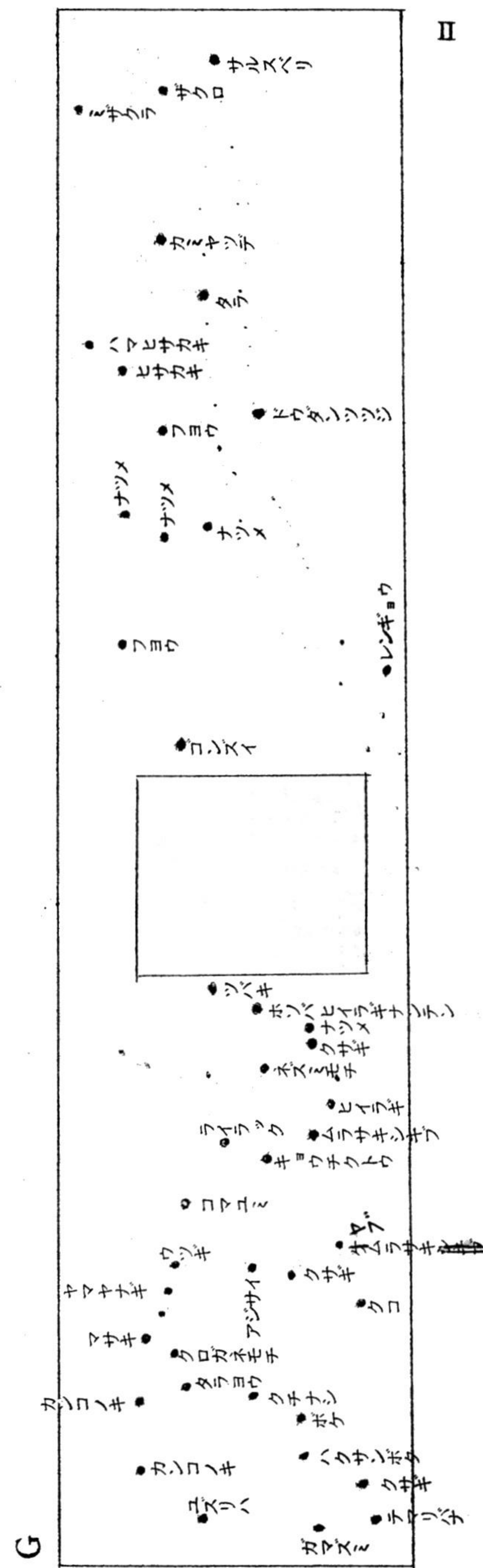
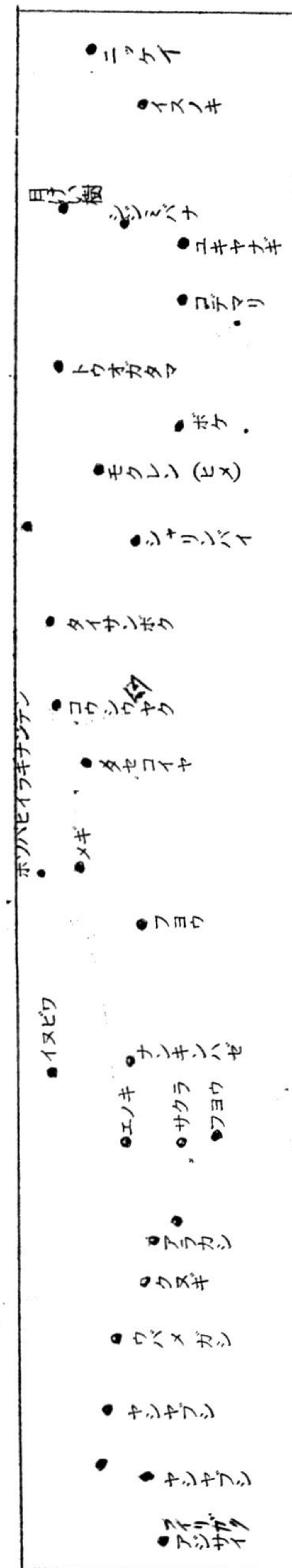
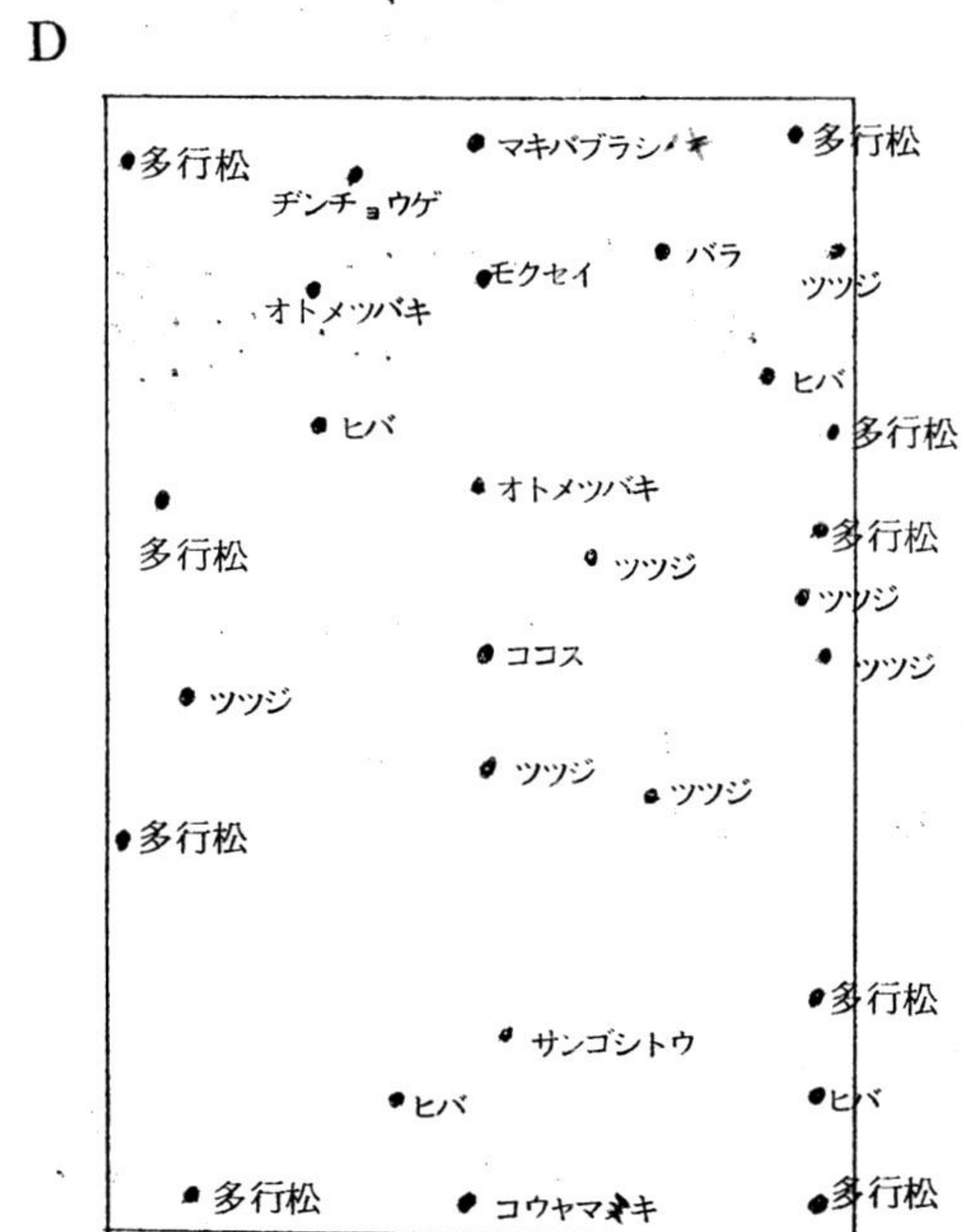
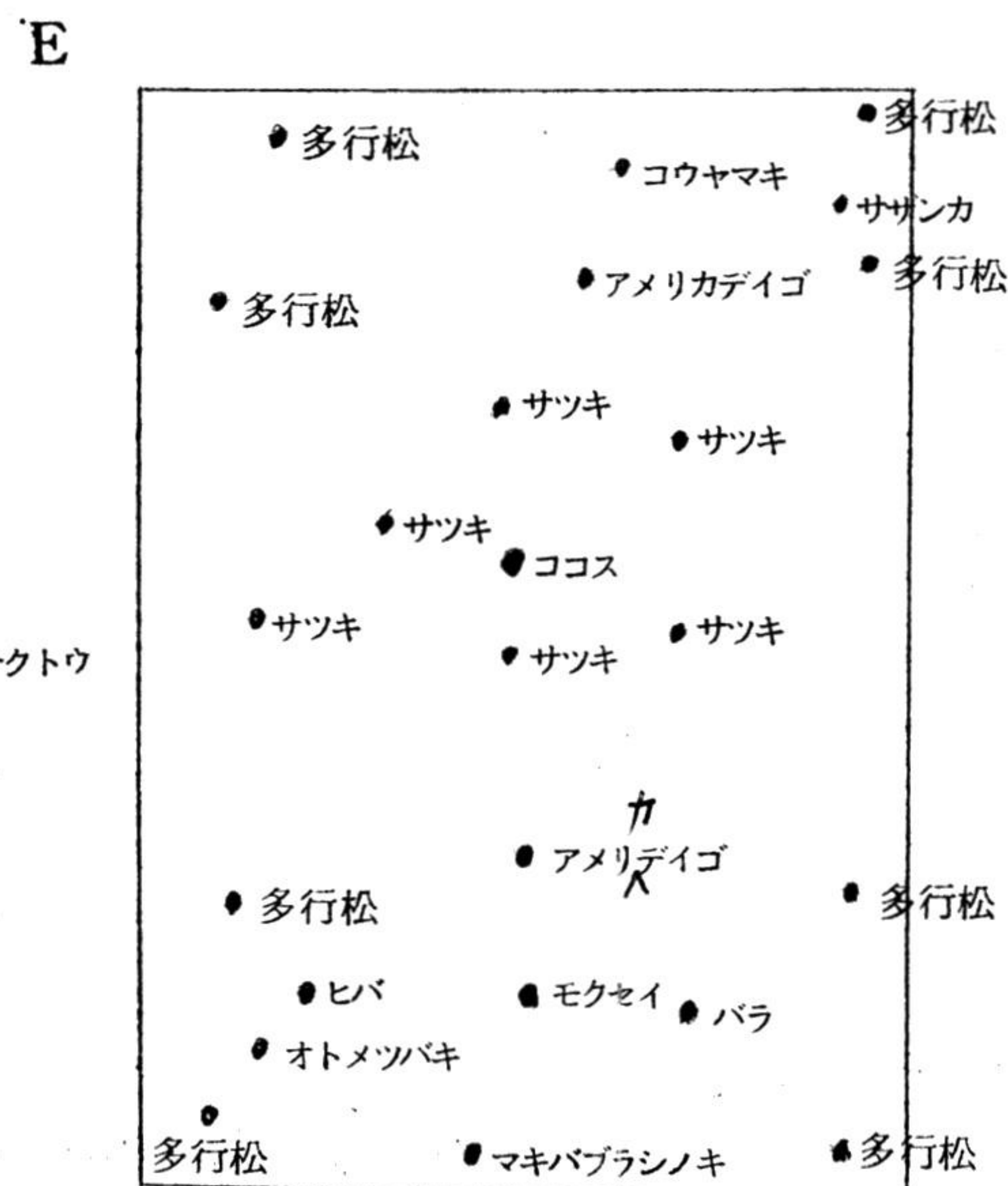
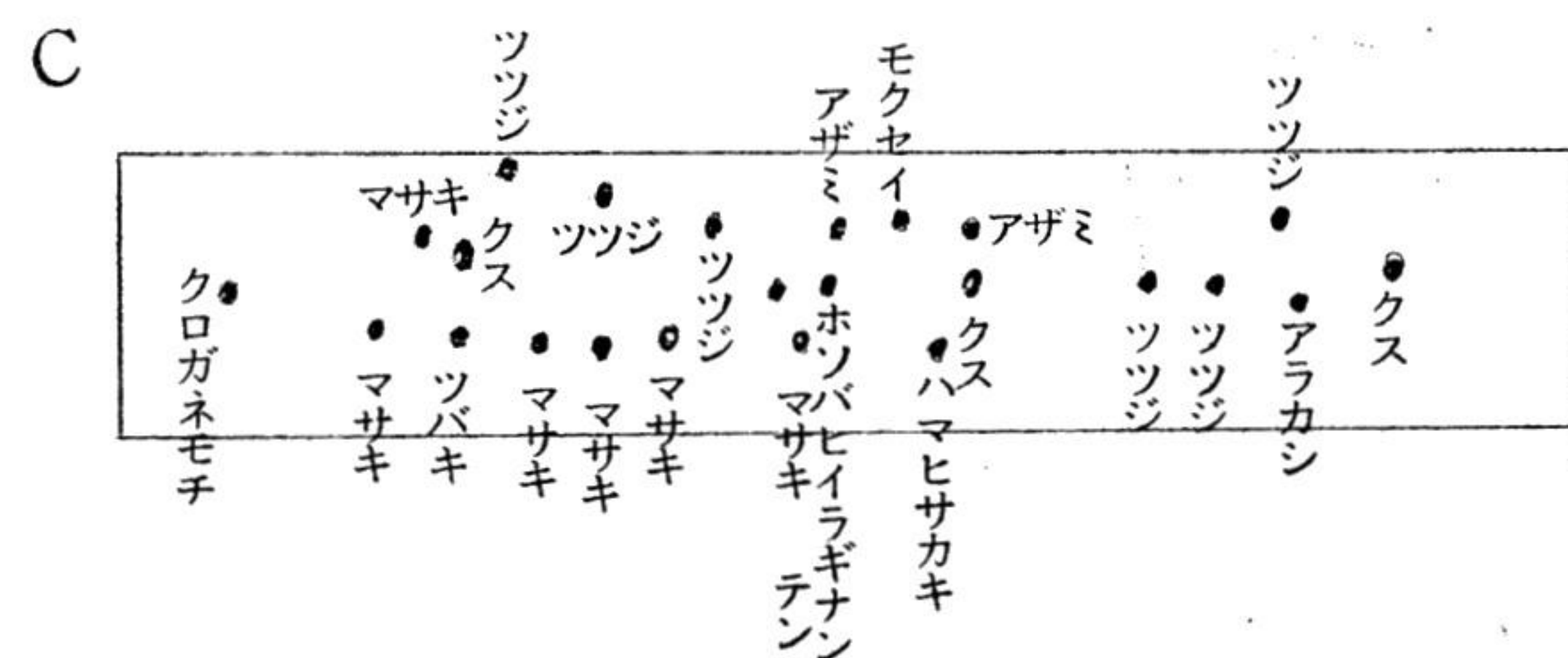
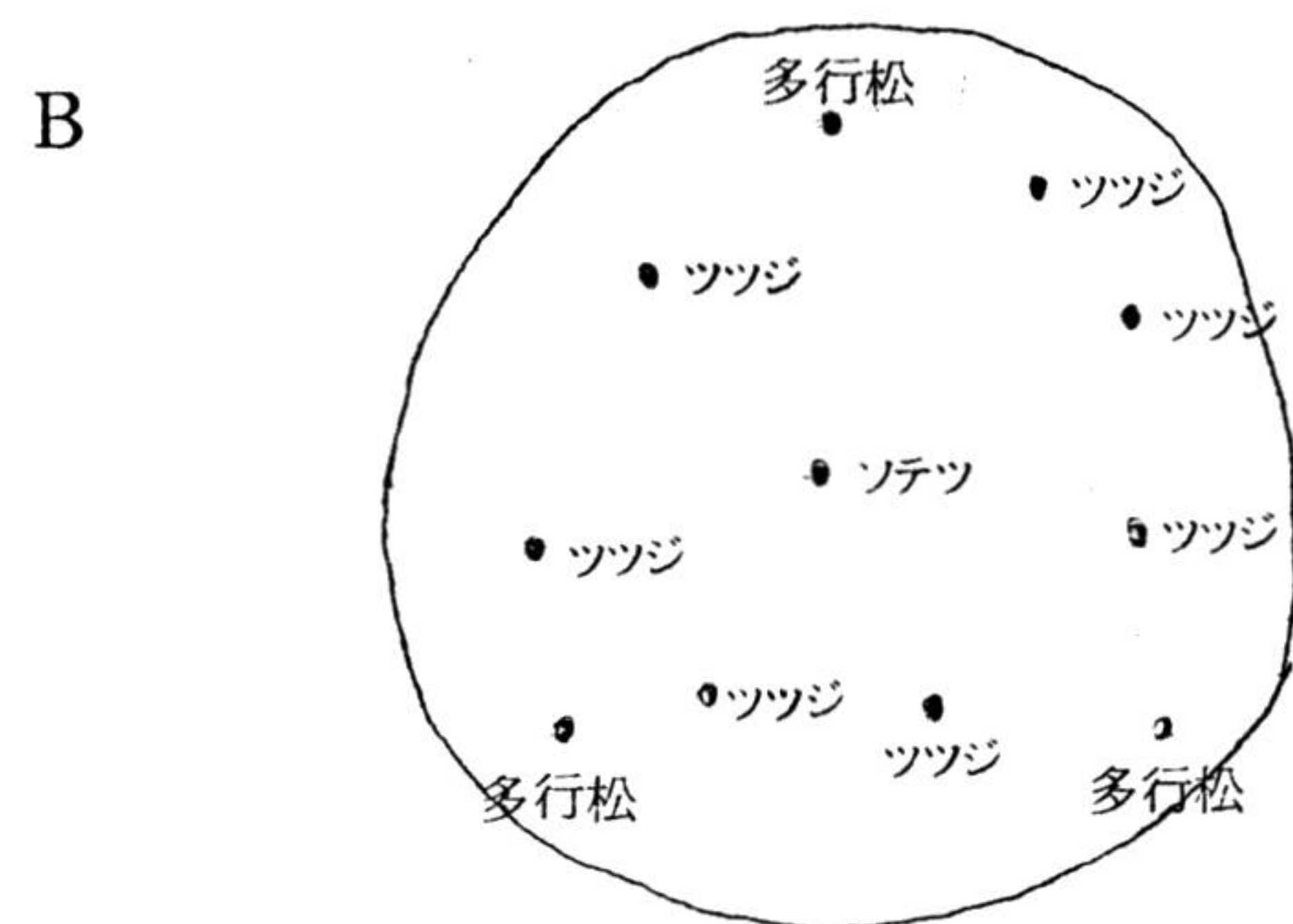
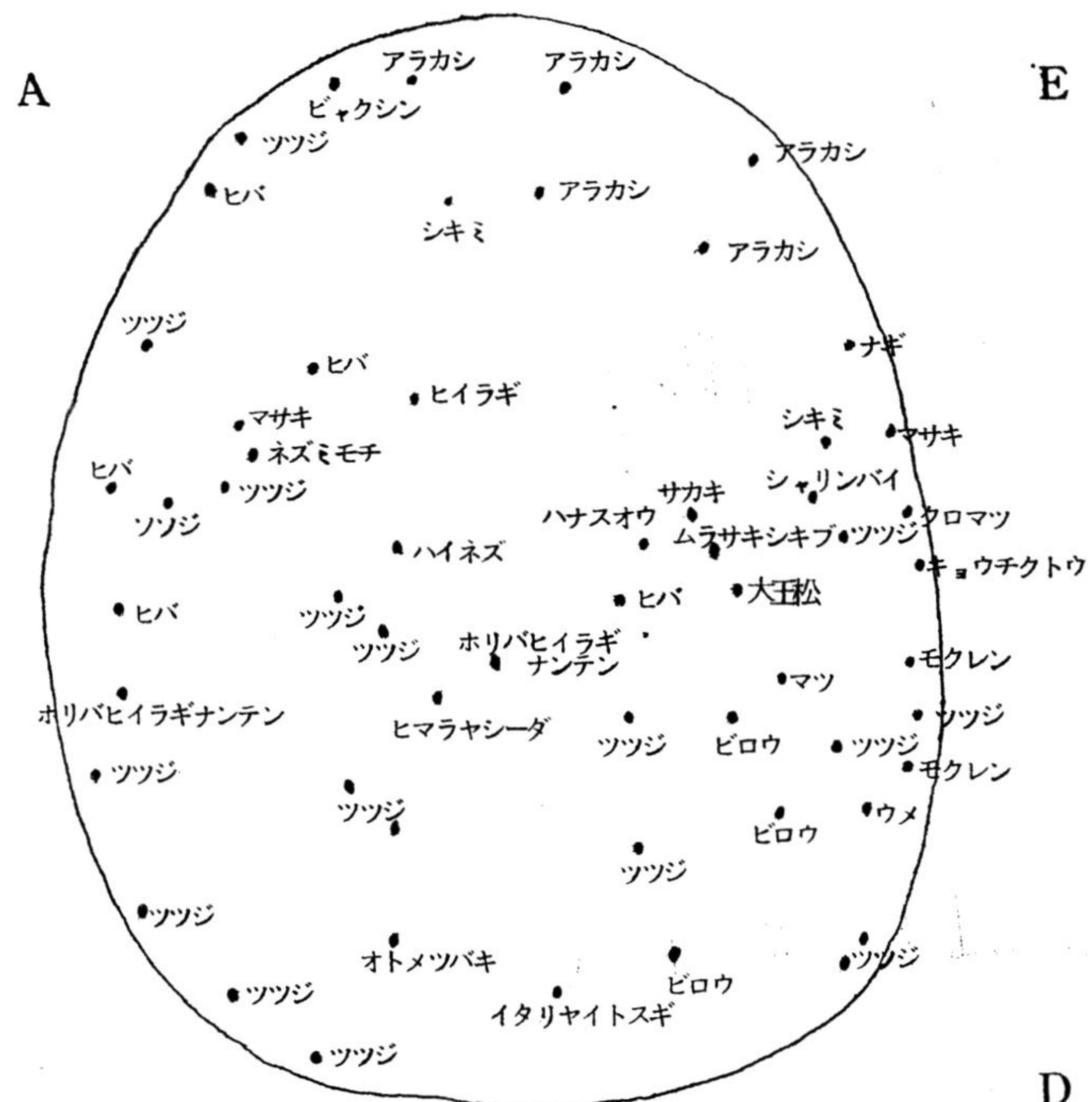
11





校 内 樹 木 の 種 類

^k
f. (1971年3月現在)



—— 編 集 後 記 ——

「まのせ」も今年で8才になり、大変嬉しく思っています。「まのせ8号」のこれらの記録は、部員が少しぐらいきかない谷川の水も飲み、またある時は、無断で田や畑に立ち入り、叱られもしながら調査し、観察したものばかりです。内容も興味あるものばかりだと思います。

そして、この「まのせ」の火が、いつまでも絶えることなくいつまでも続くことを希望します。最後に「まのせ8号」編集にあたり、顧問の先生方及びに、諸先輩の方々の御協力に深く感謝し、今後ともよろしくおねがいたします。

2年 山 口 秋 生

鹿児島県立加世田高等学校生物部機関誌 まのせ8号

発行日：1971年3月31日

発行者：鹿児島県加世田市川畑 加世田高校生物部

編集者：山口秋生 大工和清 阿久根雄二

印刷：鹿児島市城山町12-17 明るい窓社

(TEL(22)8335)

評価問題・教育教材印刷

明るい窓社

☎ 2895・8335

かごしま / 城山町12-17

正誤表

頁	行	誤	正
ト	4	ヒナゲシ草	ヒナゲシ
7	國中	カナリヤーン	カナリーヤシ
40	14	リクス	ソクス
42	16	読ん	読む
44	6	馬喰	馬
46	16	本坊憲光	本坊徳光
53	11	花地る	花地 _ミ
55	12	農桑通説	農桑通説
"	24	本草図経	蜀本草図経
"	29	張業	張華
"	30	以	以 _艾
58	16	音便ニ曲リシ	音便ニ曲リシ
59	21	名用	名月
60	6	俳句	狂句
62	34	(298)	(297)
65	11	苗 _千	苗 _子
66	6	か _キ	か _ヤ
"	12	檜華下	檜華 _籬 下
"	15	長八本	長八 _木 檜
67	18	若 _一	若 _シ
68	_{下カウ} 5	草年草	夕 _夕 年草
71	18	汁ヲ伝ク	汁ヲ傳ク
"	_{下カウ} 2	右は	下 _下 は
"	"	左は	上 _上 は
73		イブスツバナ100	イブスツバナ18
80		(イネ)	(イネ _料)
84		ヤツマタオオバコ	ヤツマタ _ヘ オオバコ
86	_{下カウ} 4	ホンシューウリノキ	ホンシュー _{ユリ} ノキ
20	23	boeticus	boeticus